

# 目 次

献呈の辞……………国際教養学部長 日 下 隆 平 3

## 論 文

〈女らしさの神話〉とハリウッド・シェイクスピア

——1967年の『じゃじゃ馬馴らし』——

……………小 野 良 子 5

インプット重視の文法指導

……………島 田 勝 正 37

The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion:

Hawthorne's "The Minister's Black Veil: A Parable"

……………SASAKI, Eitetsu 53

*Jane Eyre* におけるヒロインの願望と選択

……………吉 田 一 穂 89

Simulation and Educational Technology

for Foreign Language Learning

……………IWASAKI, Irene 111

トロロープとアイルランド:

Palliser series におけるアイルランド (1)

……………藤 居 亜 矢 子 123

*Nineteen Eighty-Four*:

Decency の追求とその挫折

……………谷 山 智 彦 155

研究ノート

語法覚書……………都 築 郷 実 195

書 評

沢木耕太郎『キャパの十字架』

(文藝春秋, 2013年, 335頁) ……軽 部 恵 子 223

中井紀明教授略歴…………… 231

中井紀明教授主要著作目録…………… 233

# 〈女らしさの神話〉と ハリウッド・シェイクスピア

——1967年の『じゃじゃ馬馴らし』——

「女というものは黙っていれば馬鹿にされるのです。」  
(『じゃじゃ馬馴らし』, 3幕2場209—10行)<sup>1</sup>

小野良子

序

1. 〈女らしさの神話〉：1950年代アメリカの女性たち
2. 第二波フェミニズムの始まり：1960年代アメリカの女性たち
3. ハリウッド・シェイクスピアの限界：ゼフィレッリの『じゃじゃ馬馴らし』

結

注

文献目録

## 序

シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』(*The Taming of the Shrew*)が上演されたのは、1594年、ニューイントン・バッツ (Newington Butts) の舞台である。劇の主筋は、気性の荒いカタリーナの結婚を中心に展開し、彼女の持参金目当てに結婚するペトルーチオが野生の馬を調教し、飼い馴らすかのようにカタリーナを「教育」し、従順な妻に変貌させて終わる。

---

キーワード：女らしさの神話，シェイクスピア，じゃじゃ馬馴らし，  
ハリウッド映画，フェミニズム

ペトルーチオと父親との取り決めで強引に結婚させられたカタリーナは、結婚直後から、食事抜き、眠ることも許されず、ペトルーチオの横暴と奇行に神経をすり減らし、ついにはたとえ理不尽ではあっても、夫の意志と決定に従う〈理想の妻〉の役割を受け入れる。カタリーナは結婚が決まった時、ペトルーチオを軽蔑し、「こんな頭のおかしな乱暴者、口汚く怒鳴り散らせば何でも押し通せると思っている男」（2幕1場280-82行）、と父親にくっついてかかっていた。結婚式の後の祝宴に参加せずに花嫁を連れ帰ろうとする夫ペトルーチオにカタリーナは怒りを露わにし、夫の無礼さを客の面前で批判し、罵倒した。しかしながら、徐々に、「私をいじめればいじめるほど、あの人の意地悪はひどくなる」（4幕3場2行）ことに気付いたカタリーナは、夫が太陽を「月だ」と主張しても受け入れることが得策だと決意する（4幕5場1-22行）。そして、終幕にカタリーナが「夫は私たちの主人、私たちのいのち、私たちの保護者、私たちの君主」（5幕2場147-48行）と、周囲の女たちに説教する時、エリザベス朝の観客が眼にするのは、教会の説教の中でも繰り返し言及されている、「あるべき妻」の姿である。主従関係が厳密に規定されているエリザベス朝の社会体制の中で構成された『じゃじゃ馬馴らし』は、「女らしくないし、もちろん男でもない」、〈逸脱した女〉——エリザベス朝社会ではモンスターの範疇に入れられる存在——を正常化し、体制の枠組みに戻して、社会秩序の〈再生と復活〉を祝う喜劇である。

では、男女同権を訴える女性解放運動が拡大していく1960年代のアメリカで、フランコ・ゼフィレリが映画化した『じゃじゃ馬馴らし』はどのような世界を構築して見せたのか。本論では、まず、1950年代と1960年代のアメリカ社会を概観し、当時のアメリカ女性の現実を追う。そして最後に、ゼフィレリの『じゃじゃ馬馴らし』をアメリカ社会の現実と比較しながら、再検討する。

## 1. 〈女らしさの神話〉：1950年代のアメリカの女性たち

### 働く女性

第二次世界大戦で男たちが戦場に駆り出されると、女たちが労働力不足を補うために生産現場に動員されていく。<sup>2</sup> 軍需と民需を合わせて戦時中は800万人の女性労働者がいた。1940年から45年までの間に、女性の労働人口は50%以上も増加した。新たに増えた女性労働者の4分の3が既婚女性で、大多数が学齢期の子を持つ母親だった。政府は防衛産業で働く母親のために、保育所を提供し、保育支援を行った。戦争が終結すると、戦時用の工場が閉鎖される中、1200万人もの男性兵士が戦場から帰国し、女性労働者は製造業から大量に解雇される。そして、労働人口に占める女性の割合は、1944年の36.5%から1947年の30.8%へと減少した。しかしながら、女性の就業率は1948年から再び上昇し始め、1952年には戦時下の生産のピーク時よりも200万人多い既婚の女性労働者がいた。

1950年代は独身女性の雇用が急増し、女性の実質賃金の上昇や女性の雇用への障壁が緩和された時代だった。1950年代の終わりには、16歳以上の女性の40%が仕事に就いていた。戦後、事務職、教職、看護職、小売業といった女性の職種が爆発的な伸びを示していた。大戦から帰った男性兵士たちは、復員兵援護法によって奨学金を得て、大学や高校で学ぶ機会を与えられたが、就学中の家族手当は不十分な支給額で、妻たちは家計の不十分を補うために働く必要が生じた。1940年から60年の間に働く母親の数は400%も増加し、1960年までには18歳以下の子供を持つ女性が全女性労働人口の三分の一近くを占めるようになっていた。戦後の若い女性は早く結婚して専業主婦の道を選び、子供の数も多かったが、出産の早いスタートと出産間隔の短縮で、1950年代までには女性が最後の子供を産む年齢の平均は30歳になっていた。ほとんどの女性が30歳代後半になるまでに一番下の子供が就学年齢に達したので、仕事に就くことが可能になっていた。しかし、1950年代と60年代初期に働き始めた既婚女性は、高卒のロウアー・ミドルクラス、または労働者階

級の女性だった。ミドルクラスやアッパー・ミドルクラスの女性にとっては、「エリートの男性と結婚し、郊外の高級住宅の専業主婦」<sup>3</sup>が理想の選択だった。

アメリカ経済は1945年から60年までの間にGNPは250%の伸びを示し、国民一人当たりの収入は35%増加した。1947年から57年の間に、サラリーマンの数は61%増加し、1950年代半ばころまでには、人口の60%近くがミドルクラスの収入レベル（3000ドルから1万ドル）に達していて、<sup>4</sup>1960年までには総世帯数4400万戸のうち、3300万戸がマイホームを持ち、87%がテレビ、75%が車を所有するようになっていた。特に、マイホーム所有は政府の規制緩和と助成の拡大によって可能になった。第二次大戦以前は、住宅の分割払いの頭金を50%要求する銀行が多かった。また、返済期間は5年から10年が普通であった。しかし、戦後、復員兵援助法に支えられ、政府住宅機関（FHA）は一戸建て住宅の建設に対して、民間のローンを保証したり、規制する責任を国に負わせた。FHAは分割払いの頭金を住宅購入価格の5%から10%でよいとし、担保も2%から3%の金利で最高30年まで保証した。復員軍人庁は復員兵の場合、頭金は現金でわずか1ドルでよいとした。この結果、多くの家庭がマイホームを獲得できたのである。

また、政府資金に基づく研究開発によって新しい建築資材——アルミの羽目板、プレハブの壁と天井、ベニヤ板など——が誕生し、プレハブ住宅が開発されて、大規模な住宅地が郊外に建設された。<sup>5</sup>新興の郊外住宅地は都心と幹線道路で結ばれ、都市部州間高速道路は郊外住宅地のための通勤道路の役割を果たした。1947年に政府は全長3万7000マイルに及ぶ新しい幹線道路建設計画を推進、1956年には州間高速自動車道法によってさらに4万2500マイルの道路建設が決定された。しかも、この建設費用の90%は国庫支出だった。そして、この道路建設事業により最大の恩恵を受けたのは郊外住宅の住民だった。新規の住宅建設は1950年代を通して年間150万戸という状態が続き、その85%が郊外に建設された。そこでは、夫婦と子供の核家族が、戦後アメリカの未曾有の豊かさを享受し、新しい家族の価値観を形成していた。<sup>6</sup>

〈女らしさの神話〉

1950年代のアメリカでは、女性も男性も自分のアイデンティティと自己イメージを家庭内での役割や親としての役割にみいだすことを社会から要求されていた。女性の間では、家事が〈女らしさ〉と個性の表現手段であると考えられる傾向が強くなり、あらゆる階層の女性が不必要なまでに家事労働を増やし、また子供の世話に時間を費やした。1950年代に普及したテレビはミドルクラスのホームドラマの中で、聡明で美しい専業主婦を「理想の女性」として描いた。『うちのママは世界一』、『陽気なネルソン』、『パパは何でも知っている』などの人気ホームドラマに登場する女性は白人専業主婦で、白人ミドルクラスの人々が日常に体験する家庭内の小さなトラブルを解決していく。彼女たちは明るく聡明だが、その聡明さは家庭内の問題解決に発揮されるだけで、しかも、夫の協力のもとに解決するという限定的能力しか、持ち合わせていない。ホームドラマの中の主婦はほっそりとした体形を強調するウェストを絞った服を着て、フリルつきのエプロンをつけ、かかとの高いパンプスを履いて優雅に家事をこなしていた。「健康で美しく、教養が高く、夫と子供と家庭のことだけを心配すればよかった」<sup>8</sup>「理想の女性」として専業主婦を称賛する社会的メッセージが増殖する社会で、当時の若い女性たちが希望する将来像は意図的に方向づけられていった。

「郊外住宅の主婦」はアメリカの若い女性が憧れる姿となった。たとえば、1945年から60年の間に大学に入学した女性ですらも、彼女たちの夢は立派な夫と子供をもち、きれいな家に住むことになっていた。〈女らしさ〉を賛美する風潮に影響を受け、女子高等教育の指導的立場にある名門女子大学までが、女子高等教育の目的を「有能な女性を啓発して、より広い世界をしらせるかわりに、家と子供の狭い世界に順応」させること、と考えるようになっていた。1950年代末に、アメリカの女性の平均結婚年齢は20歳に下がった。大学での女子学生の比率は、1920年の47%から1958年には35%に下がった。かつて女性は高等教育を受けるために闘ったが、1950年代の女性は結婚相手を見つけるために大学へ通うようになった。1955年頃には、女子大学生の60

%が「結婚のため」、または、「学問をすると結婚の邪魔になる」という理由で退学した。<sup>9</sup> 少数の女性しか物理学者や哲学者、医者、弁護士、政治家、大学教授などの専門職に就こうと希望しなかった。<sup>10</sup> 1950年代、成績優秀な女子学生ですら、郊外住宅の専業主婦になり、母になる以上の希望を持たなかった。メロン財団が1956年に発表した、ヴァッサー女子大学生の生態調査研究の報告では、名門女子大学の女子教育の劣化が明白になった。<sup>11</sup>

主婦以外の職業に就こうと決意しているものはきわめて少ない。三分の一ぐらいの学生は大学院に残って教育方面の職業に就こうと考えている。だがそれでも、家庭生活と両立できなければ職業を続けていく気持ちはない。女権拡張運動が盛んだった時代に比べれば、時代の要求があるにもかかわらず、法律とか医学の激職に就こうと志しているものは、ごく稀である。<sup>12</sup>

〈女らしさ〉を賛美する風潮のもとに、妻として母としての〈女の役割〉を教えるカリキュラム——例えば、ミルズ女子大学の場合、化学をやめてその代わりに高級料理の講座を設ける、家族に関する講座を中心に食物、栄養、被服、保健、育児、住居などの講座を新設するなど——が、女子高等教育を浸食していった。

ヴァッサーの学生は大体、有名になろうとも、社会に貢献しようとも、未開の分野で新しい仕事をはじめようとも……考えていない。……自分を妻、母親という役割のなかに見出そうとしている。……ヴァッサーの学生の大多数は、社会的に重要な決断を下せるポストに就くことのできる男性を理想の夫と考えている。<sup>13</sup>

名門スミス女子大学の学生は、1959年にフリーダンの質問に答えて次のように語る：

職業なんかほしくありません。みんな大学に行きますし、いかな  
いと社会の除け者になります。でも勉強を一生懸命したり、研究  
生活に入ったりの女らしくないことなんです。誰でも卒業  
する時は、ダイヤモンドの指輪をはめていたいと考えています。<sup>14</sup>

〈女らしさ〉を賛美する教育者に、職業をもつことも知性を生かすことも教  
えられなかった女子学生にとって、大学で学んだことは〈女の役割〉を自覚  
することだった。

### 女性誌のキャンペーン

1960年代の初め、フリーダンは「今日の女性の生活を形づくり、女性の夢  
を映し出している」のは、「女性誌、広告、テレビ、映画、小説、また、結  
婚と家庭、児童心理、性欲調整を説く専門家、そして社会学や精神分析学に  
関する一般向きの新聞記事や本」<sup>15</sup> であると気づく。フリーダンは1958年と  
1959年にアメリカの三大女性誌（『レイディーズ・ホームジャーナル』、『マッ  
コールズ』、『グッドハウスキーピング』）に掲載された小説のヒロイン像を  
調べ、「主婦業」以外の職業に就いたり、社会に対する使命感を抱いている  
ヒロインが皆無であることに驚かされる。1939年の女性誌の小説のヒロイン  
は、「陽気にしかも断固として、自分の人生を切り開いていこうとした新し  
い女」だった。<sup>16</sup> 彼女たちの多くは職業を持ち——看護師、教師、芸術家、女  
優、コピーライターなど——、仕事に示された性格の強さ——勇気、意気、  
独立心、決断力——は、彼女たちの魅力になっていた。彼女たちの個性は称  
賛的であり、男性は女性の容姿だけではなく、性格にも惹かれるのだ、と  
考えられていた。彼女たちは世の中のことに関心を持ち、自分を一個の人間  
と考え、独立心が強かった。女性誌の読者にとっては、職業は仕事以上の意  
味を持っており、自己確立し、何かを成就するという意味があった。

しかし、1949年に、『レイディーズ・ホームジャーナル』は「主婦」を職  
業とする女性を他の女性誌に先駆けて称讃した。「主婦業」とは、同時に、

「支配人，経理士，コック，看護師，運転手，ドレスメーカー，室内装飾家，秘書，そして慈善家」でもあったり，「家庭を作り，子供を養育し，子供によい環境をつくる女性こそ，文明，文化，美德をたえず作り直してゆく人なのだ」と，書いた。「主婦業」は，「管理と創造の仕事」である，と称讃する雑誌の風潮は，たちまち全国に広がっていくことになる。さらに，女性が職業を持ったり，高等教育を受けたりすると，「男性化」という警告までもが繰り返し掲載された。1949年が終わるころには，女性誌のヒロインのうち，三人に一人が職業をもっていたが，彼女たちが真に望んでいるのは，職業を捨て，専業主婦になることだった。

1954年に『マッコールズ』の編集者が「一心同体」(“togetherness”)という新語を作り，男女が一心同体となって生きる時代が来た，と宣言する。「若いうちに結婚して子供を産み，大勢の子供を育てて家庭生活から限りない満足を得る」新時代にふさわしい生き方とは，「男性も女性も子供も，独立した個人としてではなく，共通した経験を分かち合う家族の一員として，一緒に物事をやっていくこと」だと，雑誌は書いた。「一心同体」の生き方は国家的な意義をもつようにまでなるが，キャンペーンのピークは二年後の1956年にやってくる。提唱者の『マッコールズ』の編集者は，「主婦業に就いているアメリカ女性」が実は，「みじめなほど不幸なのだという真相」を雑誌への読者投稿を通して知ることになる。

1930年代，40年代の女性誌は家の外の世界に関する記事を数多く掲載していた。しかし，1950年代には女性誌は「主婦の生活に役立つ」記事，主婦である女性に関する記事しか載せなかった。「女性誌から判断すると，女性の日常生活の些細な事柄——壁や口紅の色やオーブンの温度など——が，女性にとっては，考え方や思想や夢より，はるかに興味深いもの」と考えられたのである。女性に髪をブロンドに染めさせたり，もう一人子供を産ませることが，女性の問題解決になると考えていた。そして，専業主婦の抱える問題がはるかに深刻で危機的な状況だと気づいても，女性誌に彼女たちの〈病い〉を治す特効薬はなかった。

## 広告の戦略

第二次世界大戦後の経済発展で、中産階級や労働者階級の所得は上昇し、さまざまな消費財、特に、住宅に関連する物品の購入が飛躍的に伸びていった。テレビ、ステレオ、食器洗い機など、新開発の商品が住宅に備えられていったが、人々の購買意欲を促進したのが、各種のマスメディアが大量に流す広告だった。企業の広告費は1950年代の10年間で64億ドルから120億ドルに倍増し、個人消費は宣伝に煽られて急激に拡大していった。<sup>16</sup>そして、企業の広告戦略の標的になったのが、専業主婦だった。「モダンな暮らしはすばらしい。最新式の機器を備えている工場を経営するようなもの」<sup>17</sup>である、と主婦を洗脳し、「家事は退屈な肉体労働ではなく、頭脳を使う仕事」に言い換えられ、新製品の購入は主婦が「家の外にある科学の世界の進歩に、知的な興味を持っている」<sup>18</sup> 証拠になった。新製品を利用して家事に従事する主婦業は、主婦の「自己を高め」ることだ、と広告は声高に叫んだ。同種の製品の用途別の使い分けを宣伝する広告は、主婦に「家事の専門家である」と思い込ませ、自負心を持たせて、さらに購買意欲を駆り立てることに躍起になった。「衣類を洗濯するにはA洗剤を、皿洗いにはB洗剤を、壁洗いにはC洗剤を、床にはDクレンザーを、またブラインドにはEクレンザーを、と多種類の洗剤やクレンザーを使いわけること」<sup>19</sup> は、主婦業の価値と面目を高める洗脳キャンペーンだった。例えば、自家製パンの材料を宣伝する場合、面倒な手間を省きながら、しかも、作り手の主婦が調理の独創性や能力を発揮できることを強調した。1957年の調査では、デパートの役割は商品を売るだけでなく、社会が急激に発展していることを主婦に教える「学校」になることだった。「たいていの女性は、品物を買うためだけでなく、デパートに行かねばならぬという心理で出かけている。彼女たちは世間のことに疎いが、家の外には、広い世界があることをデパートに足を踏み入れた瞬間から、主婦は自分が世の中の動きを知っている」<sup>20</sup>、という気分させられる。

広告はまた、「家族への愛情」も宣伝文句に利用して、主婦の心に入り込んだ。

愛情を表すのにいろんな方法があります。愛情は与えて受けるもの。守り選ぶもの。愛する人に何が一番よいかを知ること……この人はあなたでしょう？子供たちをどこかへ連れて行ったり、勉強を手伝ってやったりしているのは。深みのあるひとになりたいと、才能をのばそうとしているのは？あなた自身の〇〇自転車を持てば、あなたもそんな人になれるのです。<sup>21</sup>

広告は、女性が他に職業をもたず、専業主婦になっても、新製品を購入して利用することで、彼女の知性と能力、行動力を十分に発揮できることを繰り返した。

才能豊かな子供が主婦になるべきでしょうか？アメリカでは、50人に1人の割合で、素晴らしい才能に恵まれた子供がいると、教育学の専門家は言っています。この1人の子供が女兒だったら、『主婦になれば、この素晴らしい才能も浪費されなければならないのでしょうか？』……

才能に恵まれた女兒の90%以上は結婚し、たいていは、家事のためにすべての精力、すべての知性を使っています……

看護婦、教育者、実務家として、彼女はつねに家族の生活をよりゆたかなものにしようと努めています。<sup>22</sup>

広告の宣伝文句は主婦の役割と発揮される能力を「重視」していることを強調する文言を連ねるが、これは、女性を一個の人間として尊重し、彼女の知性と能力を認め、称讃しているわけではない。女性が家事や買い物以外の目的に発揮できる知性と行動力を持っていることを隠ぺいし、家の中に閉じ込めて、広告の宣伝文句で呪縛し、主婦業のための製品を次々に購入する、企業にとってはこの上もなく有り難い、「消費の女王」に仕立て上げているだけなのだ。

### 主婦の病

1950年代は「家族至上主義の時代」<sup>23</sup> だった。核家族による持ち家率は1960年までに62%に達しており、新しい住宅の85%が郊外に建設されて、そこで若い夫婦が親世代の干渉から逃れて、「プライバシーと団欒の場」<sup>24</sup> を見出した。アメリカが第二次大戦後に達成した経済的繁栄——GNPは1945年から60年の間に250%の伸び、国民一人当たりの収入は35%増加、1950年代の半ばごろには、人口の60%近くがミドルクラスの収入レベル（3,000ドルから1万ドル）に到達——の恩恵を最も享受したのが核家族だった。「核家族」は経済繁栄のシンボルになり、「郊外住宅の主婦」はアメリカの若い女性の夢になった。

ミドルクラスの豊かな家計は新種の家庭用電気器具の購入を促進し、自動衣類乾燥機や電気ミキサーなど、家事の手間は大幅に省かれるはずだった。しかし、〈女らしさ〉を讃美する風潮に迫われて、専業主婦を選んだ女性は、家事を「フルタイムの仕事」にしてしまう。1950年代、「時間があればあるだけ家事をする」<sup>25</sup> 主婦は、30年前の主婦に比べれば、約7倍の金額を家事のための電気用品の購入に費やししながら、昔の主婦と同じぐらい、またはそれ以上の時間を使って家事をしていた。郊外住宅の主婦は買い物、子供を車で送迎、自分でパンを焼き、子供や自分の服にミシンをかけ、電気洗濯機と衣類乾燥機を一日中使った。ベッドのシーツを週に二度交換し、庭の手入れ、床のワックス塗り、床磨き、子供の宿題の手伝い、その他、数え切れないほどの雑用に迫られていた。郊外の広い住宅は、ワンルーム様式で<sup>26</sup> 主婦が1人でいられる場所はほとんどなかった。広い部屋が台所と直結しているので、主婦は一日中、子供が散らかすのを片づけていかなければならなかった。主婦の日常動作を研究したウェイン大学のミシガン心臓研究会は、「女性はエネルギーを二倍以上も無駄に使っている」と発表した。<sup>27</sup>

しかしながら、主婦自身にとって問題だったのは、際限なく続く家事自体ではなく、得体のしれない、心の空虚さだった。フリーダン<sup>28</sup>は雑誌やテレビ、機能主義の社会学者、良妻賢母を説く教育者などが言及していた「現代の幸

福な主婦像」を実際に確かめるために、郊外住宅地を次々に回り、教育も才能もあり、それでいて、主婦として満足して暮らしている女性を求めて歩いた。フリーダンは郊外住宅地のメンタル・ヘルス・センターや、評判のよい精神科医を訪ねて、子供を持つ専業主婦で教育もあり、高い知性を持つ女性を紹介してもらった。<sup>28</sup> ある郊外住宅地では28人の主婦を紹介してもらったが、28人のうち、16人は心理療法を受けていた。18人は精神安定剤を常用し、4～5人は自殺を試みていた。これはこの住宅地に特殊なケースではなく、フリーダンはおなじような住宅地に同様の現象を発見した。専業主婦は家事に週60時間を費やし、主婦として母として生きることに全精力を注ぎこんでいた。しかしながら、彼女たちの守る郊外住宅地の生活は、決して彼女たちに満ち足りた幸福を与えなかった。大勢の主婦が「自分が生きていないような無意味さ、空虚さ」に取りつかれていた。主婦たちを襲う空虚さと孤独感とは、「得体のしれない悩み」となって、それを払拭するために彼女たちが「余計、夢中になって家事に精を出す」という「ワナの深み」にはまっていた。<sup>29</sup>

1950年代に、精神科医、精神分析学者、その他の科の医者は、主婦の悩みが病的症状を示し始めたことに気付く。水ぶくれ、情緒不安定、疲労感などの初期の軽い症状が、やがて、心臓発作や出血性潰瘍、高血圧、気管支肺炎などの病気に進行し、得体のしれない悩みは精神疾患になった。女性の精神疾患治療のために、精神安定剤が開発され、<sup>30</sup> 1958年には年間消費量は46万2000ポンドになり、1年後の1959年には115万ポンドにまで増加した。<sup>31</sup>

## 2. 第二波フェミニズムの始まり：1960年代アメリカの女性たち

### NOW の設立

空虚さのワナにはまった女性に、「ワナから抜け出て新しい生活設計を始めよう」と説得するフリーダンの啓蒙書、『新しい女性の創造』(*The Feminine Mystique*) が1963年に出版され、女性たちは「女性は、夫や子供を通して、自己を確立することはできないし、毎日の家事からも自分を見出せない

い]<sup>32</sup> ことに気付かされる。「女性は、結婚するか職業を持つか、どちらかだという、女らしさを讃美する人たちの考え方を否定」して、結婚と職業を両立させる新しい生活を設計し、自分の才能を発揮して社会に貢献しなければならない、とフリーダンは提唱した。「主婦であることが、どんなにひどい虚無感を女性にあたえているかを、人々は知らねばならない。有能な現代の女性にとっては、主婦であるということ自体が危機をはらんでいる」と、フリーダンは警告した。そして、「家事を職業と考えない」ことが「新しい生活設計」の第一歩だった。

料理、洗濯、掃除、アイロンがけなどを、必要以上に大切なもの  
と考えるのをやめれば、女性は多種類の洗剤を使いわけて、洗濯、  
掃除を面倒なものにするのをやめるようになる。女性誌やテレビ  
のたわごとに耳を貸さず、女性の生活を脅かそうとしている広告  
会社の調査員や、実業家のために舞台裏で策略を練る人たちの言  
うこともきかなくなる。そうすれば女性は、もっと創造的なこと  
に時間を使うために、掃除機も食洗機も、あらゆる便利な電気器  
具、はてはインスタント食品まで使えるようになるのだ。

第2番目にするのは、女らしさを讃美する人たちが、結婚生  
活にかぶせた、不必要に華やかで美しいヴェールをはぎ取り、結  
婚を現実的にみることである。結婚し母になることを、人生の目  
的と考えていた女性の多くは、現実の夫や、子供との生活に幻滅  
を感じている。しかし、彼女たちも、なにか自分できめた目的を  
持って才能を用い始めると、自分が生き返ったように感じるだけ  
でなく、夫や子供たちにも、なにか違った感情をもつようになる  
のだ。<sup>33</sup>

フリーダンの提唱する〈女性解放〉は、「女であること」の否定や無視で  
はなく、「女であるという現実の直視」から始まった。

子供を産むことのできる人間、つまり女性が、子供を産むのか産まないのか、もし産むのなら何時、ということに関して責任ある選択ができ、また個人の資格で社会参加を続けることが、出産のために妨げされることのないように、社会を変えていかなければならない。

もし女性が何人かの子供を産んでいる間も、社会活動が続けたければ、計画出産や中絶を受ける権利、また産前産後の休暇、託児所などを利用する権利などが必要となる。あるいはまた、出産、育児の期間中、家庭にとどまることを希望する女性には、その期間が終わった時に必要な再教育が受けられるように、復員兵士援護法とおなじような援護法が女性のためにも必要である。<sup>34</sup>

男女が愛し合いたいという性的、人間的必然性、また時には男に頼りたいという女の気持を否定して、女性解放を定義づけようとするのは無茶である。変えなければならないのは、男からも女からも人間らしい性を奪い去って、いがみ合うことなしに愛し合うことを不可能にさせてしまった、時代遅れの男女の役割の区別である。<sup>35</sup>

フリーダンは、「男性が女性の敵であるとは考えられない」と断言する。そして、彼女は1966年に300人の女性と共に「全米女性連盟」(NOW)を設立する。女性の社会進出と自己確立を目指す組織として、「女性だけのものではなく、男性も参加したものでなければならない」<sup>36</sup>と考えるフリーダンは、NOWの目的の第1節に次のように記した。

名実ともに男性と平等のパートナーとなり、そのための特権と責任とを行使して、アメリカ社会の本流に女性も参加できるように、我々は行動を起こすものである。<sup>37</sup>

1965年に、女性の地位に関する特別委員会が差別的給与体系（女性は男性の約半分の賃金）について詳細な報告を発表した。同委員会は、女性が育児と職業を両立できるように、また、母親が社会に出て能力を活かして働けるように、託児所やその他の施設を設置することを提言した。しかし、委員会のこの報告は政策決定のテーブルの上に乗ることはなく、「官僚のデスクの引き出しの奥深くしまいこまれてしまった。」<sup>38</sup> 雇用における性差別を人種差別と同様に禁じた公民権第七条が1964年に可決されていたが、法令を妨害する動きも活発だった。同年、6月にワシントンで女性の地位に関する、州高官の会合が開催されたとき、会合に参加する女性弁護士や州政府の女性高官や委員の怒り——「この会議はどんな行動をとる権限もなく、決議する権利すらもない」——がフリーダンの、全米の女性のための組織発足を決断させた。男性主導の報告会や委員会、組織は、〈自由と平等〉を基本理念とするアメリカ社会に存在する女性差別を問題提起はするが、実際に解決する意志はなく、真に取り組むべき課題とは考えなかった。

### ラディカル・フェミニズム

フリーダンのNOWは現行の社会体制を認めたくて、女性差別の撤廃と、女性の社会参画をめざすリベラル・フェミニズムの立場に立っていた。フリーダンは、男女の平等を実現するために、男性と女性の役割を根本的に見直す必要があると考えていたが、「女性は虐げられた階級であるとも、圧制者である男性の力をはねのけて、権力を男性の手から奪い返すために闘うのであるとも考えなかった。」<sup>39</sup> しかし、NOWに対してよりラディカルな小グループが1967年から68年にかけて全米の各地で誕生する。公民権運動、ベトナム戦争反対運動などに積極的に参加した女性たちが、〈ラディカル・フェミニズム〉を名乗り、女性差別を根源から覆すための過激な運動を展開していった。代表的なグループのひとつである、「ニューヨーク・ラディカル・フェミニスト」の創始者のひとり、シュラミス・ファイアストーンはこれまでの女性解放運動の問題点を総括し、第二波フェミニズム運動としてラディカル・

フェミニズムが取り組むべき課題を提唱した。つまり、男性優越意識を徹底的に批判することと、広範な意識改革を行なうことである。<sup>40</sup> 男性至上主義に対しては、家庭における性別役割分担や性関係まで、批判の対象とした。

女性の抑圧は諸制度のなかに明示されており、それらは女たちをその居場所にとどめておくために構築され、維持されている。その制度とは結婚、母性、愛、そして性交である（家族単位はこれらによって統合されている）。これらの制度を通じて、女たちはその生物学的性差と全面的な人間としての可能性とを混同するように教えこまれる。<sup>41</sup>

ラディカル・フェミニズムは女性の抑圧を社会システムの根底と捉え、それを覆す全面的な革命を目指した。第一波フェミニズムやフリーダンのNOWが社会改革や社会参画によって女性の権利獲得を目指したのとは全く異なり、〈性〉それ自体を権力作用と捉え、そこにおける支配—従属関係の解体を模索した。マルクス主義が抑圧の根源を経済的階級制度に置くのに対して、ラディカル・フェミニズムは女性抑圧の根源は性階級制度にあり、あらゆる差別の根底にある、と主張した。ファイアストーンは1970年に出版した『性の弁証法』(*The Dialectic of Sex*)の中で、「愛について語らないラディカル・フェミニズムの本は政治的な失敗である」と語り、〈愛とロマンス〉を分析した。<sup>42</sup> 「(男性)文化とは、見返りを求めない女の愛情の力に寄生したものであったし、今もそうである」、とファイアストーンは断言する。ファイアストーンによれば、ロマンティシズムは、男性による女性の搾取の上に成り立つ「愛」の本質から女性の目をそらすための文化装置である。ロマンティシズムの構成要素であるエロティシズムや美の理想像などは、一見したところ女性讃美のように見えながら、実は、性搾取を維持する文化装置に他ならないのである。

性搾取の分析批判は第二波フェミニズムが取り組んだ新しい課題であり、

1970年代以降の主流となっていく。ケイト・ミレットは、1970年、『性の政治学』(*Sexual Politics*)で〈父権制と暴力〉の基盤について分析した。ミレットは、父権制が男性による女性（および、女性性を付与される人々）の支配システムであり、他のさまざまな支配システム、例えば、生産様式や文化装置など、を規定する最も根源的な権力構造である、と批判する。

性による支配はわれわれの文化のおそらく最もいきわたったイデオロギーとして通用し……もっとも基本的な権力概念を与えている。

これというのも、われわれの社会が、他のあらゆる歴史上の文明と同じく、父権制だからである。軍隊、産業、テクノロジー、大学、科学、行政官庁、経済——要するに、社会の中のあるゆる権力の通路は、警察の強制的暴力まで含めて、すべて男性の手中にある。<sup>43</sup>

われわれは父権制と暴力とを結び付けて考えることには慣れていない。父権制は、暴力を使う必要はほとんどないと思えるほどに、その社会化の体制は完璧であり、その価値観に対する一般の同意ぶりは徹底しており、人間社会に永年にわたって、あまねくいきわってきたのだ。ふつうわれわれは過去の父権制の蛮行を、異国のあるいは「原始的な」習慣と考える。現在の蛮行は病理学的、ないしは例外的な行動に限られた、一般的重要性をもたない個人的逸脱行為とみなされる。しかし、ほかの全体主義的イデオロギーと同様に（人種差別主義や植民地主義はこの点でいくらか父権制と類似している）、父権社会における統制は、緊急事態にも、恒常的な威嚇の道具としても、暴力支配によらずしては貫徹しないだろうし、操作不能にすら陥るだろう。<sup>44</sup>

ミレットはまた、『性の政治学』の中で、当時英米文学の傑作と評価されていた作品——D.H. ロレンス、ヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラー——を取り上げ、男らしさの誇示、サディズム、女性嫌悪、同性愛恐怖といった形で表れる女性への暴力的支配を読み取った。ロレンスたちはセクシュアリティ解放を装ってはいるが「反革命」の代表であり、彼らの作品は「男の支配」を讃美し、女性が男性の暴力的性行為あるいは、暴力そのものによって、主体的意志を喪失させられ、単に〈物〉でしかないように扱われる様子を、「自然」への回帰であり、エロティックなものとして描き出し、男性支配を正当化している、とミレットは分析した。<sup>45</sup> 『性の政治学』は、1970年代以降のフェミニズムの主要テーマの一つになっていく、女性に対する暴力の分析、フェミニズム文学批評の出発点となった。

第二波フェミニズム草創期の理論家たちは、歴史を通じて、女性を抑圧してきた社会システムを〈家父長制〉と定義した。本来は、前近代の大家族における男性家長の支配、統括を意味していたこの用語は、フェミニストたちによって脱歴史化され、社会制度・政治制度・経済制度を通じて、女性を抑圧する権威システムとして再定義された。<sup>46</sup>

### 3. ハリウッド・シェイクスピアの限界：

#### ゼフィレリの『じゃじゃ馬馴らし』

第二次世界大戦後のアメリカでは、「郊外住宅に住む、白人ミドルクラスの主婦」が「最高に幸福な女性」の理想像として、テレビドラマや雑誌、広告で宣伝され、高等教育を受けた女性ですら、「高収入の夫を持ち、美しい郊外住宅に住むこと」が夢になった。1950年代半ばには、女性たちの間に、「家事が女らしさと個性の表現手段である」、と考える傾向が広がっていった。しかし、同時に、専業主婦の生活に空虚さを覚え、情緒不安に悩み、アルコールや精神安定剤に救いを求める主婦たちが急増していた。

郊外住宅の専業主婦たちの「名前のない問題」を直視したフリーダンは、女性の社会参画を推奨し、権利獲得を目指して1966年にNOWを立ち上げた。

〈女らしさの神話〉の呪縛から解放され、尊厳と自立を勝ち取るために、女性たちは解放運動を拡大し、強化していった。1960年代のアメリカは、女性解放運動の第二波の大きなうねりの中にあった。

それでは、フランコ・ゼフィレリが1967年にハリウッドの娯楽大作として製作したシェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』は、全くの「反革命」、あるいは、フェミニズムへの挑戦だったのだろうか。

モリー・ハスケルはアメリカ映画史批評の中で、「女性の側から見れば、1962、3年から73年にかけてのほぼ10年間は、映画史上もっとも沈鬱な時期だった」<sup>47</sup>と振り返る。「この時代、女性に与えられる役柄と重要性は、暗い見通しから始まって着実に悪くなり、現在に至っても良くなる兆しは見えてこない」と分析し、「女性解放運動を先頭にした現実生活における女性の力の強化と要求の増加は、商業映画において明らかな反動を引き起こした」と結論づけた。1960年代から70年にかけて、映画の中の男性は破壊的な強さを鼓舞する〈男らしさ〉に取りつかれ、一方、女性は解放された〈新しい女〉などどこにも見当たらず、才気にあふれ、しゃれた台詞を吐く女も、成熟した女も、女神もいなかった。つまるところ、1960年代は「映画史における男の時代」だった。<sup>48</sup>

シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』は1594年当時のエリザベス朝時代の家父長社会体制を反映する、男女の優劣、夫婦の主従関係の正当性と絶対性を喜劇の枠組みの中で描いた。では、ゼフィレリの『じゃじゃ馬馴らし』は1960年代のアメリカ社会の現実を意識していただろうか。

### 男性性の誇張とパロディ

財産目当てで資産家の娘カタリーナに結婚の申し込みをするペトルーチオは、暴言を吐き、時には物を投げつけ、殴りかかってくるカタリーナに対して、従順で貞潔、美しい女性を讃美する常套文句でプロポーズする。しかし、ペトルーチオの言葉はカタリーナの心をとらえることはなく、かえって彼女

の反感を買い、逃げる彼女を追いかける、強引な口説きが変わっていく。シェイクスピアが描いた、〈宮廷風恋愛〉のパロディとしての〈機知の闘い〉は、ゼフィレリでは男性性の圧倒的力が強調され、男の暴力に対する女性の抵抗の場面に作り変えられた。<sup>49</sup> カタリーナは食糧庫の中に逃げ、追ってくるペトルーチオを阻止するために物を投げつけ、また、彼が登ってくる階段を破壊する。ゼフィレリのカタリーナは非常に力強く、たくましい。しかし、ペトルーチオははるかに頑強で、天井から肉を吊るした綱を体に巻きつけ、ターザンのように（彼はアメリカ映画のマッチョの代表だが）階上に飛び上がる。カタリーナは屋根に逃げるが、ペトルーチオはひるまない。屋根に飛び上がり、追いかける。屋根の上をドタバタ喜劇のように追いつ追われつする二人は、ついに屋根を突き破って落下する。貯蔵庫の綿花の山の上に落ちて埋もれたカタリーナの上にペトルーチオが覆いかぶさって、身動きの取れない彼女になおも結婚を迫る。

ゼフィレリのペトルーチオはなぜ、これ程までに男の力を見せつけるのだろう。カタリーナは決して弱くはないし、力で抵抗する。しかし、それでも最後に勝利をおさめるのは男の〈力〉である、とカタリーナに敗北感を味わわせ、涙を流させるのはなぜなのだろう。屋根から落下してカタリーナは足を捻挫し、立ち上がれない。一方、ペトルーチオはけがなど一切なく、まるでスーパーマン（彼もやはり、アメリカ映画のマッチョ代表だが）である。そして、ペトルーチオは手を差し出してカタリーナを立ち上がらせるが、これは彼の「優しさや愛」の行為ではない。なぜなら、ペトルーチオはカタリーナを立ち上がらせると、即座に彼女の両手を背中にねじり、締め上げたのだから。力で抵抗できなくなったカタリーナを父親の前に連れて行き、彼女が結婚を承諾した、とペトルーチオは嘘をつく。男性性を誇張し、暴力を正当化するようなプロポーズの場面展開は、女性に選択の自由を与えず、自己決定権を否定し、男性の絶対的支配権を強調する、フェミニズムに挑戦するような演出である。

ペトルーチオの〈力〉の誇示は、結婚直後、ペトルーチオの屋敷での食事

の際にも発揮される。シェイクスピアのペトールチオも、「じゃじゃ馬馴らし」, 「野生の鷹の調教」の手段として、カタリーナに食事を与えないし、眠らせない。ゼフィレッリのペトールチオが空腹のカタリーナの面前で、配膳する奉公人を怒鳴りつけ、給仕された料理に文句をつけてテーブルをひっくり返して夕食を台無しにする様子は、極めて暴力的である。しかし、ゼフィレッリのペトールチオの力の誇示は、脅威であると同時に、愚かで滑稽にも見える。

男性性の誇示を嘲笑するような場面はほかにもある。食事もさせてもらえず、空腹と不安で怯えた表情をするカタリーナがペトールチオにベッドまで抱きかかえられる初夜の場면을ゼフィレッリは創作し、その中で暴力、男性性の力の誇示を脅威であると同時に、滑稽にも描いた。カタリーナが寝室で不安げな表情でドレスを脱ぎ、下着姿になってペトールチオに抱えられる場面は、二人をハリウッドのスターであるエリザベス・テラーとリチャード・バートンが演じていることもあり、観客にとっては大いに好奇心をかきたてられる光景だろう。しかし、ここで注目すべきは、気丈なカタリーナがか弱い、受身の女になり、男の無言の性的圧力に屈するかのごとくに演出されている点である。「初夜の場面」を作ることで、はたして、ゼフィレッリはロマンティズムとセクシュアリティをどのように描こうとしたのだろうか。

第二波フェミニズム以降、セクシュアリティの問題はフェミニズムの重要課題だった。セクシュアリティに関してフェミニズム運動がめざしていたのは、女性の性的自由、つまり、女性が性的自己決定権を持つことである。女性が自身の意志に反した性的行動を強要されないこと、男性のセクシュアリティや男性の願望を基準としない、女性のセクシュアリティを発見すること、が課題だった。従来、女性のセクシュアリティは聖職者、性医学者、精神分析医（フロイトをはじめとする）、男性一般から、生殖のみに結び付けられ、男性に対しては常に受動的であること、とされてきた。第二波フェミニズムでは、女性自身が女性のセクシュアリティを語ることによって、従来のステレオタイプから女性を解放することを目標とした。

シェイクスピア劇の女性たちには、もちろん、性的決定権などあるはずもなく、シェイクスピア時代の文化コードを1960年代のアメリカの観客に理解してもらうためには、わざわざ「初夜の場面」を設定する必要がある、とゼフィレリは考えたのだろうか。1594年の『じゃじゃ馬馴らし』の世界を1967年のアメリカの観客は、シェイクスピア時代の観客と同じように受け入れて楽しむことは、もちろん、不可能だろう。「初夜の場面」でさらに興味深いのは、カタリーナが従順に、しかも喜んでペトルーチオを夫として受け入れるかのようにほほ笑みながらも、そのほほ笑みはペトルーチオを油断させるための手管にすぎないことだ。ペトルーチオがベッドに近づき、カタリーナを抱きしめようとする瞬間、彼女はベッドの下に入れてあったあんかのようなものでペトルーチオの頭を思い切り殴る。ところが、従順を装っていたカタリーナの突然の逆襲は、彼女の勝利で終わるのではなく、ペトルーチオが怒鳴りながらベッドを破壊する行為に展開していく。ペトルーチオの破壊行為に対して、カタリーナは怯え、ひとり取り残された寝室でむせび泣く。女の逆襲、女の力による抵抗は、男の圧倒的な力の行使には対抗できない、女はただ無力感を思い知るのみ、とでもゼフィレリは強調したいのだろうか。

もちろん、シェイクスピア作品のカタリーナはフェミニズムを知らない。他のシェイクスピア喜劇の女主人公と同様に、結婚こそが〈幸福な結末〉という社会体制の中で生きている。だから、〈女らしい女〉の基準を外れているカタリーナも、彼女の妹で〈女らしい女〉の典型として男たちのあこがれの的であるビアンカも、結婚申し込み者の出現に心を躍らせる。カタリーナが妹に暴言を吐き、父親に口答えする理由は、妹には結婚の申し込み者が次から次へと現われるのに対して、自分にはひとりもなく、このままの状況が続くと妹が先に結婚し、自分は結婚できないかもしれない、という不安と焦りの爆発である。エリザベス・テラー演じるカタリーナの乱暴な言動は、まるで「性の抑圧によるヒステリー」のごとくに描かれる。カタリーナとビアンカの婚約場面は『じゃじゃ馬馴らし』が喜劇の枠組みで構成されている

という条件を考慮してもなお、二人の娘の婚約騒動が過度に戯画化されているために、女性が性的自己決定権を手に入れようと行動することが、いかにも不自然で愚かな行為であるかのように錯覚させられる。

男性性の圧倒的優越と女性性の抑圧は、家父長社会の特質であり、シェイクスピアが体制の枠組みの中で男女の登場人物の人物設定をするのは当然のことである。しかし、ゼフィレッリは家父長体制支持をより鮮明にするかのような場面を付け加える。初夜にペトルーチオの暴力に怯えたカタリーナに〈屋敷の家事を取り仕切る女主人〉になることを思いつかせる場面が、その典型である。ゼフィレッリはペトルーチオの屋敷を全くのあばら家に設定し、彼に使える奉公人を〈無能で不器量な役立たず〉に仕立て上げた。シェイクスピアのペトルーチオは〈ジェントルマン〉階層に属する名家の主で、彼の所有するヴェローナの屋敷が（ゼフィレッリの映画で描かれたような）廃屋同然のはずがない。ペトルーチオが裕福な女性を妻にするためにパデュアに友人のホーテンシオ（彼もまた、ジェントルマンである）を訪ねてきたとはいえ、ペトルーチオ自身は裕福な暮らしぶりであり、ゼフィレッリが設定したような、〈ほろ着をまとい、金に困窮した薄汚れたならず者〉では決してない。シェイクスピアのペトルーチオは「財布には金貨、田舎の屋敷には財産」（“Crowns in my purse I have, and goods at home”，一幕二場54行）を持って、「世間を見るために故郷を出てきた」（“And so am come abroad to see the world”，一幕二場55行）、れっきとした〈ジェントルマン〉なのである。結婚相手の財産を重視するのはシェイクスピア時代の結婚条件の常識であって、ペトルーチオが相手の持参金に執着しても、ゼフィレッリが描いたような、〈荒廃した屋敷に住む貧しいならず者集団の首領のようなペトルーチオ〉は、シェイクスピアの創造したペトルーチオとは別人である。ゼフィレッリはカタリーナに〈女主人〉として、ほろ着の奉公人に新品のお仕着せを身につけさせ、彼らを指導して屋敷を清掃、磨きあげさせる場面を創作した。が、この場面——〈女らしくない女〉が女主人の立場、あるいは現代風に言えば、〈専業主婦〉の役割に目覚めて、〈女らしい女〉になる——を感動的に描写

するために、ペトルーチオ自身も奉公人も浮浪者のように不潔なぼろ着をま  
とってなければならなかった、ということだろうか。要するに、ゼフィレッ  
リが観客に見せたかったのは、カタリーナが〈女主人〉の役目で自己実現を  
追求し、〈女らしい女〉の真価を発揮する、という〈女らしさの神話〉だっ  
たのだろうか。

また、テイラー演じるカタリーナが妹の結婚式の祝宴で、犬と遊んでいる  
子供たちを見つめる場面（これもゼフィレッリの創作）では、カタリーナの  
〈母性〉が強調される。さらに、祝宴では「最良の妻は誰か」を競う男たち  
の賭けでペトルーチオが勝ち、カタリーナは「妻の役割」について不従順な  
妻たちに説教する。この最終場面では、シェイクスピアの場合、ペトルーチ  
オの命令でカタリーナが「妻の役割」を語ることになっているが（五幕二場  
130-31行）、ゼフィレッリのカタリーナは命令ではなく、自分の意志で語り  
始める。シェイクスピアのペトルーチオの〈じゃじゃ馬馴らし〉——手に負  
えない女を夫に従順に仕える妻になるように教育する——は常に、カタリー  
ナに命令にし、服従させる方法で行われ、カタリーナには選択権も自己決定  
権も一切、与えられなかった。だから、〈妻の役割〉を語る時も、それはカ  
タリーナの意志ではなく、ペトルーチオの意志であり、命令であり、強要さ  
れた行動だった。シェイクスピアは、夫の指示に従い、命令通りに動く姿を  
強調したが、ゼフィレッリは〈夫が望む妻の言動〉を学んで主体的に〈女ら  
しい女〉の役割を果たすカタリーナを描いた。では、ゼフィレッリのカタリー  
ナは、ペトルーチオとの壮絶な主権闘争の末、やはり、男性性の圧倒的な暴  
力性、優越性に対抗できず、男性の願望の客体となり、男性の権力維持を支  
える〈女らしい女〉に退行したのだろうか。それこそが、女にとって〈幸福  
な結末〉であるかのごとくに。

しかし、ゼフィレッリの結末は、フェミニズムへの挑戦でもなかった。  
「妻の役割」を説教したカタリーナは、ペトルーチオを残して祝宴の広間を  
出ていく。意気揚々と引き揚げるカタリーナと、呆気にとられるペトルーチ  
オ。彼女のあとを追うが、女たちに遮られて、ペトルーチオは前に進めない。

ゼフィレリはシェイクスピアにはない場面を創作し、また、特定の場面を過度に演出することで、男性性の優越を強調し、〈女らしさの神話〉を「感動的」に物語った。1960年代アメリカのフェミニズムに挑戦するかの様な場面を加えながら、しかし、同時に、男性性の誇示を滑稽にも描き、また、女たちの結婚願望を茶化して、フェミニズムへのバックラッシュをパロディ化しているようにも思える。「夫を残して去る妻」という終幕も、『人形の家』のノラを意識したフェミニズム風結末、と強引に言えなくもないが、しかし、この場面は〈女の自立〉を感動的に描いた場面では決してない。〈従順な妻〉を手に入れて優越感に浸る夫が、突然、妻に「逃げられて」、狼狽する姿が滑稽で、観客の嘲笑を誘う。男性性の優越に自己陶醉している男は、「時代の風潮の変化に置き去りにされる、愚かで哀れな存在」とでも、ゼフィレリは言いたかったのだろうか。

## 結

シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』はヨーロッパと北米で18以上の映画版がある。それぞれがその時代特有のジェンダーとセクシュアリティの問題を反映した作品を構成している。<sup>50</sup> 1950年代には「家庭的な女性」を描くストーリーが多く、1976年から86年には5種類のテレビ版が北米で放映されたが、どれも〈性革命の時代〉を反映して、男性を女性の性対象として描いている。カタリーナが従順になるのもペトルーチオの性的魅力が要因というわけである。現代版はどれもシェイクスピアが設定していた序幕のスライのエピソードを省くことで、カタリーナとペトルーチオの物語をスライの夢物語を現実社会として描くことが可能になる。

第二波フェミニズムの1960年代の作品であるゼフィレリの『じゃじゃ馬馴らし』は、あいまいな結末が示すように、フェミニズムと反フェミニズムの両方を取り込んでいる。フェミニズムに挑戦するが、時には、フェミニズムへのバックラッシュをパロディ化し、しかも、フェミニズムを支持することもない。フェミニズムの時代を意識しながらも、どちらの陣営からも支持

されたい、という娯楽商業映画の限界だろうか。

第二次世界大戦後、テレビがアメリカ社会に急速に普及し、これは映画界に大きな影響を与えた。テレビへの対抗策として、映画のフォーマットの革新が始まり、白黒で画面の小さなテレビでは味わえない総天然色と迫力を売りにした大作製作の時代が始まった。<sup>51</sup> 1960年代には、ほぼすべての映画がワイドスクリーンになり、それに応じて、映画にスペクタクルな見世物性が回帰してきた。娯楽商業主義の製作方針では、ワイドスクリーンの魅力を最大限に引き出した、スペクタクル性が追求されていった。1956年製作の超大作『十戒』が聖書物のブーム再来の引き金になり、1960年代のスペクタクル映画の代表は、聖書や歴史を扱った大作で、破格の製作費を投入して、より迫力のある、より豪華な作品が次々と製作され、公開された。しかし、興行的には必ずしも成功したわけではなかった。エリザベス・テラーを起用した『クレオパトラ』（1963年、ジョゼフ・L・マッキウィツ）は『十戒』の製作費（十三億円を超える）の三倍近い、空前絶後の三十七億円の製作費をかけたが、配給元の二十世紀フォックスを倒産寸前にまで追い込む、大失敗作になった。<sup>52</sup> 超大作映画は1960年代半ばまで大流行するが、60年代後半には急速にすたれていく。テレビの普及で観客を茶の間にとられた映画は、観客の関心と呼ぶテーマを取り入れた、しかもテレビの面白さをはるかに超えた娯楽作品の製作が課題である。1960年代のフェミニズム運動の大きなうねりとどよめきに映画界が無関係でいられるわけもなく、しかし、だからといって既存の体制や価値観と対立する信条に同調する作品製作は、映画を〈商品〉として観客に売る商業映画には興行のリスクが大きすぎる。文化の創造に関わりながら、利益追求なしには存続しえない商業映画。ゼフィレリがシェイクスピア作品を〈時代物〉としてワイドスクリーンの中で描いた時も、〈観客動員できる話題作の提供〉という、商業映画としての限界があったのだろう。

注

1. William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*, ed. Elizabeth Schafer (Cambridge University Press, 2002), p. 167. 本論での作品への言及はすべてこの版による。
2. ステファニー・クーンツ, 『家族という神話』, 岡村ひとみ訳 (筑摩書房, 1998年), pp. 235-40; 有賀貞, 『概説 アメリカ史』 (有斐閣, 2002年), pp. 236-37
3. クーンツ, pp. 240-44
4. クーンツ, p. 47
5. クーンツ, pp. 120-23
6. 同掲
7. 奥田睦子, 秋山洋子, 支倉寿子, 『概説 フェミニズム思想史』 (ミネルヴァ書房, 2003年), pp. 172-75
8. ベティ・フリーダン, 『新しい女性の創造』, 三浦布美子訳 (大和書房, 1965, 2004年), p. 11
9. フリーダン, p. 9
10. フリーダン, p. 116
11. フリーダン, p. 117
12. 同掲
13. 同掲
14. 同掲
15. フリーダン, pp. 29-45
16. 野村達朗編著, 『アメリカ合衆国の歴史』 (ミネルヴァ書房, 1998, 2008年), p. 234
17. フリーダン, p. 154
18. フリーダン, p. 157
19. 同掲
20. フリーダン, pp. 161-62
21. フリーダン, pp. 163-64
22. フリーダン, pp. 164-65
23. クーンツ, p. 46
24. クーンツ, p. 47
25. フリーダン, pp. 174-75
26. フリーダン, p. 177
27. フリーダン, p. 181

28. フリーダン, p. 176
29. 同掲
30. フリーダン, p. 219
31. 有賀, p. 180
32. フリーダン, p. 252
33. フリーダン, pp. 257-58
34. フリーダン, p. 293
35. フリーダン, pp. 293-94
36. フリーダン, p. 290
37. 同掲
38. フリーダン, p. 288
39. フリーダン, p. 291
40. 有賀, p. 184
41. シュラミス・ファイアストーン, 『一年目の覚書』(『概説 フェミニズム思想史』所収, p. 183)
42. ファイアストーン, 『一年目の覚書』(『概説』所収, p. 190)
43. ケイト・ミレット, 『性の政治学』, 藤枝澪子, 加地永都子, 滝沢海南子, 横山貞子共訳 (ドメス出版, 1985年), p. 72
44. ミレット, p. 100
45. ミレット, pp. 403~566
46. 奥田, pp. 194~96
47. 有賀, pp. 194-96
48. モリー・ハスケル, 『崇拜からレイプへ: 映画史の中の女性史』(平凡社, 1992年), p. 379
49. ハスケル, pp. 385-87; J・ウィリアムソンは1968年以降の映画の中では「女性のイメージは画一的で, 印象に残る独自の女性はひとりもない」と分析する。[『消費の欲望』, 半田結, 松村美土, 山本啓 訳 (大村書店, 1993年), pp. 172-73]
50. フランコ・ゼフィレッリ, 『じゃじゃ馬馴らし』コロンビアピクチャーズ配給, 1967年 (主演: リチャード・バートン, エリザベス・テーラー)。ゼフィレッリの映画版の言及はすべてこの映像による。
51. “Introduction” in *The Taming of the Shrew*, pp. 65-75.
52. 大場正明, 『アメリカ映画主義』(フィルムアート社, 2002年), pp. 144-47;

北野圭介、『ハリウッド100年史講義』（平凡社，2001年），pp. 170-78

文 献 目 録

Shakespeare, William. *The Taming of the Shrew*, ed. Elizabeth Schafer. Cambridge University Press, 2002.

Boose E. Lynda and Burt, Richard. *Shakespeare, the Movie: Popularizing the plays on film, TV, and video*. Routledge, 1997.

Davies, Anthony and Wells, Stanley. *Shakespeare and the Moving Image: the plays on film and television*. Cambridge University Press, 1994/2002.

Rackin, Phyllis, *Shakespeare and Women*. Oxford University Press, 2005.

Werner, Sarah. *Shakespeare and Feminist Performance: Ideology on Stage*. Routledge, 2001.

Williamson, Judith. *Consuming Passions: The Dynamics of Popular Culture*. Marion Boyars Publishers, 1984.

ゼフィレリ, フランコ『じゃじゃ馬馴らし』コロムビアピクチャーズ, 1967年  
有賀貞『概説 アメリカ史』有斐閣, 2002年

岩本憲児, 武田潔, 斎藤綾子編『新 映画理論集成: ①歴史・人種・ジェンダー』  
フィルムアート社, 1998, 2002年

ウィリアムソン, ジュディス『消費の欲望: 大衆文化のダイナミズム』半田結, 松  
村美土, 山本啓訳, 大村書店, 1993年

ウェザーフォード, ヘドリス『女は働かなければならない: 第二次世界大戦とアメ  
リカの女性』永島利明訳, 光人社, 1998年

奥田睦子, 秋山洋子, 支倉寿子編『概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房,  
2003年

北野圭介『ハリウッド100年史講義: 夢の工場から夢の王国へ』平凡社, 2001年  
クーンツ, ステファニー『家族という神話: アメリカン・ファミリーの夢と現実』  
岡村ひとみ訳, 筑摩書房, 1998年

野村達朗編著『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房, 1998, 2008年

ハスケル, モリー『崇拜からレイプへ: 映画の中の女性史』海野弘訳, 平凡社,  
1992年

原 克『アップルパイの神話の時代: アメリカモダンな主婦の誕生』岩波書店,  
2009年

ファイアストーン, シュラミス『性の弁証法——女性解放革命の場合』林弘子訳,

評論社, 1972年

ファルデー, スーザン『バックラッシュ: 逆襲される女たち』伊藤由紀子, 加藤真樹子訳, 新潮社, 1994年

フリーダン, ベティ『新しい女性の創造』三浦布美子訳, 大和書房, 1965, 2004年

ミレット, ケイト『性の政治学』藤枝澪子訳, ドメス出版, 1985年

## Feminine Mystique and Hollywood Shakespeare: *The Taming of the Shrew* in 1967

ONO, Yoshiko

Introduction

1. Feminine Mystique: American women in 1950s
2. The Second Wave of Feminist Movement: American women in 1960s
3. Hollywood Shakespeare and its Artistic Limitation: Zeffirelli's *Taming of the Shrew*

Conclusion

Notes

Bibliography

This paper is an attempt to examine whether the feminist movements of the 1960s had a particular impact on Franco Zeffirelli's filmed production of *The Taming of the Shrew* in 1967.

The play was first performed on Elizabethan stage and reflected gender politics of the Elizabethan age. The story portrayed the process how the shrew was instructed and molded to the ideal wife by her newly wedded husband. Shakespeare's *Taming of the Shrew* created the taming plot as comedy with a happy ending of the married couple. Zeffirelli's Shakespearean comedy expected an utterly different audience living in the age of women's liberation. The feminist's movement prompted re-evaluation of the existing social framework authorized by the patriarchal ideology. Zeffirelli's adaptation was a farcical comedy with an ambiguous ending, presenting both the latest feminist's reading and anti-feminist backlash on screen. Zeffirelli's *Taming of the Shrew* was never an academic reproduction of Shakespearean work, but a Hollywood commodity that sells Shakespeare for huge commercial profits.

# インプット重視の文法指導

島田 勝正

## 1. 英語教師のビリーフ

教育実習生の模擬授業（英語）を観察していて気づくのは、演繹的な授業展開である。1つの例文に基づいて文法説明を冗長に行って、すぐに産出に移る傾向が強い。このような授業展開が多くみられるからにはそれなりの理由がある。それは、彼らの英語指導モデルの貧困さである。彼らが中学校および高等学校で受けた数名の教師の指導方法がモデルとして模倣の対象となり、そのイメージからなかなか脱却できないのである。ということは、彼らに英語を教えた、彼らの恩師である現場の英語教師もこのような授業展開を行っているということは想像に難くない。したがって、教員免許状を取得し、教員採用試験に合格し、教壇に立ったとしても、産出を急ぐというパターンが修正されるという保証はない。教職はある意味で孤独な仕事である。自ら学校外に研修の機会を求めないといつの間にか自分の授業パターンを固定化してしまう。研修の機会が十分に与えられなければ、自分の授業への自己満足に陥り、授業はマンネリ化する。

本稿ではこのような授業展開パターンが第二言語習得という学習理論にマッチしていないこと、つまり、学習理論と指導方法のミスマッチについて論述する。第二言語習得研究の第一義的な目的は、第二言語習得の記述とその発達の説明であるが (Ellis, 1997, p. 4), その知見が外国語教育、特に文法指導に示唆するところは大きい。よって、本稿では、第二言語習得過程を記述し、

---

キーワード：文法指導，インプット，気づき

その過程が促進されるための望ましい文法指導のあり方について、インプット重視の観点から考察する。そして、そこから得られた知見を英語教員を志望する学生や現職の英語教師に提供し、彼らのビリーフ修正に貢献することを目的とする。

## 2. 第二言語習得モデル

VanPatten & Cadierno (1993) や Ellis (1994) は、インプット (input)－インテイク (intake)－アウトプット (output) という3つの過程から成る第二言語習得過程モデルを提示した(図1)。第二言語習得の最初の段階は、インプットをインテイクに変えるインプット処理過程である。インプットとは、学習者に提供される言語データのすべてを指す。これらは学習者の耳から入る音声や目から入る文字のすべてを含む。インテイクとは調節 (accommodation) とシステム(言語体系)の再構築 (restructuring) を促進する過程である。調節とはシステムに新しい言語形式が入る余地をつくることであり、再構築とは新しい言語形式が入ったことによりシステムの他の部分に変化することである (VanPatten, 2003, pp. 52-57)。インプット－インテイクの過程により、学習者のシステムは常に発展・変化している。ここで注意すべきことは、インプットのほんの一部がインテイクされるという点である。学習者の注意がインプットに向けられ、インプットの形式と意味とが結合した場合 (form-meaning connection), その情報はインテイクされてシステムの中に入る。学習者はインプットに基づいてシステムを自ら創造的に構築していく (creative construction)。既習の規則を過剰に一般化して適用した場合 (over-generalization) や、すでに習得した母語の規則を転移 (transfer) させて第二言語に適用した場合に、誤り (error) が生じる。新しいインプットと既存の文法規則との違いに気づいた場合 (noticing-the-gap) に、中間言語規則体系に再構成が起こる。最後は、アウトプットの過程である。この過程ではシステムに構築された文法規則を使って意味をコード化して産出する。

## インプット重視の文法指導

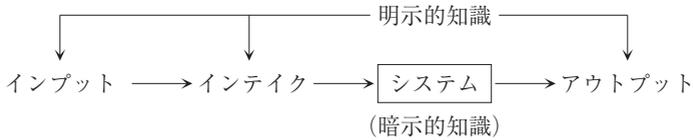


図1：第二言語習得過程 (VanPatten & Cadierno, 1993; Ellis, 1994 に基づく)

### 3. 暗示的知識と明示的知識

Krashen (1981, 1982) が習得 (acquisition) と学習 (learning) を区別して以来、第二言語学習者の言語知識は、暗示的知識 (implicit knowledge) と明示的知識 (explicit knowledge) の2つの異なる知識を想定して議論されてきた。暗示的知識は、言語形式を直感的に認識するもので、文法規則の手続き的な知識であり、自動的な処理によりアクセスが可能であり、言語による説明ができないとされる。一方、明示的知識は、言語形式を意識的に認識するもので、文法規則の宣言的な知識であり、制御的な処理によりアクセスが可能であり、言語による説明が可能である (Ellis, 2005)。また、明示的知識は準備時間 (planning time) がある、言語形式に焦点が当たっている、規則を知っているという条件下で働くといわれている (Krashen, 1981; 1982)。

暗示的知識は自然なコミュニケーション環境の下で、インプットへの気付きにより文法規則の構成・再構成という過程を経て習得される。一方、明示的知識は教室における文法指導という人為的な学習を通して形成される。したがって、文法指導の第一義的な目的は明示的知識の獲得である。

Krashen (1981, 1982) は、暗示的知識は発話の産出に責任をもつが、明示的知識は産出に対してモニターの機能しか果たさず、練習によって暗示的知識には変化しないという立場をとるが、明示的知識の役割を過小評価していると思われる。一方、Ellis (1994) は、図1が示すように、明示的知識がインプットへの気付きを促進する役割を果たし、習得過程のスピードアップに貢献すると主張している。

明示的知識が気づきに役立つことを教師の言い直し (recast) の観点から考察してみよう。教師の訂正的フィードバック (corrective feedback) に気づけるか否かは、明示的知識の有無による場合が多い。

(1)

T: What did you eat at breakfast yesterday?

S: I eated rice.

T: Oh, you ate rice at breakfast.

S: Yeah, I eated rice at breakfast yesterday

(2)

T: Where did you go last weekend?

S: I goed to Tokyo last Sunday.

T: Oh, you went to Tokyo last Sunday.

S: Yeah, I went to Tokyo last Sunday.

上記の2つの発話を比較すると、前述した明示的知識がインプットへの気づきに役立つことがわかる。(1)では、教師は生徒の発話の意味を変えずに形式上の誤り eated を ate に訂正して正しい形式をインプットしている。しかしながら、この生徒は動詞 eat が不規則動詞でその過去形が ate と不規則に変化することを知らない。したがって、教師の言い直しは功を奏せず、生徒は誤った形式 eated を繰り返している。eated でも文脈からコミュニケーションが成立してしまうからである。つまり、過去を表す副詞 yesterday が意味理解を助けているからである。一方、(2)の生徒は eat が不規則動詞であり eat-ate と活用変化することをすでに学習している。よって、誤った形式 goed に対する教師の went という言い直しによって気づきが起こり went と訂正したのである。このように、明示的知識は予備知識として気づきに貢献している。予備知識がない場合は教師の言い直しに気づかずに意味的处理をしてしまい、形式的処理をしないので言語的な発達が期待できない。

#### 4. インプット重視の文法指導

従来の伝統的な文法指導は産出の過程に焦点を当ててきた傾向がある。具体的な方法としては、新出事項の文法的な説明の後に、言語形式の正確な産出練習を行う。つまり、産出練習が習得を促進すると考えていたのである。しかし、産出練習は内在化された言語知識の自動化を促進する段階であり、目標言語の文法体系の内在化そのものを目標にしたものではない。このように、言語習得過程は、図1の流れ図でいえば右向きの矢印の方向に進むものであり、十分にシステムが構築されていない段階で、アウトプットの練習を課す文法指導は理に適っていない (Lee & VanPatten, 2003)。まずは正確なシステムを構築することが肝要である。

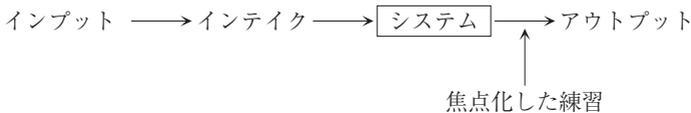


図2：伝統的な文法指導 (Lee & VanPatten, 2003 に基づく)

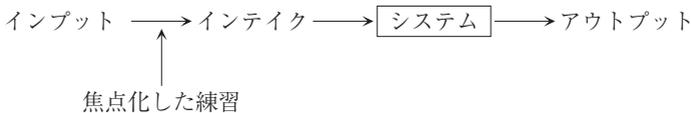


図3：インプット重視の文法指導 (Lee & VanPatten, 2003 に基づく)

図2は伝統的な文法指導を示したもので、アウトプット活動に焦点を当てて習得を期待するものである。それに対して図3は、インプットをインテイクしてシステムに送る過程に焦点を当てた練習を示している。アウトプット活動は持ち合わせている規則の自動化を促して発話の流暢さを高めるには効果的であるが、アウトプット活動によりシステムの中身そのものは変化または増加しないのである。

さて、2節で説明した言語習得過程を考慮せずに、文法説明のあとすぐに

アウトプットを図ろうとする教師が少なくない。なぜ教師はあんなにも「産出する」ことを急ぐのであろうか。急がば回れである。

## 5. 晒しに基づく指導

ここまでは文法指導におけるインプットの重要性を述べてきた。では、インプットを重視した文法指導はどのように具現化されるべきか。Ellis (2012) はインプットに基づく指導を、まず、晒しに基づく (exposure-based) 指導と反応に基づく (response-based) 指導とに分類し、前者をインプットの増加 (enriched input) とインプットの強化 (enhanced input) に細分類している (p. 285)。前者は頻度 (frequency) に関連し、後者は突出度 (saliency) に関連する。いずれも気づきを促すという点では共通している。

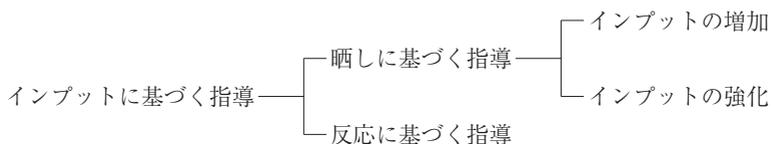


図4：インプットに基づく指導 (Ellis, 2012, p. 285 に基づく)

### 5.1 インプットの増加

気づかれたインプットだけがインテイクされてシステムの中に入る。図5をみればその関係は一目瞭然である。問題はいかにインプットからインテイクへ情報を送るかである。インプットの一部のみがインテイクされることを考えると確率的にインプットの量は多ければ多いほど良い。人為的な教室という環境で英語を外国語として学習している日本人学習者にとって、インプットの機会が少ないことは論を待たない。目標とする文法特性を含むインプットを大量に与えることにより、その文法特性に気づく機会を増やす必要がある。

教室という学習環境においてインプット量を増やす方法として Total Physical Response (TPR) が挙げられる。この指導法は Asher により提唱さ

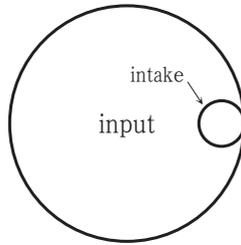


図5：インプットとインテイクの関係

れたもので、言語活動と全身運動とを連合させることにより言語の定着を目標とするものである。生徒はリスニングによって意味を理解し、言語を習得することを目標とする。そして、生徒は教師が発する指示に全身を使って反応することが求められる。その指導法の特徴は、(1) 学習者が話す準備が整うまで産出を遅らせる、(2) 命令文を通して文法的構造を導入することにより言語への晒しを最大にする、(3) 文脈から意味を推論できる上級段階に到達するまで抽象的な言語を先送りする (Ellis, 2012, p. 58)。さらに、この方法では生徒が教師の指示を理解しているか否かを教師が容易にモニターすることができる。教師の指示にしたがった動作ができない生徒は、教師の発話が理解できなかったと解釈することができるからである。この指導法は学習の初期段階に導入されることが多いと言われているが、次の例のように、関係代名詞などの複雑な構文にも適用することができる。

Touch a boy who is wearing a blue shirt.

Give the flowers to a boy that you like.

この指導法をゲームに応用したものが Simon Says である。このゲームの規則は鬼 (it) が “Simon says” と言った場合にはその指示にしたがいがい、言わなかった場合にはその指示にしたがってはいけないという単純なものである。鬼にはどのような命令を出してもよいという選択の自由がある。したがって、鬼以外の参加者は鬼がどんな指示を出すか集中して聞かなければならない。

ゲームでの具体的な指示を次に示す（島田，1986）。

Touch your hair.

Touch your nose.

Close your eyes.

Open your eyes.

Clap your hands.

Raise your hand.

Oral Method の代表的な技法に口頭導入 (oral introduction) がある。口頭導入では、教師が教科書の本文の内容を易しい英語で生徒に語りかけながら、新出単語・語彙や文法項目などを導入し、実際の本文のリーディングへとつなげていく。口頭導入によって、目標とする文法項目を繰り返し使用し、気づきを促進することができる。

次は、教科書の本文 ('I Have Never Seen You Before' (Part 1) *Orbit English Reading*. 三省堂 2006. pp. 76-77.) の概要を紹介する際に、本時の目標である過去完了形を繰り返し使って、本文の内容を言い換えた実例である。教科書本文では過去完了形の使用は1回に過ぎないが、口頭導入で4回にその使用頻度を増やしている。

This is a story of a safebreaker, Jimmy. As soon as Jimmy left the prison, he came back to his house to get his tools for breaking safes open. Two weeks later, a safe in Jefferson City was robbed. Nobody knows who broke the safe open. However, when the safe in Jefferson City was robbed, Jimmy had left the prison. He moved to a small town called Elmore and fell in love with a young lady. He started a shoe store in Elmore. When he started the business, he had decided to live in the town. Soon he changed his name from Jimmy Valentine to Ralph. D. Spencer. He made a lot of friends. One of his friends introduced him to the lady,

Annabel. Jimmy and Annabel gradually became friendly. When they were engaged, the shoe store business had worked well. Jimmy had firmly resolved to give up breaking safes open. (島田, 2012, p. 113)

## 5.2 インプットの強化

インプット増強は、目標項目の出現頻度を増やすことにより気づく機会を増やそうとする量的な手段であるが、インプット強化は、目標項目の突出度を上げることにより気づきを促そうとする質的な手段である。具体的な方法としては、文字を太字体や斜字体にしたり、下線を引いたり、色を付けるなど目立たせることによって学習者がより気づきやすくすることである。音声面においては、生徒に気づいてほしい部分をゆっくりと、あるいは強く発音したりするのもこの考えを具現化したものである。

## 6. 反応に基づく指導

インプット処理 (input processing) 活動では、形式と意味を結合させ、インプットをインテイクさせることを目的とする。インプット処理活動は、まず学習者のインプット処理上の問題点を明らかにすることからスタートする。つまり、学習者が形式を処理する際に用いる不適切な方略を特定し、それを是正する。このインプット処理を具現化した指導法が構造化インプット活動 (structured input activities) である。

Ellis (2003) は構造化インプットの段階 (structured input stage) が焦点化タスク (focused task) の使用を含むとして、この種の焦点化タスクをデザインする一般原則を次のように述べている。

- (1) 解釈タスク (interpretation task)<sup>1</sup> は学習者が反応しなければならない刺激を含む
- (2) その刺激は口頭または文字によるインプットの形態をとる
- (3) その反応は様々な形態をとる。例えば、正誤を指摘する、ボックスにチェックを入れる、正しい絵を選択する、図を描く、行動で示すなど。しかし、い

ずれにしる、その反応は全くことばによるものではないか、最低限のことばによるものとする

(4) その活動は、まず意味に焦点を当てたもの、それから文法構造の形式と機能に気づかせるもの、最後に誤りを特定するもの、という順になる

(5) 学習者はインプットを自分の生活に関連させる、個人的な (personal)<sup>2</sup> 反応を示す機会を与えられなければならない (p. 160)

解釈タスクの要点は学習者に目標構造の産出を要求しないことである。そして、Lee & Vanpatten (2003) は構造化インプット活動を開発するためのガイドラインについて、次のように述べている。

- (1) 一時に1項目を提示せよ
- (2) 意味に焦点を当て続けよ
- (3) 文からディスコースへと移れ
- (4) 口頭と文字の両方のインプットを使え
- (5) インプットを使って学習者に何かをさせよ
- (6) 学習者の処理方略を常に念頭におけ (pp. 154-158)

では、構造化インプット活動が従来の文法指導とどのように異なるのかを、関係代名詞、過去形、受動態を例に、上記の原則と手順を参照しながら考察することにする。

- (1) Combine the two sentences into one using a relative pronoun.
  - a. Sarah is a girl. Paul loves her.
  - b. Sarah is a girl. She loves Paul.
- (2) Who loves whom?
  - a. Sarah is a girl that Paul loves.
  - b. Sarah is a girl that loves Paul.
  - a. (     ) loves (     ).
  - b. (     ) loves (     ).

関係代名詞を導入する際によく用いられる手法は、(1)にみられるように2文結合練習 (sentence combining exercise) である。この例では2つの文を関係代名詞を用いて1つの文にする産出練習を課している。一方、(2)においては、産出を強いることはせず、関係代名詞を含む文の意味的な理解に焦点を当てている。関係代名詞の主格と目的格では ( ) 内の人名 (Paul, Sarah) が入れ替わることに注目したい (島田, 2011)。

(3) Transform the sentence using the word in the parenthesis.

- a. Tom plays soccer. (yesterday)
- b. You watch TV for two hours. (last night)
- c. Mike studies English hard. (last week)

(4) Read the following activities and check off the ones that you did yesterday.

- a. I played soccer. ( )
- b. I watched TV for two hours. ( )
- c. I studied English very hard. ( )

(3)のような書き換えは問題集の練習問題としてよく見られる機械的ドリルの典型例である。一方、(4)は個人的活動に該当する。この文には過去を表わす副詞がない。従来は副詞は当該の文が過去の出来事を表すという意味解釈を容易にすると考えられてきたが、その副詞の存在が言語形式への気づきを阻害することになる。過去の接尾辞 -ed はそれ自体機能的な意味をもたないので、学習者は意味処理を副詞で行ってしまう。-ed は機能的な存在価値がないのである。過去の形態素 -ed を導入する場合、(3)のように、副詞とともに導入すれば、学習者は副詞によりこの文が過去の出来事を示すことを認識してしまい、冗長でコミュニケーション上の価値を持たない言語形式 -ed には注意を向けない。(4)のように、副詞を削除した文を与え、当該文が過去の出来事かそれとも現在の出来事かを判断させれば、学習者は過去の -ed に注意を向けるようになる (Lee & VanPatten, 2003; Wong, 2005)。

(5) Change the voice.

Hanako loved Taro.

(6) Who loves whom?

- a. Taro loved Hanako.
- b. Taro was loved by Hanako.

(5)は能動文を示しそれを受動態に変換する機械的なドリルであり、今も文法の授業では一般的に用いられている方法である。(6)は、例えば、愛情の表現として花子が太郎に花束を捧げている絵と、太郎が花子に花束を捧げている絵を示し、その絵に一致する文を a, b から選択させるタスクである。これは、最初の名詞が動作主であると解釈してしまう方略を是正する活動である。例のように、2つの文の意味の違いを解釈させて、能動態と受動態の違いに気づかせることができる。学習者が何に気づくかという、「違い」に気づくのである。形式の違いは意味の違いである。どうすれば気づくのかというと、対比、比較すれば気づきやすくなるのである。Ellis (1993)にも同様の活動が紹介されている。( )内の数字は正解の絵の番号を示す。

(1) 絵1：船が沈みかけている、絵2：氷山に当たって船が沈みかけている

- a. The ship sank on its maiden voyage. (1)
- b. The ship was sunk on its maiden voyage. (2)

(2) 絵1：男がベッドで死んでいる、絵2：男がベッドで死んでいてドアからナイフを持った女が出ていく

- a. The man was killed in his bed. (2)
- b. The man died in his bed. (1)

(3) 絵1：棚からコップが落ちた、絵2：棚からコップが落ちてその横には女の子が立っている

- a. The glass was broken when someone knocked it. (2)
- b. The glass broke when it fell. (1)

(4) 絵1：洗濯紐にシャツが吊って干してある、絵2：洗濯紐に女の人がシャ

ツを干している

- a. The shirt dried in the sun. (1)
- b. The shirt was dried in the sun. (2)

(5) 絵1：テーブルに牛乳がこぼれている，絵2：テーブルに牛乳がこぼれていて女の子が横に立っている

- a. The milk was spilt over the table. (2)
- b. The milk spilt over the table. (1) (pp. 74-75)

## 7. アウトプットの役割

ここまで文法指導におけるインプットの重要性について述べてきた。しかし、アウトプット指導に意味がないわけではない。アウトプットの役割は流暢性の向上であることは言うまでもない。正確なシステムが確立したあとで、アウトプットをすることは、暗示的知識へのアクセスをスピードアップし、発話の流暢性を促進する。反復、置換、変換の機械的な文型練習 (pattern practice) は、流暢性の向上に効果的である。

たしかに、アウトプットの機能として流暢性の向上は重要であるが、アウトプットを重視する立場は、他にも3つの機能があると主張する。その一つが気づきの促進である。目標言語を産出するときに、学習者は言いたいことと言えることとのギャップに気づき、知らないこと、あるいは部分的にしか知らないことを認識するようになると主張する (Swain, 1995)。つまり、アウトプットを重視する立場は、まずアウトプットさせることにより自分の問題点 (弱点) に気づかせることを重視する。言いたいことがあるのに言えない、伝えたいことがあるのにその言い方がわからないといった自分の弱点に気づくこと (noticing-the-hole) がインプットの形式に注意を向ける動機づけとなり、正しい言語形式に気づく (noticing-the-form) ののである (Swain, 1998)。そして、学習者が正しい言語形式と自分の誤りを含む言語形式との違いに気づいた (noticing-the-gap) ときに、再構築が起こるのである。このように、アウトプットを重要視する主張は、結局インプットの重要性へと回

帰する。

## 8. ま と め

本稿では文法説明の後すぐに産出を課すという授業展開パターンが第二言語習得という学習理論にマッチしていないことを指摘した。そして、第二言語習得過程を記述し、その過程が促進されるための望ましい文法指導のあり方について、インプット重視の観点から考察した。インプットに基づく指導は晒しに基づく指導と反応に基づく指導とに分類され、前者はインプットの増加とインプットの強化に細分類される。インプット増加の具体的な方法としてTPR、口頭導入の例を示した。反応に基づく指導に関しては、構造化インプット活動の原則とガイドラインを示し、関係代名詞、過去形、受動態を例にとって、従来の文法指導との違いに言及しながら具体的な活動を示した。本稿が英語教員を志望する学生や現職の英語教師のピリーフ修正に貢献することを期待する。

### 注

1. Ellis (1993)では解釈タスク (interpretation task) と呼んでいるが、これは Lee & VanPatten (2003) が提唱する構造化インプット活動 (structured input activities) とほぼ同義である。
2. Lee & VanPatten (2003) は情意的 (affective) という用語を用いている。

### 引用文献

- Ellis, R. (1993). Interpretation-based grammar teaching. *System*, 21, 69-78.
- Ellis, R. (1994). A theory of instructed second language acquisition. In N. Ellis (Ed.), *Implicit and explicit learning of languages*. (pp. 79-114). London: Academic Press.
- Ellis, R. (1997). *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (2005). Measuring implicit and explicit knowledge of a second language: A psychometric study. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 141-172.

- Krashen, S. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Lee, J. F., & VanPatten, B. (2003). *Making communicative language teaching happen (Second edition)*. New York: McGraw-Hill.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook, & B. Seidlhofer (Eds.), *Principle & practice in applied linguistics* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.
- Swain, M. (1998). Focus on form through conscious reflection. In C. Doughty, & J. William (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition*. (pp. 64-81). Cambridge: Cambridge University press.
- VanPatten, B. (2003). *From input to output: A teacher's guide to second language acquisition*. New York: McGraw Hill.
- VanPatten, B., & Cardierno, T. (1993). Explicit instruction and input processing. *Studies in Second Language Acquisition*, 15, 225-243.
- Wong, W. (2005). *Input enhancement: From theory and research to the classroom*. New York: McGraw-Hill.
- 島田勝正 (1986) 「Communicative Language Teaching の理論と実践」 三重大学教育専攻科学研究論文
- 島田勝正 (2011) 「インプット処理に焦点を当てた文法指導」 2011年度桃山学院大学英語教員夏季ワークショップ配布資料
- 島田勝正 (2012) 「タスク支援型の構成」 青木昭六 (編著) 『英語科教育のフロンティア』 (pp. 108-116). 大阪: 保育出版社

## Input-based Grammar Instruction

**SHIMADA, Katsumasa**

In second language classrooms, some teachers are likely to have their students produce the newly learned target structures immediately after introducing the items. It seems that there is a mismatch between how teachers teach and how students learn a second language. The purpose of this paper is to examine how a second language is learned, and to discuss how teachers should teach grammar on the basis of the second language acquisition (SLA) process. In the SLA process, input comes first and then output; therefore, learners should not be required to produce the new target structures as soon as they are introduced.

Input-based, as opposed to output-based, grammar instruction can be divided into exposure-based and response-based instruction. Exposure-based instruction can be further classified into input enrichment and input enhancement. Total Physical Response and oral introduction are effective ways of enriching input. Frequent inputs cause learners to pay attention to the target structures. Using bold text, underlying and highlighting are ways of enhancing inputs so they are likely to be noticed.

Structured input activities are good response-based ways of teaching grammar, which do not require learners to produce the target structure; instead, they involve a stimulus to which learners must make some kind of response. Principles of response-based instruction are discussed in comparison with traditional grammar teaching, using examples of relative pronoun, past tense, and passive voice.

# The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion: Hawthorne's "The Minister's Black Veil": A Parable

SASAKI, Eitetsu

So far as I am a man of really individual attributes, I veil my face.

Nathaniel Hawthorne. "Mosses from an Old Manse."

Introduction

- I. Hooper as an Existential Hero
  - II. Suspicion about Hooper's Existential Stance
  - III. Isolation from the Other(s)
  - IV. Allegory out of Order
  - V. Hawthorne's Self-Portrait as the Veiled Minister
- Conclusion

## Introduction

In 1836, one year after the publication of "The Young Goodman Brown" in *New England Magazine*, "The Minister's Black Veil" appeared in *The Token*. The successive publication of the works seems to suggest they shared a particular theme in common. True or not aside, Goodman Brown fantasizes that the people, young and old, men and women, people whom he thinks pious and lofty, gather in the woods to participate in a Black Mass. Brown completely ceases to rely on the goodness of the people, including his allegorically named wife, Faith, after hallucinating "their secret deeds: how hoary-bearded elders of the church have whispered wanton words to the young maids of their houses; how many a

---

Keywords: Hawthorne, Allegory, Veil, Deconstruction, Isolation

woman, eager for widows' weeds, has given her husband a drink at bedtime and let him sleep his last sleep in her bosom; how beardless youths have made haste to inherit their fathers' wealth; and how fair damsels . . . have dug little graves in the garden, and bidden [the Satan], the sole guest to an infant's funeral" (X: 89) Unlike the immature Goodman Brown, who innocently believes in human goodness and is ultimately betrayed, it can be argued that the Reverend Hooper first dons the veil out of a belief in total depravity, one of the Puritan tenets, and virtually validates the interpretation of Michael J. Colacurcio, who "singles out 'Young Goodman Brown' and 'The Minister's Black Veil' as the crowning achievements of Hawthorne's first period" (Martin 232). Colacurcio contends that "Hooper's career can fairly be said to begin where Brown's ends" (317), but he concedes that Hooper, having proceeded one step further from Goodman Brown, "is evidently doomed to solipsism and rejection of life as utterly as is Goodman Brown" (317). We hope that "The Minister's Black Veil" will give us clues to understand Hawthorne when we recall that Colacurcio identifies Hooper "in his absolutism . . . a Digby figure [Digby is a protagonist of "The Man of Adamant"] and situates him somewhere "beyond Goodman Brown and on his way to being Dimmesdale [the protagonist of *The Scarlet Letter*]" (318).

Indeed Hooper recognizes himself and is seen by others as a laudable spiritual (religious) guide. This is chiefly because Hooper takes a stand as a minister, as a shepherd for the flock, who are alleged to be moral deviants. Ironically, he is all the more qualified to do so by the rumor of his crime, a serious crime associated with Mr. Joseph Moody, a historically extant minister who accidentally killed his friend. From here a problem springs up: does Hooper deserve to be called heroic, the praiseful word used by the existentially bent critics? If we interpret this story from the Existentialist viewpoint of G. A. Santangelo and Raymond Benoit, we may be temporarily inclined to define Hooper as an Existential hero. Yet here we are immediately checked from jumping into unqualified praise by remembering that Existentialism lost its power in the argument between Jean-Paul Sartre the Existentialist and Claude Lévi-Strauss the Structuralist. Hue and cry is directed against Hooper by critics such as N. S. Boone, Samuel Coal, Michael J. Colacurcio, Richard H. Millington, Lea Bertani Vozar Newman, E. Earle Stibitz, and Judith P. Saunders. Hooper's unrated performance thus continues to provoke critics, myself included.

While turning over the issue of Hooper's (un)heroicness in my mind, I encountered a hedging statement that seemed somewhat idiosyncratic to the reclusive Hawthorne. The expression is extracted from "Mosses from an Old Manse" (1846) in *Mosses*.

Has the reader gone wandering, hand in hand with me, through the inner passages of my being? and have we groped together into all its chambers and examined their treasures or their rubbish? Not so. . . . So far as I am a man of really individual attributes, I veil my face; nor am I, nor have I ever been, one of those supremely hospitable people who serve up their own hearts, delicately fried, with brain sauce, as a tidbit for their beloved public. (my italics, X: 32-33)

The above-citation validates Robert Milder's comment that "Hawthorne's closing moral [in *The Scarlet Letter*] — 'Be true! Be true! Be true! Show freely to the world . . . some trait whereby the worst might be inferred!' (I: 260) — is misleading" (31). Then, is it possible to postulate the correspondence of Hawthorne to the veiled author of "Mosses from an Old Manse," and, by inference, to the veiled minister, the reverend Hooper in "The Minister's Black Veil"? If so, how close is Hawthorne to Hooper?<sup>1</sup> Does the above citation suggest the posture of the two toward their readers . . . the posture of Hawthorne the professional writer of "The Minister's Black Veil," and the implied story teller of "Mosses from an Old Manse"? Is it also suggestive of the obstinate posture taken by the (anti-)heroic minister Hooper toward his flock? Is the relation between the two, Hawthorne and his readers, allegorically depicted in the relationship between the maverick (anti-)hero Hooper and his congregation?

Hypothesizing that Hawthorne is closely relevant to Hooper, if not his double, I define my goal in gauging how successfully or poorly Hawthorne managed to maintain or shorten the distance between himself and his readers, himself and the outer world in general. This has something to do with the problem forging a relation between the subject—if taken favorably, an individualist; if not, an eccentric isolato—and others. As is generally known, this problem has continued to attract philosophers, modern and postmodern alike. In approaching to this task, I will refer to (post-)modern philosophies (Existentialism and Deconstruc-

tionism) and (Lévinas') ethics, and then disambiguate some of the remarkable dispositions that Hooper shows: the dispositions that make Hooper (plausibly) appear to be an existentially praiseworthy maverick divine, but simultaneously leave him vulnerable, both psychologically and ethically. In this paper, I will start by viewing "The Minister's Black Veil" from the perspective of Existentialism, the driving force and landmark of modernity. Then, after verifying the minister's unheroicness as a proto-/pseudo-Existentialist, I will take the standpoint of Postmodernism/Deconstructionism and Lévinas' ethics to interpret the veiled minister in a different way.

The analysis of "The Minister's Black Veil," one may think, will be a stepping stone not just for understanding Hawthorne's other works, but for Melville's works as well. Recall that in Melville the veil is symbolically exchangeable with the mask. In his *American Notebooks*, Hawthorne differentiates veil from mask, but in "The Minister's Black Veil," as Clark Davis indicates (14), "Hooper's 'veil' is or becomes a 'mask.'" In *Moby-Dick*, the anti-heroic protagonist(s) Ahab (and perhaps Ishmael, as well) is resolutely determined to "strike through the mask" (164), and confronts/unmasks/unveils the mysterious and monstrous being, Moby Dick. In *Pierre*, the eponymous anti-hero encounters his putative half-sister, the girl who unveils herself [/professes herself] as Isabel, the name weirdly resonant with Jezebel, the evil wife of King Ahab in the Old Testament. Isabel exposes to him her "mysterious, haunting face" (37) a face which, according to Lucy, Pierre's (ex-)fiancée, "thou [Pierre] once told'st me [Lucy], thou didst thrice vainly try to shun" (37), so that Isabel may demand her half-brother to acknowledge her.<sup>2</sup> Both cases, Ahab's[/Ishmael's] and Pierre's, reflect a similarly problematic mechanism in reality perception/distortion. I hope this paper will open new territory in clarifying the face/personality perception mechanism as a clue for understanding the veiled/masked other(s) in Melville's works.

### I. Hooper as an Existential Hero

Before commencing discussion, it will be useful to succinctly review the "The Minister's Black Veil." This is a short story about a minister who frightens his parishioners by concealing his face with a black veil. In spite of the torment he brings upon himself by frightening and bewildering his parishioners, the min-

ister adamantly repudiates their requests to remove the veil, even the requests from his fiancée Elizabeth and the Reverend Mr. Clark. Elizabeth, the “one person in the village unappalled by the awe with which the black veil had impressed all beside herself” directly urges him to “lay aside your black veil: then tell me why you put it on” (45).<sup>3</sup> Her urging proves to be fruitless. “[W]ith this gentle, but unconquerable obstinacy did he resist all her entreaties” (46). Much later, “the Reverend Mr. Clark . . . of Westbury, a young and zealous divine, who had ridden in haste to pray by the bedside of the expiring minister” (50) implores, “Before the veil of eternity be lifted, let me cast aside this black veil from your face!” (51) Then, “exerting a sudden energy, that made all the beholders stand aghast, Father Hooper snatched both his hands from beneath the bedclothes, and pressed them strongly on the black veil, resolute to struggle, if the minister of Westbury would contend with a dying man” (51–52). In accordance with Mr. Hooper’s wishes, he is not unveiled when brought to his tomb.

Hooper’s logic for wearing the veil, reasonable to him but unintelligible to the parishioners, seems to be partly based on the holdover effect of Puritanism or dogmatic total depravity. Just before his death Hooper exclaims, “lo! on every visage a Black Veil!” (52) The minister (mis)understands that every parishioner “loathsomely treasur[es] up the secret of his sin,” hiding it with a black veil, “vainly shrink[ing] from the eye of his Creator,” averse to show “his inmost heart to his friend; the lover to his best beloved” (52). From this last-ditch desperate effort, it turns out that he deserves to be “deem[ed] . . . a monster” (52). While painfully sensitized to his inability to escape from his own Puritan dogma, dogma he must have negatively inherited from his witch-hunting ancestors, Hawthorne took an anthropocentric stance.<sup>4</sup> As if a precursor to Freud, whose theory dwells on the negative but inescapable effects of the suppressed amoral desires of the unconscious, Hawthorne compared the human heart to something dark and hideous, something to be hidden (Hagiwara 10, 28–30). In “The Haunted Mind,” he writes, “In the depth of every heart, there is a tomb and a dungeon, though the lights, the music, and revelry above may cause us to forget their existence, and the buried ones, or prisoners whom they hide” (IX: 326). Hooper, and probably Hawthorne, are pressured to disabuse the parishioners, the sexton, the younger clergyman Mr. Clark, and Hooper’s former fiancée, Elizabeth, of their conscious or unconscious escape into the trivialities of daily

life to avoid directly facing the hidden (abortive) sins. Hooper can admittedly be likened to a slightly grown figure of Goodman Brown, the protagonist of Hawthorne's previous story. Brown sees illusory phantasmagoria and becomes (dis)inclined to recognize what he sees, while Hooper decides to don the veil to symbolize the dark sides of the human heart that Hooper recognizes in all persons.

In a sense, Hooper should be evaluated from an existential perspective. With a mindset similar to an Existentialist's, Hawthorne writes as follows in *The American Notebooks*:

Indeed we are but shadows; we are not endowed with real life, and all that seems most real about us is but the thinnest substance of a dream—till the heart be touched. That touch creates us, then we begin to *be*; thereby we are beings of reality.

(my italics) Salem, Oct. 4th, 1839. Union Street [Family Mansion], *The American Notebooks*.

Hawthorne, it seems, recognizes that one could live a consummate life if only one confronted the disagreeable reality of one's own psyche. The psyche is made up of conflicting elements, but one is and will be unsure of what element will dominate the other. Put in a different light, if one chose not to adopt, borrowing the Heideggerian terminology, "Existence," or the state of "being able to identify with a mode of [meaningful] being" . . . one would reduce "Existence" to a mere presence and lose the moment of reflecting on oneself (Carreira). As I have previously mentioned, Hawthorne suggests that acute awareness of one's dark side makes it possible to draw nearer to the state of "Existence," the state in a Heideggerian sense. By donning the veil, Hooper takes a preliminary step toward understanding the dark/sinful aspect of his being, a step that promises him a new relation with most, if not all, of his parishioners. This explains the following scene:

His converts always regarded him with a dread peculiar to themselves, affirming, though but figuratively, that, before he brought them to celestial light, they had been with him behind the black veil. Its gloom, indeed, en-

abled him to sympathize with all dark affections. Dying sinners cried aloud for Mr. Hooper, and would not yield their breath till he appeared.  
(50)

As a man who deliberately strives to confront all aspects embraced by his heart and thereby to live his own subjective life, Hooper silently accuses the people around him of apathetically but self-complacently living half-lives (spiritually slothful lives) in delusory worlds. Hooper's mentality, which allocates the initiated/awakened only to himself and the uninitiated/unawakened to his flock, is no different from Brown's in the author's previous work. With the veil and its synonymous "crape" (a type of cloth for mourning) alternately used in the story, Hooper tries to suggest that the black veil/crepe is a euphemism for death. Raymond Benoit also points out that the death symbolized by the black veil is equivalent to blindness to and delusion of sin and evil. Those in the Freudian school of thinking, Frederic Crews for instance, would assume that the veil is symbolic of the libidinous (carnal) nature of the human psyche. If we follow the Existentialist minded Benoit or Freudian scholar Crews, we can say that a meaningful life is made possible only when one deliberates on death (the death drive ("Thanatos") and the essentially carnal nature of humans). Without such deliberation, one would be unable to live out one's own individual life or to prove one's uniqueness among the multitude. Hooper seems to recognize, as Heidegger did, that the uniqueness and possibilities of one's own life depend, paradoxically, on an awareness of death. This realization forces Hooper to live in a realm next door to death itself. The realization dramatically comes to light on two occasions, the funeral and the marriage ceremonies held on the very day when Hooper first dons the veil over his face. A marriage ceremony generally symbolizes an opening of the status of "being alongside" or "being with" other entities in one's engagement with the world, and thus functions as a preliminary step for what Heidegger may call "Existence." A funeral, in contrast, embodies how "being" finally becomes one's own and achieves a Heideggerian Existence. Thus, Hooper's awareness of the significance of both the marriage ceremony and funeral qualifies him as a precursor to the Existentialist. Hawthorne, meanwhile, holds his judgment over Hooper's stance in suspense by putting the final touch on the last page of "The Minister's Black Veil": "awful is still the thought that

it [Hooper's secret sin] mouldered beneath the Black Veil!" (53)

## II. Suspicion about Hooper's Existential Stance

To verify whether Hooper is an Existentialist in the genuine sense and to understand what prevents Hawthorne from fully appraising Hooper, let us first direct our attention to, Søren Aabye Kierkegaard (1813-55), the precursor to Existentialism, and then consider the criticism against Kierkegaard by Albert Camus (1913-60), the existentialistic writer who kept his distance from the Existentialists. We see here Camus detect and expose a certain falsehood and pitfall hidden in Kierkegaard ... a paradoxical blind spot. As Camus sees it, the Existentialism-infected Kierkegaard willfully accepts "pain." The pain referred to is the constant cautionary reminder of malefic arrogance, as described in chapter 12, verse 7 of the Second Corinthians: "... lest I should be exalted above measure through the abundance of the revelations, there was given to me a thorn in the flesh." Kierkegaard accepts the pain so as not to forget the danger of arrogance, but he is likely to turn the pain around into the very cause of arrogance. Camus writes:

[Kierkegaard] refuses consolations, ethics, reliable principles. As for that thorn he feels in his heart, he is careful not to quiet its pain. On the contrary, he awakens it and, in the desperate joy of a man crucified and happy to be so, he builds up piece by piece lucidity, refusal, make-believe a category of the man possessed. (*The Myth of Sisyphus*, 24)

In a word, a self-tormenting Existentialist becomes a being similar to yet different from Jesus Christ: a masochistic Satan who derives pleasure from self-torment. This pathology urges the sufferer to concentrate on himself, which not only wrests from him his ability to see himself objectively, but also isolates him from others and causes him to appear to them all the more satanic. To be accurate, Hooper is blind to himself. As E. Earl Stibitz designates (182), "[the] irony is compounded in that Hooper's sin is a hidden one ... hidden not only from his fellows but from himself." This ironic symptom reminds us of some other protagonists in Hawthorne's works. Young Goodman Brown, after witnessing the Black Mass in the woods, strives in vain to keep himself uncontaminated by

the evil-hiding community members and ultimately turns into the misanthropic Old Badman Brown. Dr. Giacomo Rappaccini, the reclusive yet power-aspiring pharmacologist in “Rappaccini’s Daughter,” incarcerates his daughter in a mock Edenic herb garden to put her out of touch with evil society, then uses his homeopathic skills to inject her with poison that makes her resilient to evil. Rappaccini intends, like God, to create a spotless and evil-rejecting creature (his daughter Beatrice), but later Beatrice is killed when her young lover Giovanni Guasconti, a stand-in for the secular-world, induces her to take a lethal antidote. Hooper, Brown, and Rappaccini are those who give their allegiance to Satan in their attempt to assume the role of god.

According to Camus, if one can explain a world with one’s reason [ / belief / ideology], no matter how far-fetched, one can live comfortably in the world, with all of its unbearable conflicts or, to use Camus’ word, absurdities. If one loses the tools by which to explain the world, one feels oneself as an outsider in the world, suddenly drained of *illusion and light*. In the case of “The Young Goodman Brown,” this *illusion and light* corresponds to Brown’s naïve belief/faith in Faith’s [his wife’s] moral innocence [sexual purity], the goodness of the parishioners, and by extension Puritanism. Here, his wife Faith allegorizes not the dogmatic Puritanism but the secularized easy-to-accept Christianity. Losing the *illusion and light*, Brown becomes an outsider. In stark contrast to Brown, Hooper doubts the innocence of the people from the outset. In this respect Hooper has already outgrown Brown, though only slightly. Throughout his life, Hooper sticks to his belief/ideology/illusion that all people, without exception, himself included, are to be damned. Both the world where Hooper lives and the people around him appear to be explained by his cherished *illusion*/ideology. That said, Hooper resembles Brown. In both characters, the total depravity doctrine is unduly operative, and therefore “[b]y the sympathy of [their] human hearts for sin [they] shall scent out all the places . . . whether in church, bed-chamber, street, field, or forest . . . where crime has been committed, and shall exult to behold the whole earth one stain of guilt, one mighty blood spot” (X: 87). In the implied narrator’s descriptions, Hooper also resembles Brown as an outsider apart from society: “All through life that piece of crape had hung between him and the world: it had separated him from cheerful brotherhood and woman’s love, and kept him in that saddest of all prisons, his own heart” (50).

Hooper hints at not only his own secret sin, but also those of the parishioners, and he exhorts them to reveal it. He appears, ironically enough, to be concealing something evil with his veil while letting the parishioners conjecture saucy stories about what the veil conceals.<sup>5</sup> Some of them boldly exclaim, “Our parson has gone mad!” Richard H. Fogle succinctly sums up: “The vulgar interpret the meaning vulgarly, the complacent complacently, and man of good will regretfully” (36). From his very first moments wearing the veil, Hooper tries to demonstrate with the veil the undeniable and ineligible presence of evil. Putatively, the source of the image transmitted through the black veil is Hooper’s sin, but the image remains ambiguous to the beholders: “[A] cloud seemed to have rolled duskily from beneath the black crape, and dimmed the light of the candles” (43), when Hooper shows up before the throng at the wedding ceremony. Hooper, at this moment, is ambiguous to the deputation of the church, whose duty is to persuade the minister to remove the veil, that “piece of crape . . . [that] seemed to hang down before his heart, the symbol of a fearful secret between him and them” (45). Thus, Hooper’s isolation deepens.

The parishioners’ response to Hooper will seem understandable to readers within the historical setting of the story, the first half and middle of the eighteenth century. The time frame is confirmed by the narrator’s references to the two figures, Joseph Moody (1700–53) and Governor Belcher (in office: 1730–41). Readers are told that “about eighty years” have passed since the death of Moody, a clergyman with “the same eccentricity” who allegedly killed a man (53). In addition, Hooper is appointed to preach the election sermon during Governor Belcher’s administration, a period when two sects vied for predominance, traditional Puritanism reinforced by the Great Awakening Movement versus enlightenment or secular-minded Deism. These two sects are represented by the two authoritative men in both history and in Hawthorne’s story. Belcher, the personification of traditional Puritanism, was influenced by George Whitfield, the driving force, along with Jonathan Edwards of the Great Awakening. The personification of secular-minded Deism is “Old Squire Saunders, [who,] doubtless by an accidental lapse of memory, neglected to invite Mr. Hooper to his table, where the good clergyman had been wont to bless the food, almost every Sunday since his settlement” (41). According to Colacurcio (351), “Old Squire Saunders” is a reflection of “Poor Richard” Saunders of Benjamin Franklin’s

Almanac. By withholding an invitation to Sunday dinner, Saunders' shows his embarrassment at seeing Hooper's anachronistic stance.

The educated naturally must have imbibed Neoclassicism, the eighteenth-century zeitgeist that overemphasized reason, the zeitgeist in whose name, as Michel Foucault formulates, the abnormal were expelled and incarcerated/institutionalized. "By persons who claimed a superiority to popular prejudice, it [Hooper's veil] was reckoned to be merely an eccentric whim, such as often mingles with the sober actions of men otherwise rational, and tinges them all with its own semblance of insanity" (50). There must have been, however, a greater number of ignorant people. Though living in the age of emerging Enlightenment, the eighteenth-century Puritans must have been disconcerted by this diabolic figure endowed with the potential power to make their hidden veils/sins visible and tangible. Similarly, the parishioners in "The Minister's Black Veil" are urged to protect themselves from the terrifying special power emanating from the minister's veil by reducing the enigmatic into the mundane. They react to Hooper irrationally and impolitely. "[T]he gentle and timid" would turn aside to avoid him" (50). Ambushing the minister at the burial ground to which he takes his customary walk at sunset, the impertinent secretly enjoy "peeping at his black veil" while "he leaned pensively over the gate" (50). His parishioners, decent or indecent, intelligent or unintelligent, react to the minister in exactly the same way, either summarily rejecting his message of the black veil or avoiding direct confrontation with the image of their own sinful minds reflected in the veiled face of the minister. To these people, Hooper appears to be a "bugbear" (50). Prone to the inescapable influence from the adults around them, even the children "babbled of it [Hooper's black veil] on their way to school," and "fled from his approach, breaking up their merriest sports, while his melancholy figure was yet afar off" (50). One "imitative little imp covered his face with an old black handkerchief, thereby so affrighting his playmates that the panic seized himself, and he well-nigh lost his wits by his own waggery" (44). In addition, "[s]trangers came long distances to attend service at his church, with the mere idle purpose of gazing at his figure" (50). We witness how Hooper, rumored behind his back, secretly ridiculed, mockingly imitated, and ambushed to be peeped at, is reduced to such a shameful state. Hawthorne's humane subject is degraded into a ridiculous object: Hooper is, in Hawthorne's

phrase, (*un*)*pardonably* wronged by a rude herd of parishioners.

All the people, children and adults, strangers and local residents alike, almost unanimously react by showing the same clichéd pattern of behavior. Their reaction to Hooper is expected from the beginning. By conforming to the clichéd pattern of behavior and perception, they lose their independent subjectivities and become mesmerized automata. For that matter, the Reverend Hooper also loses his subjectivity by yielding to the behavioral pattern that cliché demands. Veilless externally (but veiled internally) though they are, and veiled though he is, there is no difference between the two, the mob and the minister. Because communion consists of two parties, the minister and the congregation, both automata, it is almost impossible for Hooper to make a direct appeal to the congregation. Hence, he suffers unavoidable isolation. While isolation is the anticipated outcome of the awakened Existentialist, Hooper's isolation seems to too exorbitant to overlook.

### III. Isolation from the Other(s)

What prevents Hooper from carrying out his responsibility of keeping in contact with the world, or to use the word of Jean-Paul Sartre, *Engagement* (in French)? One of the causes for Hooper's isolation is his solipsism, a trait I will elaborate later in this paper. First, however, I need to propose an argument on some of the other causes. The reader will recall how isolated the minister is from the parishioners, his fiancée, God, and even himself. We have already seen his isolation from his parishioners in their disrespectful and somewhat comical reaction toward him. In the following, we note that Hooper's reverence for the authentic Puritanism does not necessarily signify that he stands beside God. To the contrary it suggests that the minister is far from being a servant of God. For starters, we will investigate the relation between Hooper and his fiancée Elizabeth to glean clues for understanding how distant the minister actually is from God.

Elizabeth is portrayed in the vein of a Domestic Angels, the woman as the paragon object of the nascent middle-class feminine culture, over-idealized though slightly insensitive in Hawthorne's works, the type of women best represented by Annie in "The Artist of the Beautiful" and Phoebe in *The House of the Seven Gables*. The unbalance between Head [the Rational, Scientific-Objectivity-

oriented, Cold Hearted] and Heart [the Emotional, Sympathetic, Humanely Warm] has often been reiterated in the criticism of Hawthorne's work. In most cases, scientists such as Aylmer in "The Birth-Mark," Chillingworth in *The Scarlet Letter*, and Westervelt in *The Blithedale Romance*, are blamed for their overgrown heads and their byproduct arrogance, whereas female characters like Georgiana, Hester, and the Priscilla/Zenobia sisters are victimized by the intelligent but egocentric male characters. Here, in "The Minister's Black Veil," the problem turns out to be Hooper's "Heart," not the overgrown head of a scientist. Just as Hester does towards the Reverend Dimmesdale in *The Scarlet Letter*, Elizabeth in "The Minister's Black Veil" redresses the blown-up heart of minister Hooper, who sticks to the anachronistic Puritan dogma. Unlike Hester, who succeeds to a certain extent in her effort to redress and encourage Dimmesdale, Elizabeth is spurned by Hooper, and Hooper flatly rejects her request to remove the veil. If Elizabeth cannot mollify this adamant minister, no one can. Estrangement from Elizabeth symbolizes the minister's detachment from God, as well, as the biblical name Elizabeth connotes a woman who faithfully serves God (Stein 389). Due to his erroneous stressing of individualistic Existentialism, Hooper deepens his isolation from God as well as from Elizabeth and the parishioners. He remains blasphemous in the realm of *absurdity* while holding fast to the "celestial hopes" (42) that "though this veil must be between us here on earth . . . It is but a mortal veil . . . it is not for eternity!" (47) Hooper undauntedly and mockingly imitates God, who says to Moses, "Thou canst not see my face: for there shall no man see me, and live" (Exod. 33.20). Thus, Hooper rejects his fiancée with the name of Elizabeth, the female faithfully serving God . . . though the God in question seems to be secularized in the emerging capitalist society of eighteenth-century America. This means that Hooper turns his back on God, and deviates from the teaching of St. Paul passed on by William Bysshe Stein in his citation of the Second Epistle to Corinthians 2.17, "in the sight of God, speak we in Christ." Hooper gives a smile, "which always appeared like "a faint glimmering of light, proceeding from the obscurity beneath the veil." The New Testament describes not "a faint glimmering light," but a light commanded to shine out of the darkness by God, who "hath shined in our hearts, to give the light of the knowledge of the glory of God in the face of Jesus Christ" (2 Cor. 4.6). With momentary light emitting from his "faint" and "sad" smile, Hooper

reveals his infirm belief in God and in himself. Unlike God who “hath shined in our hearts,” Hooper “give[s] a darkened aspect to all living and inanimate things” (38), and “seek[s] to hide it [his secret sin] from the dread Being whom he was addressing” (39). Here, we may come to suspect whether Hooper is truly determined to carry out his objective, which is proving God’s power to detect all of the sins secretly committed or (abortive) crimes planned by the congregation. Returning once more to the Second Corinthians (3.18), we see that Hooper’s behavior directly opposes the advice on behavior to pious Christians from St. Paul, who writes, “we all, with open face beholding in a glass the glory of the Lord.” As such, we would be remiss to ignore as groundless the rumor from the unenlightened villagers, that “ghost and fiend consorted with him” (50). When St. Paul goes on to say, “we all . . . are changed into the same image from glory to glory, even as by the Spirit of the Lord,” we are induced to see Hooper as a figure far from the “the same image,” as Hooper has already “transforme[d]” into a satanic being. His terror upon “catching a glimpse of his own figure in the looking-glass” (43) as he raised the wine to his lips at the wedding ceremony is a natural reaction, as wine suggests Christ, whom Hooper probably sees as a detector and punisher of satanic sinners.

Let us turn again to Hooper’s initial intention of wearing the veil, and then to the unintended and negative effects that his veil confers upon him. This analysis will be helpful in understanding what prevents Hawthorne from taking sides with Hooper. As a Puritan minister, Hooper assumes that “they [parishioners], and himself, and all of mortal race” bear “secret sin, and those sad mysteries which we hide from our nearest and dearest, and would fain conceal from our own consciousness, even forgetting that the Omniscient can detect them,” at “the dreadful hour that should snatch the veil from their faces” (42). As a tacit reminder of the difficulty of being saved, Hooper’s veil evinces the narrow-mindedness of Calvinism. Here, let us suppose the following: the veil that Hooper wears corresponds to the letter A [Adultery] that Dimmesdale hides; and the veil is figuratively equal to and substituted for a letter. In this case, we should change the biblical message of the Second Corinthian . . . “the epistle of Christ . . . written . . . with the Spirit of the living God; not in the tables of stone but in fleshly tables of the heart” . . . into this: Hooper’s message is not “written by the Spirit of the living God”; but as if carved “on tables of stone.”<sup>6</sup> Hooper is

thus petrified.<sup>7</sup>

Throughout his entire life, Hooper is caged in his own Puritan view of total depravity, a view that he probably believes he has a perfect command over but that in fact commands him. Solipsistically, he misapplies this view to all the congregation, and succeeds to such an extent that “[e]ach member of the congregation, the most innocent girl, and the man of hardened breast, felt as if the preacher had crept upon them, behind his awful veil, and discovered their hoarded iniquity of deed or thought” (40). Hooper’s inclination to solipsism or self-incarceration clearly proves that Hooper is not a genuine Existentialist. We will be able to reinforce this hypothesis when we attend an affinity between Hawthorne’s use of the veil and Melville’s use of the mask, and compare the opacifying effects of the veil and mask. Hooper’s veil, together with his incomprehensible identity, reminds us of two entities: the monstrous whale Moby Dick, the entity compared to an opaque mask, and its archenemy, Captain Ahab. Ahab exclaims, “If man will strike, strike through the mask! How can the prisoner reach outside except by thrusting through the wall?” (164) The wall/mask [/veil] figuratively represents a monstrous white whale, an entity of something mysterious, ambiguous, threatening, and impedimental to Ahab’s efforts to perceive, understand, reason, and define as such, an entity worthy of attack, an entity Ahab is justified in attacking. If one stands in front of this wall, deprived of the opportunity to see what exists on the other side of the wall, one will feel defeated and incarcerated. One fails to see the more realistic possibility that the wall is built by oneself... the mask worn by the mysterious other is not the other’s, but his own. Because of the wall (of one’s own (un)conscious making), one feels it impossible to *stand outside* (of one’s own wall/cage/self/ (sham-)essence) and fails to satisfy the condition of the Existentialist. The etymological significance of “Exist” is to “stand outside.” Ahab and Hooper both find themselves in this situation. Hence, the two turn out to be bogus Existentialists, caged in walls/veils/masks of their own making.

By trying to live out his own subjective life and keep himself from others for that very purpose, Hooper may be praiseworthy as a champion of trailblazing Existentialism, yet Hooper simply generalizes and erases the concrete particularities of his own life. With his face hidden, he reduces himself to the level of a faceless/anonymous mob. Furthermore, the minister’s solipsism drives him to

project his own Puritan-minded ... illusory if you like ... worldview onto his parishioners, to unnecessarily darken and mar their everyday life (including the merry mood of the wedding), to ignore the differences among individuals, to make the sweeping criticism that everyone, without exception, is a sinner, and to convince every member of his congregation of the universal prevalence of evil. Hence, in Hawthorne's words, Hooper commits an (un)pardonable sin. Even at his deathbed, Hooper repeats the mantra-like jargon and blames the villagers for committing the very same crimes he himself has probably committed: "I look around me, and, lo! on every visage a Black Veil!" (52) Hence comes the fallacy of *petitio principii*, or *begging the question*. This fallacy is the identity imposition on others. The fallacy is further exemplified by Hooper's own words in his conversation with Elizabeth. In answer to Elizabeth's query, "then tell me why you put it on," Hooper curtly replies, "if I cover it [my face] for secret sin, what mortal might not do the same?" (46) As to the different modes of Existence that the other people could adopt, he takes nothing of it into consideration, stops thinking of it anymore, and, probably unawares but nevertheless not innocently, manifests a mindset similar to the totalitarian/imperialist, the mindset that sends all the Jews/sinners into the concentration camp, or into the hell that Jonathan Edwards, the leader of the Great Awakening, Hooper's contemporary, would assume. Hooper reduces every member of the congregation to a sinner, or to put it differently, to the invariable essence. Existentialist though he might appear, he is exposed to critical eyes, even to those of the Existentialists, for his reductive way, for the deductive reasoning with which he looks upon the world and others, for a mode of perception based on essentialism, the critical target of both the Existentialists and Postcolonialists. Incidentally, Existentialism became widely acclaimed in the 1950s, 60s, and even 70s for its serious reflections on the totalitarianism and imperialism that led to World War II and the Vietnam War. In their pursuit of liberation from the identity-imposing Euro-American-centricity, Postcolonialists such as Frantz Fanon, Edward W. Said, and Homi K. Bhabha grabbed the attention of American academia in the late 1970s after America passed through the Civil Rights Movement of the roaring 1960s and the critical peak of the Cold War during the Vietnam War. Since the late 70s, criticism against Hawthorne has become more and more prominent.

The above-mentioned fatal arrogance and self-alienation seem to appear in

the strange smile that flickers on Hooper's veiled face. Although his parishioners almost unanimously regard him as abnormal and think that they, not Hooper, are on the right track, Hooper acts the same. Both/Either Hooper and/or the parishioners might be on the right/wrong track. Yet Hooper thinks that no one but he is qualified to detect the *truth*, if you like, and that only he can pronounce judgment on goodness and badness. While Colacurcio argues that Hooper has outgrown Goodman Brown, the protagonist of Hawthorne's previous fiction, Hooper proves himself to be ungenerous, uncooperative, and immature in this process of excluding the opinions of others. At the critical moments when others hound Hooper to explain the veil, he feels himself misunderstood and distanced and only lets them see "[a] sad smile gleam[ing] faintly from beneath the black veil" (41). Speaking of the smile, Thomas F. Walsh presumes that Hooper shows a smile for his faint hope of keeping liaison with others as well as for his lingering belief in salvation by God. This presumption does not seem to readily explain Hooper's. Henri-Louis Bergson, a thinker known for his philosophy of life, explains the functions of laughter as follows. Joining the laughter that explodes in accordance with group dynamics, the laughter that breaks from a mass of people signifies mutual consent, or even complicity (in, for example, an uprising). This kind of smile/laughter recalls Robin in "My Kinsman, Major Molineux," the young innocent who unwittingly laughs and jeers with the mob who are lynching his uncle Molineux for being loyal to England. To Robin, this is meant to be his initiation into the adult world. Hooper's sad faint smile is quite the opposite from Robin's laughter. Hooper's smile alienates him from others while Robin's laughter connects with others.

What estranges Hooper from others (community members) and further degrades his monomaniac solipsism are not just his arrogance and isolation, but also his problematical posture in thinking how he should negotiate with others. Judith P. Saunders cites the theory of social psychology to explain unnecessary suspicion harbored by the parishioners and the minister's resultant separation from them. The theory holds that humans, in their competition for resources, status, and mates, are prone to protect themselves from possible enemies or biased realities of their own making. The bias in question, namely, that others may wish them harm, escalates in proportion to their uncertainty about the feelings and intentions that others, as possible enemies, may hide. As Saunders postu-

lates, “[w]earing a veil over his face, Hooper is bound to generate a high degree of uncertainty . . . , thus activating this bias” in the congregation (424). Hence, the information/communication gap is widened far more. Hooper makes no effort whatsoever to bridge this gap, because, as N. S. Boone criticizes, Hooper ignores the essential nature of dialogue between the subject [himself] and the other(s) [the congregation], the give-and-take reciprocity. “[Hooper] lacks the ability to take from others the council, the comfort, and the love they can give” (Boone 170).

Hooper in the subject position indeed appears to have performed the responsibility for the other(s) as a substitute sinner so that he may be true to his profession. Generally speaking, this is the kind of ethical duty that Emmanuel Lévinas, the currently well-recognized ethicist, demands that the subject do for the sake of the other (or others). Hooper, however, does not live up to the Lévinas’ expectation. In the mind of Lévinas, the subject faces the others who lay bare their vulnerable (veil-less) faces. Since they reveal their vulnerable faces [/bodies/emotions] in calling for a reply from you, Lévinas demands that you respond to their call in order to activate communication with them. In approaching your neighbors/others and replying to their call, you are expected to fully expose yourself to them, to vulnerably lie at their feet and “uncover [your veil] beyond nudity” with “your skin laid bare” (49), because they would do or already have done the same for you.

Boone, however, points out a need to slightly revise Lévinas’ unwritten assumption that it is ‘the subject I’ rather than ‘the other(s)’ who can behave like a responsible agent: you can behave as the subject from your own or Cartesian [I-think-therefore-I-am] perspective, but if you reverse your view, you instantly realize that you are regarded not as a subject but as (one of) the other(s) by the people around you. Boone’s indication is appropriate. In the interest of give-and-take sociability, Hooper should concede his subject position to his parishioners as the case may be. Then, it follows that as one of the others Hooper does not humbly call out or respond to the people around him. With his decisive will, he declines bending an ear to any one of them. Nor does he expose his unveiled face to them. If allowed to extend the Lévinas’ ethics in a distorted way, it follows as a matter of course that Hooper should appear unqualified for the ideal “other” and unworthy of being answered in the eyes of his parishioners.

Here, let the problem . . . the problem of “who can be an ideal other? No one can” . . . pass for the moment.

As the minister in the subject position, Hooper ignores any call from the others or his parishioners, and declines to accept any proposals from them. He refuses to allow them any part of duty, the duty (they are obliged and willing) to take in consideration for their other(s) (Hooper included). A Feminist or Postcolonialist-minded critic would see him depriving his supposed “inferiors,” if you like, of their right to articulate themselves. From Hawthornian ethics, it follows that Hooper commits a(n) (un)pardonable sin. This pattern has been repeated in Hawthorne’s other works, for example, in the relation between Fanshawe and Ellen in his first work of fiction, *Fanshawe*, and the relation between Miriam and Donatello in his penultimate fiction, *The Marble Faun*.

#### IV. Allegory out of Order

Let us reconsider some other possible causes for the difficulty the parishioners feel in communicating with the Reverend Hooper. Their inability to correctly interpret the message the minister tries to send through the veil reflects Hooper’s inability to understand the limit or self-undermining nature of allegory. According to the traditional definition of the literary genre, abstract moral concepts like love and evil leave the form of characters visually and impressively appreciated. “The Minister’s Black Veil” is subtitled “A Parable,” that is, as a short allegorical story. Allegories are often categorized as religious writings akin to works such as the late 15th-century English morality play *Everyone*, Edmund Spenser’s *The Faerie Queene*, or John Bunyan’s *The Pilgrim’s Progress* (the latter two of which Hawthorne avidly read). If “The Minister’s Black Veil” entirely conforms to the rule of the allegory, or to be exact, to the rule of “parable” in Hawthorne’s terminology, Gilbert P. Voigt is not, we should admit, a long way off the mark. In his critique of “The Minister’s Black Veil,” Voigt contends as follows. Recall the “rich old Hebrew” whom Hawthorne referred to in his works. Recall those Hebrew prophets in the Old Testament, such as Jeremiah, Ezekiel, and Hosea, all of whom occasionally take symbolic action for oracle delivery. Then, you may justifiably surmise that the intention of the Rev. Hooper’s apparently nonsensical action of wearing a black veil over his face is to give a jolt to the insensitive sinner-like Milford parishioners and make them ready to convert

and repent. Hooper's use of veil and his recourse to allegorical persuasion is obvious enough. The minister knows that as "the most patriarchal of poetic modes," "[a]llegory inherently affirms (and, in effect, enacts) the hierarchy of meaning in the Law of the Father" (Williams 81).

As a newly awakened man during the years of the Great Awakening, Hooper, it appears, professes to be one of the "visible saints," one of those who God promises to save but who first must narrate their experience of conversion before the congregation. He does not explicitly recount this, however. Instead, he tries to prove his visible sanctity with the black veil, the crape, a literal substitute for recounting. To the minister, the veil stands out for speechless speeches and functions like a symbol/letter/language, as does Hester's scarlet "A." In other words, Hooper's black veil corresponds to Hester's scrap of red cloth shaped into the letter "A." To be daring, we can group the following three elements together, as one of a kind: Hooper's veil, the parable/allegory, and the Word of God. Here we should make some quick references, however, to the etiological fact: 1) "Allegory" comes from the Greek word *allegoria*; 2) *Allegoria*, composed of the segments *allos* (other) and *agoreuein* (to speak), means figurative or veiled languages; and 3) the implication of speaking about something other than itself opens the way for Paul de Man to deconstruct the allegory proper, and this paper will follow how de Man deconstructs it. From its very beginning, the allegory involves the moment of its own deconstruction (to be explained in the next paragraph), and thus Voigt's literal interpretation is to be de-constructed. Voigt fails to allow for the possibility of a deconstructible allegory, and Hooper is only half aware of it himself. Indeed, the allegory is a mode of some particular story narrated in a specific way in which the object referred to justifiably means some other object. As much as what is referred to falls within the controllable boundary of what is intended, allegory works effectively, and the canonical (traditional) works of allegory fall within this boundary. But as we find in "The Minister's Black Veil," allegory deconstructs itself once it goes amok in its process of what Derrida calls "*Dissémination*."

Facing the impossibility of precisely articulating what one needs to articulate, one cannot but accept every slight distortion of one's message. This phenomenon is described as "*Différance*," the jargon coined by Derrida from "Difference." This distorted message is transmitted to a number of receivers

through their biases, and the distortion is amplified in the process [called *Dissémination*]. The amplification continues on and on, at least, to a certain extent, insofar as the patterns of the parishioners' unsophisticated/clichéd/kitsched reactions can supply distorted meanings and reinforce "*Dissémination*."

When taking these sorts of peculiarities exhibited by "*Différance* / (veiled) languages / letters / figures," one should recall that the veil functions doubly, on the one hand helping Hooper suggest to his parishioners both their secret sins and his own, and on the other helping him misuse the veil to hide from sight what is inconvenient to him. From the former function of the veil, we can infer that Hooper gets stuck to the allegorical import [i.e., the total depravity] of the veil. Yet from the latter stems a doubt that Hooper may be calculatingly expediting the phenomenon of "*Différance*" in order to cover what is vitally critical [what is exactly signified] with inexact messages/interpretations [inappropriate signifiers countless cropping-up among the flock]. Hooper purposefully lets the people speak ill of him behind his back, for his masochistic pleasure. Contrary to Hester in *The Scarlet Letter*, the heroic woman who produces the phenomenon of "*Différance*" in a positive sense, transforming the letter A of Adultery to that of Able or Angel, Hooper produces "*Différance*" in a negative sense. In both positive and negative senses, neither the (scarlet) letter nor the black (letter-substituting) veil could express what is inside to the outside. Hooper is afraid of directly facing his unveiled self and accepting his own negative phase/face. He avoids his own image in the mirror. His parishioners witness that "he never willingly passed before a mirror, nor stooped to drink at a still fountain, lest, in its peaceful bosom, he should be affrighted by himself."

Hooper's involvement in or exploitation of "*Différance*," however, produces side effects that go far beyond what he expects in advance (though they are within the expectations of third parties, including the author and readers of the day). A "scandal" spreads throughout Milford village. When the villagers witness Hooper shunning mirror(-like objects), they feel justified in trusting as plausible their groundless whispers that "Mr. Hooper's conscience tortured him for some great crime too horrible to be entirely concealed" (38). What is absent or erased from the eyes of the parishioners is the initial cause that compelled him to don the veil. This absence/erasure is reflected by countless signifiers, signifiers that show up in the various ways people behave. Hooper makes the ab-

solite cause disappear, forces his parishioners to stay only in a frivolous realm where he shows them only the vestige of the *signified*, lets “[t]he vulgar interpret the meaning vulgarly, the complacent complacently, and man of good will regretfully.” Thus, if “[t]he allegorist personifies the speaking subject as totalitarian overlord of language who directs and manipulates his world according to a priori thoughts” (Williams 81-82), then Hooper fails to do so. And Hawthorne, eager to gain the status of a national icon as a canonical writer, masochistically depicted himself in the image of Hooper.

### V. Hawthorne’s Self-Portrait as the Veiled Minister

According to the deconstructionists, among whom Jacques Derrida and Paul de Man are most famous, text is made up of figures or “signifier[s]/language/letter[s]/sign[s]/symbol[s]” that eternally fail to represent the “signified.” The relation between the “signified” and the “signifier(s)” is not given naturally, but rather arbitrarily. The arrangement of the signified to the signifier(s) has been made into text, more often than not, in the unconscious political dimensions or through what the Semiologists would call “codes.” The codes in question are “interpretive frameworks [... or what Michel Foucault calls *épistème* (metaknowledge) in his *The Order of Things*] which are used by both producers and interpreters of texts”; “In creating texts we select and combine signs in relation to the codes with which we are familiar ‘in order to limit... the range of possible meanings they are likely to generate when read by others’ (Turner 17).” In short, codes are fixers or deciders of meaning.

Though code does not appear as invulnerable to the Deconstructionist as it does to the Semiologist, and though meanings of any text may become less fixated and more ambiguous in the former’s opinion, Hawthorne may have been disinclined to unconditionally accept the Deconstructionist’s idea so straightforwardly as to leave the socio-historical code as unserviceable any longer. What if the socio-historical code partly and roughly corresponds to the concept of what Ludwig Wittgenstein calls Language Game? In this game theory, it follows that any rule change will affect the game; due to its foundation on the Language Game, society or human bond will also be affected by any change of a rule; and conversely, any materialization of a new game/society will change the old rule/society. Hawthorne may have noticed these phenomena.

Significantly, he did not forget to socio-historically enframe/arrange “The Minister’s Black Veil” or prepare for the condition of the erstwhile language game to be changed and replaced by the new.

In previous chapters we have already seen that Hooper can(not) be praised for his existential awareness of life, and that introducing existential aspects is not off topic when we observe Hawthorne’s seemingly nonchalant emphasis of socio-historical background of the story. In considering this story in the light of nineteenth-century Existentialism, Kierkegaard, a contemporary of Hawthorne’s, is noteworthy. As Santangelo mentions (62-63), though Hawthorne might not have read Kierkegaard, “they reacted to similar environments: a Calvinism [in America] or Lutheranism [in Denmark] that had lost meaning in a changing universe” ... “a religion that faced the strong possibility of extinction in Arminian doctrines of accommodation.” At this stage both in America and in Denmark, and for that matter in other protestant European societies as well, Arminianism began to gain in influence. Absorbing Germanic idealism and Pelagianism, belief systems that stressed the freedom of human will, Arminianism diluted the notion of predestination espoused by Calvinism, and consequently weakened Calvinism. Yuki Kodaira indicates Hawthorne’s ambiguous attitude toward Arminianism and Calvinism. The point is, Hawthorne placed the story at the historically critical moment when the outdated *Language Game* (dogmatic Puritanism) was replaced by the new (liberalized or secularized Christianity) ... or when the transformation of Foucauldian *épistème* occurred.<sup>8</sup> Interestingly, when an earlier social system, patriarchy for example, becomes “weaker and internally contradictory,” “the ideological force,” which supports it, “strengthens” (Sedgwick 81-82). Then, it is no surprising that immediately before losing its momentum, the dogmatic Puritanism represented by Hooper makes a brief comeback. Seeing that the story unfurls at this historically, socially, religiously, and philosophically critical moment, we are prepared to set out to resolve our initial problem of how Hawthorne managed to maintain or shorten the distance between himself and his readers. But before setting it out, let us review what we have analyzed so far to double check our hypothesis that Hawthorne is closely relevant to Hooper.

Our analyses clearly shows that, in spite of the antinomic features of the enigmatic black veil (i.e., concealing and revealing at the same time), Hooper

symbolically substitutes the veil both for his own sins and the putative sins of his whole congregation. Yet Hooper's performance mystifies the congregation. It even provokes quite a few of them, including school children, to react rudely to him. Whenever Hooper acknowledges that his message about the veil is distorted by his parishioners, *a sad faint smile* shows up. This smile arises due to either his resignation of being accepted or his arrogance that no one but he can recognize the allegorical import of the veil, and by extension, the Word of God. The assumed fact that "the Word of God" is transcribed in the form of Hooper's veil, could signify that the Word is speciously represented by the veil, the interpretation of which ... to use the Deconstructionists' jargon ... is inaccurately supplemented by each who sees it. Because (seemingly) countless interpretations about the veil are possible, it stands to reason that neither the veil of the minister nor the Word of God could be correctly appreciated. Worse, bringing up solipsism, Hooper's failure to achieve communion worsens this deconstructive situation. By letting Hooper fail to perform the "Engagement" with society ... this is what Sartre demands us to do ... the solipsistic wall [/veil] disables him from either standing outside of the solipsistic wall [/veil] or observing himself from outside the veil [/wall]. Hooper is thus left disqualified as an Existential hero even though he meets the initial condition as an Existentialist, namely, keen awareness of life, death, and individuality, or what can be described, in Heidegger's terminology, a *Dasein* [the current existence," in English].

To make himself or the purpose of his veil understood, Hooper forcibly imposes on every member of the congregation exactly the same identity ... the sinner. He disallows the other(s) the right of self-articulation and holds them en masse with recourse to the Puritan concept of total depravity. The forceful identity-imposition would be helpful to the imperialist-minded, like Hooper, in colonizing the others. His consciousness of the self under the aspect of pervasive sin helps him behave in a paranoid but arrogant way, and this brings him to a totalitarian and imperialistic mindset. This identity-imposing mentality depends on an exact one-to-one correspondence between the signifying [identity labelling] and the signified [the thing labeled], and conforms to the principle of allegory. From the beginning, however, the allegory deconstructs itself from within as de Man explicates. Hooper, meanwhile, gets stuck to the allegory-activating mentality that leads him to the critical brink of becoming a totalitarian and imperialist in

whose mind the particularities of the other should be a controllable object, reducible to the “I,” “my thoughts,” “my possessions,” and “products of my knowledge” (Davis 4).

Here, let us turn to the harsh criticism that Hawthorne, like Hooper, submits to blame for his ambiguities. Hawthorne has been criticized for his ambiguous political stance toward both American imperialism and the problem of abolition. Hawthorne’s posture still remained latent in 1836, when he wrote “The Minister’s Black Veil,” but it surfaced in a rather ugly and prominent way during the antebellum period. Over that period, he dedicated his energies to the preparation of *The Scarlet Letter*, the work that elevated him to literary stardom. He lost his sinecure, however, in 1849, due in part to the change of government, but mainly to the hate campaign led by Charles Upham. Hawthorne became the focus of public attention as a victim of this scandal, and earned displeasure from the local people on account of the sardonic and yet unvarnished depiction of his ex-coworkers in “The Custom-House” of *The Scarlet Letter*. During this period he supported Franklin Pierce, the presidential candidate for the Democratic Party in 1852. Later, as president, Pierce audaciously unfurled a reactionary pro-slavery policy [e.g., the Kansas-Nebraska Act and the Ostend Manifesto] in New England, an area imbued with the mood of abolitionism. Hawthorne’s support for, or undisclosed expectation of nepotism from, Pierce, one of his friends from his days at Bowdoin College, festered Hawthorne’s literary reputation (Pierce is now ranked among the three or four worst US presidents ever). Much later, in the 1980s and 90’s, it spurred and fed harsh criticism from Postcolonialists, Feminists, and other revisionist political critics, such as Jonathan Arac, Sacvan Bercovitch, and John Carlos Rowe. It follows that at the time, when Hawthorne was still an unknown writer in apprenticeship, he had already foreseen himself in the image of Hooper, the reactionary Calvinistic minister, the notorious object of finger-pointing in his community, and rendered his self-portrait in a caricatured way more than a decade ahead of the times. If so, he anticipated in Hooper the image of his self-parody in which he would stand in the breach of politically-minded critics about a half century ahead of the times. Hawthorne was aware that when the Language Game changes, the way they see the players (Hooper and Hawthorne), changes, and that yesterday’s heroes become today’s anti-heroes.

Here, when we conjoin Hawthorne with Hooper, we realize that both stand in a critical time when a transformation of *épistème* is just about to happen: first, in the first half and middle of the eighteenth century, when the severity of patriarchal Puritanism represented by Hooper began to look obsolete amidst the secularization and feminization (to use the term of Ann Douglas) of religion in American society, and when Hooper befuddles the parishioners with his anachronistic and therefore unintelligible conduct, or threatens them with the face-covering black veil; and second, in the antebellum period, when the severe turmoil over slavery in America struck Hawthorne with a chance blow, and when Hawthorne, the previously reclusive and therefore innocuous novelist who wrote *The Scarlet Letter*, was drawn violently out into the open as a man of letters in disgrace, (un)like Hester, the heroic woman with the letter A on her bosom. (Making a nuisance of himself, he managed to virtually oust himself from a misunderstanding public, just as Hooper estranges himself from his parishioners); and third, in the postmodern era starting about from the 1970s, when the Existentialist's idea of free will and moral indivisualism lost its momentum, and when newly empowered postmodernistic thinkers, politically minded Feminists, and Postcolonialists were likely to be censorious of Hawthorne's political stance and to conversely weaken the previously predominant literary critics who had helped Hawthorne establish canonical status.

### Conclusion

Hooper's behavior suggests that he is half aware of his own tragic phenomena: the impossibility of allegorically representing the w/Word(s) (of God), the entrapment in the erroneous system that overemphasizes God, the Word, the Origin, and the Cause (of sin). In a sense, Hawthorne predicted, exemplified, and was satirically resigned to Derrida's contention that it is illusory to expect to entirely elucidate one's own condition/will with the w/(W)ord. By extension, this also implies that the idea of human free will—stressed by Pelagianism, Arminianism, and Existentialism—was a mere illusion to the deconstruction-minded Hawthorne. Recall here that Jesus sows the Word of God[/the ultimate signifier (telos)] by using parables[/allegories or veiled languages] as integral instruments. Jesus' parables and Hooper's parabolic veil, the instruments Jesus and Hooper repeatedly use in their attempts to enlighten their followers, are

sometimes ill received. If Hawthorne had objectively positioned himself in the place of the reader and observed himself and Hooper inescapably caged in the absurdity of the w / (W)ord, he would have concurred in advance with the remarks of Hillis J. Miller, another Deconstructionist: “Have I not . . . through an ineluctable compulsion, unavoidably used as the ‘tool’ of reading the very thing I have most wanted to put into question, just that ideology of apocalypse with its associated figure of the veil and prosopopeia?” (123). Hawthorne thus had to consign himself to the fate not only of being misunderstood and isolated (sharing the fate of Miller and Hooper in their own ways), but also of being lost in the realm of *écriture* [writing in English] despite and because of his position as a professional writer. In the deconstructive situation where allegory is impossible to maintain itself, Hawthorne paradoxically allegorized himself into the image of Hooper. Recall that the dialogical (though malfunctioning) structure composed of the two contrasting parties, the minister versus the parishioners who misunderstand him, reappears in two similar but slightly different forms. In one form, Hawthorne ran afoul of his contemporaries, who (un)duly charged him; in the other, Hawthorne pitted himself against his still unknown future readers, readers who were to be (un)justifiably censorious of him. In placing himself in parallel with Hooper, we could hear the echo of Hawthorne’s wail from the veil/wail of the Reverend Hooper,<sup>9</sup> the wail that sounds self-cursing but is probably, like Hooper’s soundless wail, masochistic. Hawthorne’s wail perhaps went on to trigger a resonance in Melville. Melville showed his admiration to Hawthorne by echoing Hawthorne’s wail in the form of the whale book and dedicating to Hawthorne the book about the wail/whale [Moby Dick], and found himself wailing or, more properly, ranting and raving as his own father did on his deathbed or as Pierre does against his mother’s injunction to “Never rave, Pierre; and never rant. Your father [who in reality, ranted for his illicit daughter] never did either” (19).

Hawthorne wailed all the more because he was probably aware of the following ironical fact: pragmatically speaking, faithfully practicing Lévinas’ ethics, i.e., removing the veil and laying bare his face toward others for the communion establishment, was next to impossible, too naïve even for an allegedly naïve person like Hawthorne to accept, inasmuch as he engaged himself to the deceptive society (capitalistic market), where he had to make his work somewhat kitschy in

consideration of its readability, intelligibility, and marketability to the eyes of the multitudes. There is no innocent adult who does not disguise himself with a veil, and Hawthorne, as one of those whose foothold was in the literary realm, must have been pressured to admit the dividing line between ethics and literature. He was not simply wailing or veiling. Nor did he impose on his readers the exact Lévinas ethic, the moral imperative to “come-face-to-face with-others.” Rather, he was hoodwinking a feckless readership. To whom did this posturing of Hawthorne’s appear to be homologous to that of his own? To Melville. In his “Hawthorne and His Mosses” (1850), Melville pronounced in favor of Hawthorne: It is “Lear the frantic King [who] tears the mask, and speaks the sane madness of vital truth,” “to utter, or even hint of” things which that were “all but madness for any good man, in his own proper character” (407). In a letter to Evert Duyknick dated Dec. 14, 1849, Melville lamented, “What a madness & anguish it is that an author can never — under no conceivable circumstances — be at all frank with his readers” (149).

Seeing that the ideology or Lévinasian ethical imperative to remove the veil is not down-to-earth, but rather—as shown by the depiction of the parishioners’ rude reaction towards the minister—inconsiderate, insulting, and subjectivity-denying against the veiled, Hawthorne did not conform to the ideology of unveiling. As a precursor to Existentialism, the author let the minister rather willingly submit to the unavoidable fate of absurdity in which tragedy becomes a farce.

At a time of waning of a previously authoritative discourse like Puritan theology, a kind of master discourse that helps one establish one’s subject position, one is prone to justify and confirm one’s subject position by carrying out the new moral — not the old theological — imperative in practical parts of life. Theoretically, the imperative is practicable and should be practiced. Hence one sees this new imperative become all the more prerogative with the appearance of thinkers like Immanuel Kant and Emmanuel Lévinas. One is then likely to think, warns the postmodernist Jean-François Lyotard, that with this (theoretically) easy-to-do task, one dwarfs and resolves the problem of one’s ambiguous subject position. In the vein of Lyotard, Hawthorne did not believe that the moral imperative to unveil was a panacea. Hawthorne might have concurred with Miller’s deconstructive comment: “the ideology of unveiling must be unveiled” (89). He did not remove the veils from Hooper or from himself so that, in his

deconstructible allegory, he might invoke his readers' generosity, or "sympathy" to use the rather hackneyed term from the nineteenth century onward in the critique of Hawthorne, in accepting the otherness/difference of the other (i.e., Hawthorne's otherwise ambiguous nature) as it was, even if the other being was veiled. "Sympathy" should not be confused, it has to be quickly added, with "[s]entimental discourse[that] tends to function through the recognition of internal homogeneity: if people appear different, sentimentalism tells us, those differences mask a common humanity" (Silverman 347). In a Hawthornian sense, sympathy is not a kind of decent bargain between you and I, both eager to have the sympathy of / be sympathetic with the other. Hawthorne, indeed, was not so inconsiderate of the demands of the literary market, the salability of the book, as to neglect to saturate this already cliché-filled story. It is ironic and curious, however, that, Hawthorne fatally wounded Melville, the man who probably understood him better than anyone else. Melville was anxious to "come face to face with" Hawthorne; he waited for a sympathetic response from Hawthorne that never was to come. Regrettably, a full discussion of this problem would go beyond the scope of this paper.

In his works, "The Minister's Black Veil" included, Hawthorne revealed the absurdity of veiling and simultaneously exposed "the ideology of unveiling," both futile and violent. Therefore, he declared in "Mosses from an Old Manse," "So far as I am a man of really individual attributes, I veil my face" (X: 32). Aware of the deconstructible and therefore vulnerable nature of allegory, Hawthorne paradoxically allegorized his own nature of veiled otherness in his cliché-filled artifact to please and deceive feckless readers in the capitalist market society (hence, in a genuine sense, "The Minister's Black Veil" is not necessarily a work of art per se, but rather a desacralized parable) and represented it through the Reverend Hooper.

#### Notes

1. Niwa Takaaki's *Self-Portraits of Fear* gave me a crucial hint for my research.
2. If one is requested to help the other remove the veil/mask so that the other's identity can be made known, then one's veil/mask-removing conduct is justifiable, as is Pierre's conduct toward his putative half-sister Isabel. On the contrary, if the other puts on the veil for the sake of his or her privacy, then those who intrude

into the sacred realm over the wall would commit, in Hawthorne's terminology, an unpardonable sin, just as Chillingworth does in his disrobing the minister Dimmesdale and metaphorically committing homosexual rape on him for the decisive proof of the latter's adultery with the former's erstwhile wife. In this paper, I limit the discussion to the problem attributable to the person ["the Reverend Mr. Hooper"] who puts on the veil by his own will.

3. All subsequent references to this story will be parenthetically included in this paper.
4. Anthropocentrism in this context refers not to the attitude postmodernists are likely to criticize.
5. Similarly but conversely, Boone states as follows: "The irony of the veil, though, is that although its function is concealment of sin, it actually, in the minister's case, functions to expose sin" (167).
6. Interestingly, Arthur Dimmesdale, the hypocritical minister in *The Scarlet Letter*, arguably has the letter A of Adultery "carved on fleshly tables of the heart" in a manner paradoxically true to the biblical description.
7. Citing the psychological theory of R. D. Laing, Michael Paul Rogin indicates that, in "protect[ing] the inner self from vulnerability," "[p]etrification is one failed alternative to maturity . . . and masquerade is another" (230).
8. In this respect, Hawthorne would not have endorsed, it seems, Myra Jehlen's typological interpretation of American history: "In the familiar refrain, Americans would have 'no sense of history,' precisely because they had already done with history at the beginning" (197).
9. You might say that the Reverend Hooper's wail is an echo of the Lamentations of Jeremiah.

#### Works Cited

- Arac, Jonathon. "The Politics of *The Scarlet Letter*." In *Ideology and Classic American Literature*, edited by Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen, 247-66. New York: Cambridge UP, 1986.
- Benoit, Raymond. "Hawthorne's Psychology of Death: 'The Minister's Black Veil.'" *Studies in Short Fiction* 8 (1971): 553-60.
- Bergson, Henri. *Laughter: An essay on the Meaning of the Comic*. Mineola, NY: Dover Publications, 2005.
- Bercovitch, Sacvan. *The Office of The Scarlet Letter*. Baltimore: Johns Hopkins UP: 1991.
- Boone, N. S. "'The Minister's Black Veil' and Hawthorne's Ethical Refusal of Reciprocity: A Levinasian Parable." *Renascence: Essays on Values in Literature*. 57. 3

The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion

(2005), 165-76.

- Camus, Albert. *The Myth of Sisyphus and Other Essays*. Trans. Justin O'Brien. New York: Vintage Books, 1991.
- Carreira, Jeff. "Substance, Utility, Existence: Heidegger's Modes of Being." *Philosophy Is Not a Luxury* (August 25, 2011). Internet. 25 March 2013.
- Coale, Samuel. "Hawthorne's Black Veil: From Image to Icon." *CEA Critic: An Official Journal of the College English Association* 55. 3 (1993): 79-87.
- Colacurcio, Michael J. *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*. Harvard UP, 1984.
- Crews, Frederick. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. 1966. rpt. Berkeley: U of California P, 1989.
- Davis, Clark. "Facing the Veil: Hawthorne, Hooper, and Ethics." *Arizona Quarterly* 55, (1999): 1-19.
- de Man, Paul. *Yomukoto no Allegory: Rousseau, Nietzsche, Rilke, Proust ni okeru*. Trans. Tomonori Tsuchida. Tokyo: Iwanami, 2012.
- Derrida, Jacques. *Grammatology ni tuite: Kongen no Kanata ni*. 2 Vols. Trans. Adachi Kazuhiro. Tokyo: Gendai Shichou Sha, 1990.
- Fogle, Richard H. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. Norman: U of Oklahoma P, 1952.
- Foucault, Michel. *The Archaeology of Knowledge*. Trans. Alan Sheridan. New York: Pantheon Books, 1972.
- . *The Order of Things; An Archaeology of the Human Sciences*. New York: Vintage Books, 1973.
- . *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Trans. Alan Sheridan. New York: Vintage Books, 1995.
- Hagiwara, Tsutomu. *Nathaniel Hawthorne Kenkyu: Shinwa no Shoso, Shoshi*. Tokyo: Oshi-sha, 1981.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. Columbus: Ohio State UP, 1983. Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Twice-Told Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. IX of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Mosses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Passages from the American Note-Books of Nathaniel Hawthorne*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. XIII of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- Jehlen, Myra. *American Incarnation: The Individual, the Nation, and the Continent*. Cambridge: Harvard UP, 1986.

- Kodaira, Yuki. "The reverend Mr. Hooper's two Folds of Crape: the Theological Ambiguity in Hawthorne." *Tsurumi Eigo Eibei Bungaku Kenkyu* 12 (2011), 59-75.
- Lévinas, Emmanuel. *Otherwise than Being. Or Beyond Essence*. Trans. Alphonso Lingis. Boston: M. Nijhoff, 1981.
- Lyotard, Jean-François. *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. Trans. Geoff Bennington and Brian Massumi. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984.
- Martin, Terence. "Review: *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*. by Michael J. Colacurcio." *Nineteenth-Century Fiction* 40.2 (1985): 231-36.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or, the Whale*. Evanston, Ill.: Northwestern UP; Chicago: The Newberry Library, 1988.
- . *Pierre or The Ambiguities*. Evanston, Ill.: Northwestern UP; Chicago: The Newberry Library, 1971.
- . *Correspondence*. Evanston, Ill.: Northwestern UP; Chicago: The Newberry Library, 1993.
- . "Hawthorne and His Mosses." *The Portable Melville*. Ed. Jay Leyda. New York: Penguin, 1952. 400-22.
- Milder, Robert. *Hawthorne's Habitations: A Literary Life*. New York: Oxford UP, 2013.
- Miller, J. Hillis. *Hawthorne & History: Defacing It*. Cambridge, Mass.: B. Blackwell, 1991.
- Millington, Richard H. *Practicing Romance: Narrative Form and Cultural Engagement in Hawthorne's Fiction*. Princeton: Princeton UP, 1992.
- Newman, Lea Bertani Vozar. "One-Hundred-and-Fifty Years of Looking at, into, through, behind, beyond, and around 'The Minister's Black Veil.'" *Nathaniel Hawthorne Review* 13.2 (1987): 5-12.
- Niwa, Takaaki. *Self-Portrait of Fear: Hawthorne and "the Unpardonable Sin" (Kyohu no Jigazo: Hawthorne to "Yurusarezaru Tsumi")*. Tokyo: Eicho-sha, 2000.
- Rowe, John Carlos. "Nathaniel Hawthorne and Transnationality." In Bell, *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*, 88-106. Columbus: Ohio State UP 1993.
- Rogin, Michael Paul. *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville*. New York: Knopf, 1983.
- Santangelo, G. A. "The Absurdity of 'The Ministe's Black Veil.'" *Pacific Coast Philology* 5 (1970): 61-66.
- Saunders, Judith P. "Hawthorne's theory of mind: An Evolutionary Psychological Approach to The Minister's Black Veil." *Style* 46. 3/4. 420-38.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Silverman, Gillian. "Textual Sentimentalism and Authorship in Melville's *Pierre*." *American Literature* 74.2 (2002), 345-72.

The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion

- Stein, William Bysshe. "The Parable of the Antichrist in 'The Minister's Black Veil.'" *American Literature* 27 (1955): 386-92.
- Stibitz, E. Earle. "Ironic Unity in Hawthorne's 'The Minister's Black Veil.'" *American Literature* 34.2 (1962), 182-90.
- Tsuchida, Tomonori. *Paul de Man: Gengo no Fukanosei, Rinri no Kanosei*. Tokyo: Iwanami Shoten, 2012.
- Turner, Graeme. *British Cultural Studies: An Introduction*. New York: Routledge, 1992.
- Voigt, Gilbert P. "The Meaning of 'The Minister's Black Veil.'" *College Literature* 13 (1952): 337-38.
- Walsh, Thomas F. "Hawthorne: Mr. Hooper's Affable Weakness," *Modern Language Notes* 74.5 (1959): 404-06.
- Williams, Anne. *Art of Darkness: a Poetics of Gothic*. Chicago: U of Chicago P, 1995.
- Wittgenstein, Ludwig. *Philosophische Untersuchungen = Philosophical Investigations / Ludwig Wittgenstein*. Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2009.

## **The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion: Hawthorne's "The Minister's Black Veil: A Parable"**

**SASAKI, Eitetsu**

In "Mosses from an Old Manse" (1846), Nathaniel Hawthorne (1804-64) paradoxically dropped off his mask to blurt, "So far as I am a man of really individual attributes I veil my face." In making sure of his hidden undissembled intention regarding the author-reader communion, this paper treats "The Minister's Black Veil" (1836), a short fiction written during Hawthorne's apprenticeship to become a professional writer.

"The Minister's Black Veil" depicts the unintelligible behavior of the Reverend Hooper, who wears a black veil. Critics are divided over the problem of whether Hooper merits praise or harsh criticism. Existentially aware of the meaning of life, or to use Heidegger's phraseology, *Dasein*, Hooper warns his parishioners, it seems, of how foolish it is to stay ignorant in plausibly blissful daily activities. If closely inspected, however, Hooper is far from being an Existentialist. He forcefully imposes the same identity as sinners on one and all parishioners, in the name of Puritanism and its dogmatic doctrine, the notion of total depravity. He shows unawares his totalitarian inclination toward essentialism—the sort of attitude that Existentialists denounce. Furthermore, he neglects to hold communion with his parishioners and even with God, and thus incarcerates himself in his own solipsistic realm. When we recall the author's above-mentioned confession of "I veil my face," we confront this question: How close is Hawthorne to Hooper the veiled minister?

The Deconstructionist Paul de Man points out that, because of its etiological definition of speaking about something other than itself, the deconstruction of the allegory is part of the allegory itself. From this perspective, we can understand that it is impossible for Hooper to allegorically represent the w/Word(s) (of God), the Origin, and the Cause (of sin) with the use of his

black veil, the proxy, symbol, letter, and or language with which he hopes to allegorically convince the congregation of the puritan notion of total depravity. Aware of how he appears to the eyes of his parishioners, Hooper stops associating with them. He is openly avoided and secretly ridiculed by men and women, young and old. In these adverse circumstances, the degree of their misapprehension over the reason for his veil deepens all the more. In a negative way, Hooper exemplifies the process of what the leading Deconstructionist Jacques Derrida calls “*différance*” and attests to Derrida’s insistence that allegory deconstructs itself.

More than a decade after publishing this story, Hawthorne became a canonical writer by dint of his masterpiece, *The Scarlet Letter* (1850). But around this time he also suffered severe hardships, most of which sprang from misunderstanding on the part of his contemporaries: he was expelled from the sinecure position at the custom house, targeted in a hate campaign by Charles Upham, and incurred the displeasure of locals through his sarcastic depiction of the locally employed officers at the custom house. Moreover, since the 1980s, Hawthorne’s support for Franklin Pierce, the notoriously pro-slavery politician who went on to win the presidency, has induced left-minded critics to undermine the writer’s literary reputation.

In his apprenticeship to become a professional writer, Hawthorne already depicted his future self in the image of Hooper. Portraying both Hooper’s liability to be a victim of misapprehension and his resigned acceptance of this fate, the author predicted the fate that was to befall him later in life and after his death. Hawthorne paradoxically allegorized his own nature of veiled otherness in the form of desacralized allegory/parable and represented it through the Reverend Hooper.

# *Jane Eyre* における ヒロインの願望と選択

吉 田 一 穂

## 序

1846年5月、ブロンテ (Brontë) 三人姉妹は、カラー (Currer), エリス (Ellis), アクトン (Acton) という男性名で共著の詩集を自費出版した。これは、一ヶ月にわずか二万部しか売れなかったが、これを機に三人とも小説を書き始めるようになり、翌1847年に三人の小説、すなわち、シャーロット (Charlotte) の *Jane Eyre*, エミリー (Emily) の *Wuthering Heights*, アン (Anne) の *Agnes Gray* が出版された。シャーロットの *Jane Eyre* は、リー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) のような大批評家に認められ、サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) からも激賞され、ベストセラーになった。

一方で出版当時は、作品はその底に存在するフェミニズム思想のため非難・攻撃された。作品のヒロイン、ジェイン・エアは、自身が何者であることを証明し、正当な社会階級と相続財産を取り戻さなければならない孤児であった。作品の中ヒロインは、意義ある仕事を求め、男性から尊敬心と対等な態度で処遇されることを求めている。*Jane Eyre* は、女性文学の古典として考えられている。それはヒロインが自身の願望によって人生の様々な局面で選択をし、自身の願望を実現するからであると言える。

シャーロットが作品において一貫して主張していることは、女性は抑圧的な環境を去るべきである、ということである。作品の中ジェインは、安定を

求めるならば、他者に選択を委ねることができるにもかかわらず、それをしない。全て自身の願望に基づいて選択をするがゆえに、彼女は自身が望む人生を得ることができたと言えるのだ。本論文では、作品におけるヒロインの願望と選択の相関関係と選択の意味について述べてみたい。

## 1. 冷遇から独立へ

マギー・バーグ (Maggie Berg) は、ヒロインについて「ジェインは教育を身につけ経済的に独立し、社会的地位を得る。努力と意志により彼女は人生を変える」と述べているが (Berg 1), *Jane Eyre* は、女性が忍耐強く自己を向上させる努力を続けることにより、金持ちで幸福になれる可能性があることを示している。

シャーロット・ブロンテがこのような物語を書いた背景として父親の存在を無視することはできない。シャーロットの父親パトリック・ブロンテ (Patrick Brontë, 1777-1861) は、典型的なセルフメイド・マンであり、アイルランドの農家の出ではあるが、自己修養によりケンブリッジで神学の学位を取得した。1811年に彼は、*The Cottage in the Wood; or, The Art of Becoming Rich and Happy* を出版した (Berg 2)。全てのものが神の目から見れば平等であるというキリスト教信仰のゆえに、ブロンテ師は、女性がよく受けるほんの飾りにすぎない教育、すなわち、読書、音楽、裁縫、絵を描くことよりもさらに知的な主題を重視し、娘とそういう主題について議論した (Berg 3)。このような父親の影響を受け、シャーロットは男性と知的な面で対等な女性を強く意識したに違いないが、*Jane Eyre* という作品を考える場合、ヒロインの生い立ちを無視することはできない。孤児という境遇もジェインの考え方に強く影響を与えているからである。

ジェインの父親は貧しい牧師補であったが金持ちの令嬢と恋におちいり、二人は周囲の人々の反対を押し切って結婚した。しかし、二人とも結婚後すぐにチフスにかかり亡くなり、娘であるジェインは後に残されたのであった。孤児であるジェインは、金持ちの母方の親戚、すなわち、ゲイツヘッド

(Gateshead) のリード (Reed) 夫人という義理の伯母の手で育てられることになった。ジェインはゲイツヘッドでひどい扱いを受ける。リード家の本を読んでいたジェインは、リード夫人の息子のジョンに「おまえには、うちの本を持ち出す権利なんかない。おまえは、お母さんも言っているけど居候なんだ。おまえはちっともお金を持っていないんだ。おまえの父親は、一文の金も残さなかったんだ。おまえなんか、乞食でもすればいいんで、ぼくたちのような紳士の子供と一緒にここに住んだり、ぼくたちと同じものを食べたり、お母さんにお金を出させて服を着たりする身分じゃないんだ」(10-11)と言われる。本を投げてきたジョンに対し、ジェインは「あなたは人殺しそっくりよ——奴隷の監督そっくりよ——ローマの皇帝そっくりよ」(11)と言うが、それを聞いたジョンは彼女に飛びかかってくる。逆にジョンに立ち向かっていったジェインは、二階の赤い部屋に閉じこめられる。孤児であるというだけで虐待されたジェインは、不公平であるという意識を強く持つが、自分の孤児であるという境遇をいかんともしがたく、*Gulliver's Travels* (1726) を読み、自身を恐ろしい危険な国々をさすらうこのうえなくわびしい放浪者にととえる。<sup>1</sup>

ジェインをロウウッド (Lowood) 学校に入れるべくリード夫人が手紙を送ったので、ある日学校の管理者 Brocklehurst (Brocklehurst) がゲイツヘッドにやって来る。聖書の話をした際、ジェインから詩篇はおもしろくないので嫌いだと聞いた Brocklehurst は、「それはあなたが悪い心を持っている証拠なのだ」(33)と言う。また彼は、「神さまに、心を変えていただくよう、新しいきれいな心をさずかるよう、あなたの石の心を除いて肉の心をさずかるようお祈りしなくてはならない」(33)とエゼキエル書第36章第26節を引き合いに出してジェインに心を改めるよう促す。それだけでなくリード夫人は、ジェインに人をあざむく癖があるので学校では警戒する必要があると Brocklehurst に言う。このように扱われることによりジェインはますます不平等を感じるようになり、他者が引き合いに出すキリスト教に懐疑的になる。ジェインのこの傾向は、彼女がロウウッド学校に入ってから変わら

ない。

ロウウッド学校は、子女のためのカウアン・ブリッジ (Cowan Bridge) 塾に通ったシャーロット自身の経験に基づいている。シャーロットは8歳のとき、エミリーと姉のマライア (Maria) とエリザベス (Elizabeth) とともにこの塾に入った。<sup>2</sup> *Jane Eyre* において見られるように、発疹チフスが学校で広がった。マライアとエリザベスは、発疹チフスにやられなかったにもかかわらず、肺結核で亡くなった (Shuttleworth xiii)。カウアン・ブリッジは谷間のじめじめとした不健康地にあり、給食は貧弱、教育ぶりは厳しく偏狭であった。<sup>3</sup> ロウウッド学校にはカウアン・ブリッジの特色が色濃く表れている。

ヘレン・バーズ (Helen Burns) は、水が凍っていてつめが洗えなかったのに、「汚い、いやらしい子だ！けさはつめをきれいにしなかったでしょう！」(53)とスキャチャード (Scatcherd) 先生に言われ、小枝の東で打たれる。「理由もないのに殴られたら、私たち、こっぴどく殴りかえしてやるべきよ」(57)と言うジェインにヘレンは、「大人になったらあなたが考えを変えることを望むわ」(57)と言い、「汝の敵を愛せよ」というマタイによる福音書第5章第44節からのキリストの言葉を引き合いに出し、キリストの言葉を手本として生きることを勧める。このように言ったヘレンは、肺病にかかって亡くなってしまう。「わたしが死んだら、あなたとまた会えるの？」(82)と聞くジェインに「あなたも、同じ力強い、すべてのものの父に迎えられるのよ」(82)と言って旅立つヘレンではあったが、チフスやたとえチフスにかかっていなかったとしても、ロウウッドでの生活環境が劣悪であるがゆえに、学校が犠牲者を出していることは想像に難くない。プロクルハーストがチーズつきのパンの昼食を二週間に二度も生徒に出したと言ってテンプル (Temple) 先生の責任を問い、「人はパンのみにて生きるものにあらず」というルカによる福音書第4章第5節を持ち出したとしても、後に生徒の食べ物と量の劣悪さが明るみに出されることにより、プロクルハーストが持ち出す言葉が効力を失うこととなるのだ。このように人が自分を正当化するために用いる聖書の言葉が偽りのものであり、キリストの精神に反すること

をジェインは経験から知ることとなり、後の彼女の選択に大きな意味を持つこととなる。

幸いジェインは改善された学校で教師の職を与えられるが、しだいに自由を求めるようになり、ある日ヘラルド紙に「正則英国教育の一般課目、ならびにフランス語、図画、音楽の教授資格あり」という広告文を出し、新しい職（ガヴァネス）を得る。<sup>4</sup> ジェインがガヴァネスの職を得たソーンフィールド（Thornfield）は、給料が30ポンドでロウウッドでの教師としての給料の二倍であるだけでなく、紳士で地主のロチェスター（Rochester）がいる場所である。ジョン・マクラウド（John Macleod）が指摘しているように、ソーンフィールドは、ジェインにとって幸福と動揺の場所である（Macleod 149）。彼女はガヴァネスとしての役割を楽しむ一方で、愛するロチェスターへの強い感情をコントロールすべく努めるからである。教え子のアデル（Adele）の朝の勉強時間の後、フェアファックス（Fairfax）に案内されてジェインは三階の表側と裏側との室をへだてている長い廊下に来るが、その天井が低く、うす暗く、突きあたりに小さな窓が一つあるきりで、閉めきった小さい黒い扉が両側に並んでいるのを見て、「青ひげの城」（107）の通廊のようであると感ずる。『青ひげ』（*La Barbe-Bleue*）はペロー（Perrault）の童話集にも収められているが、これは、次々に妻を殺した残酷な男の話である。

コンテキスト上注目に値することは、青ひげとロチェスターがイメージの上で重なることである。なぜならば、ロチェスターにはすでに妻がいたにもかかわらず、ジェインと結婚しようとするからである。ジェインも妻がいる事実を知らなければ、あるいは、たとえ知っていたとしても、ロチェスターの意志に服従したならば、ロチェスターのそばにいて妻としての役割を果たすことができたはずである。「よるべのない貧しい器量の悪い家庭教師」（161）が地位と富で遠く隔てられたロチェスター、また家柄においてつりあいのとれているイングラム（Ingram）嬢と結婚しようと思えばできたであろうロチェスターに選ばれただけでも、当時の一般的な考え方からすれば、幸せなことではあるはずだが、ジェインはロチェスターのもとに続けることを

潔しとはしない。

もともとロチェスターは、自分から望んでバーサ・メイスン (Bertha Mason) と結婚したわけではない。父親が昔なじみで西インドの農園主で商人のメイスン氏に娘がいて、3万ポンドを与えられることを聞き及び、政略結婚も同然の形で結婚したのであった。この結婚はうまくいかず、妻のバーサが狂人となり、ロチェスターは、ソーンフィールドの3階の部屋に狂人収容所から雇い入れられたグレイス・プール (Grace Pool) を番人として妻をとじこめたのであった。<sup>5</sup> ルース・ブランドン (Ruth Brandon) は、18世紀には結婚は個人的できごとであるだけでなく、当事者同士以外に二つの家族の公的契約でもあったが、*Jane Eyre* が書かれたときまでに結婚は外部の干渉や強制のない個人的充足の約束に基づく当事者間の個人的で感情的な結びつきになったことを指摘している (Brandon 181)。このような歴史的事実を考慮すれば、ロチェスターとバーサの結婚は、18世紀的であり二つの家族の契約と言ってもいい。ロチェスターの結婚は、いわば彼の意志によるものではないのだが、事情を知った上でもなお、ジェインはロチェスターのそばに居ることを拒むのである。マクラウドが「ジェインの卑屈な状態から自立、経済的安全、自身の望む結婚への旅は、ジャマイカ出身のロチェスターの妻バーサ・メイスンの圧迫なしにはありえなかった」と述べているように (Macleod 152)、ジェインは、事情はどうあれ、二重結婚しようとしたロチェスターを拒むことにより、後に自身の望む結婚へたどり着く。

ロチェスターを拒むジェインの心理は、第12章に見られる彼女の考えからくるものと思われる。

Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine

themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex. (109)

女性は、普通にはごく静かなものと考えられている。しかし、女性もまた男性と同じく感情を持っている。兄弟たちと同じように、その能力を発揮することや、努力を向ける領域を持つことを必要としている。男たちと同じように、あまりに厳しい束縛や、あまりに圧倒的な沈滞に悩み苦しむ。だから、女たちはプディングを作ったり、靴下を編んだり、ピアノをひいたり、袋の刺繍をしたりしておればいいのだというのは、より多くの特権に恵まれた異性の狭量からである。習慣によって、女たちに必要だと申し渡されてきた以上のことを、彼女たちがなそうとし、学ぼうとするからといって、非難したり、嘲笑したりするのは心なきわざである。

この箇所は、女性の解放を訴える部分であり、もし二重結婚しようとしたロチェスターを受け入れてしまえば、この考えを否定することになったはずである。しかし、彼を拒み卑屈な状態から自立することにより、ジェインはこの考えを実現させるのである。<sup>6</sup>

ジェインがロチェスターの元を去ることの意味は、女性の解放以外にロチェスターの側の浄化という意味がある。ドレン・ロバーツ (Doren Roberts) は、ジェインの激しさを道徳面でロチェスターに対し批判的であると見てとっているが (Roberts 46), 「神と自己とを信ずるのです。天を信ずるのです。再びそこで会うことを望むのです」 (316) とジェインが言い、ロチェスターの元を去ることにより、ロチェスターの過去が浄化されるのである。このような浄化は、ジェインがロチェスターの元を去って後セント・ジョン・リヴァーズ (St. John Rivers) に対しても行われる。それを以下見ていきたい。

## 2. セント・ジョン・リヴァーズとの出会いと別れ

ソーンフィールドを去ったジェインは、飢え、死にかけているところをセント・ジョン・リヴァーズに救われ、さらに村の学校での教師としての仕事を与えられる。ジェインは、セント・ジョンに感謝しながらも彼の説教を聞き、不思議に苛烈なところがあり、心を慰めるやさしさが欠けていることに気づく。しだいにジェインは、「イエス・キリスト派の信奉者」(375)と言いながらもセント・ジョンに他者に自身の信ずる教義を強いるところがあることを知るようになる。セント・ジョンは、ロザモンド・オリヴァ (Rosamond Oliver) と結婚しようと思えば結婚できたにもかかわらず、伝道者となって東洋へ行く決心をする。折しもジェインは、セント・ジョンがいとこであることを知り、自身がマデイラの商人であった叔父の遺産 2万ポンドを受け取ることができることを知る。ジェインは、2万ポンドの金額を譲り受けることができるにもかかわらず、セント・ジョンと彼の二人の妹ダイアナ (Diana) とメアリ (Mary) に5千ポンドずつ譲ることにする。大変な恩義にお返しをし、一生の友を得る喜びを捨てることができないと考えるジェインに対し、セント・ジョンは、「あなたが、今そう考えるのは、富を持つことがどんなことであるかを知らず、したがって、それを楽しむことがどんなことであるかも知らないからです。2万ポンドがどんな重要性を持つものであるか、それによって社会でどんな高さにのぼることができるか、どんな前途が開けてくるか、見当をつけることすらできないからです」(387)と言う。社会的に有利になることが解っているにもかかわらず、5千ポンドしか受けとらず、後の1万5千ポンドをセント・ジョンと彼の妹たちに分け与えるジェインは、少なくとも金だけが人生において一番重要であると思っていない点で、セント・ジョンと共通の部分を持ち合わせていると言える。しかし、ジェインはセント・ジョンにヒンスタニ語を学ぶよう強いられたように感じている。

As for me, I daily wished more to please him: but to do so, I felt daily more and more that I must disown half my nature, stifle half my faculties, wrest my tastes from their original bent, force myself to the adoption of pursuits for which I had no natural vocation. He wanted to train me to an elevation I could never reach: it racked me hourly to aspire to the standard he uplifted. The thing was as impossible as to mould my irregular features to his correct and classic pattern, to give to my changeable green eyes the sea blue tint and solemn lustre of his own. (398)

私とはいうと、日々もっと彼を喜ばせたいと思っていたが、そうするためには、自分の性格を半分だけなくし、才能を半分だけ押さえつけ、趣味をもとの傾向からねじ曲げ、生まれつきの使命感もともなわない仕事を、無理に選ばなければならぬのだと、日々感じてくるのだった。彼は私を訓練して、私が決して達することのできぬ高みへ引きあげることがを欲した。彼が高くかける標準にのぼろうとするのは、私にはたえまない苦しみであった。そういうことは、私の不ぞろいな目鼻立ちを、彼のとのった古典的な型にこねなおしたり、私の変幻しやすい緑色の目に、彼の目の海のような青色と厳粛な光とを与えようとするのと同じように、不可能なことだった。

高みに引き上げようとしてくれているにもかかわらず、ジェインがセント・ジョン・リヴァーズに違和感を覚えるのは、自分の本性を押さえつけている、すなわち、不自然であると感じるからである。セント・ジョンがジェインにヒンドスタニ語を学ばせたのは、宣教師の妻として彼女をインドへ連れていくためであった。

ここで、インドにおけるキリスト教の布教について触れておきたい。最初、イギリス東インド会社は、強引な布教活動が現地社会を刺激し、本来の目的である商業活動に支障をきたすことを恐れ、支配領での布教を禁じていた。

しかし、18世紀後半からイギリス本国で台頭した福音主義は、未開社会をキリスト教によって文明化する使命を唱え、東インド会社領内での布教活動を解禁するようという圧力は強まっていった。チャールズ・グラント (Charles Grant, 1778-1866) は、インドは政治的にも宗教的にも墮落しているとし、キリスト教の導入が必要であると考えていた。また、福音主義指導者の一人ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) も、1793年の下院において、「インドの現地民たち、なかんずくバラモンは、最も救い難い無知と悪徳に陥っている」として、キリスト教布教によるインドの救済を訴えた。彼によれば、ヒンドゥーの神々は「肉欲、不正、邪悪さ、残忍さの怪物」であり、ヒンドゥーの宗教システムは「醜悪な代物」であった。福音主義者にとっては、インドという広大な野蛮社会が、イギリス支配下に入ったこと自体、神の意思であると考えられたのである。こうした圧力を背景に、1813年に更新されたイギリス東インド会社への特許状は、会社の支配する領土でのキリスト教宣教師の活動を許した (栗屋 11-12)。このことからセント・ジョンがインドで宣教活動することは、時代の要請に応ずる行動と言えよう。<sup>7</sup>

セント・ジョンは、ジェインと一緒にインドへ行くよう説得するが、ジェインは、かたくなに彼の要求を拒む。テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は、「ジェインは、リヴァーズの要求が彼女のアイデンティティを冒瀆するからだけでなく、リヴァーズの傲慢な男らしさゆえにもリヴァーズを拒否する」と述べている (Eagleton 21)。セント・ジョンには自分を正当化するため、またジェインを説得するため、神を持ち出しているがゆえに傲慢さが感じられる。そのことは、「神と自然とは、あなたを宣教師の妻にすることを意図したのです」(402)という言葉や、愛し合っていないという理由で拒否するジェインに言う「あなたが拒否するのは、ほくでなく、神であることをお忘れなく」(409)という言葉からもうかがえる。作品の中宣教師リヴァーズは殉教者になりきっていて、自身を正当化するヒーローである。ジェインが愛していないがゆえにリヴァーズを拒否するという選択をしなけ

れば、ジェインはあやうく殉教者になるところであった。しかし、ジェインは自身の心情からロチェスターへの愛を最優先する。ロチェスターへの愛こそ自身の使命と感じるジェインを目の当たりにし、正道への帰還を願い、「神の怒りに会うべき人としてあなたを滅亡にまかせすることはできない。悔い改めて、決心してください」(418)、「この世のよきものを積んだ『富める人』(Luke 16)の運命を思い出してください。神があなたに『奪うべからざるは善きもの』(Luke 10: 42)を選ぶ力を与えてくださいますように」(418)と言うリヴァーズが汚れなき心から言葉を発していたとしても、人間の言葉である以上、ジェインはマインドコントロールされる危険もあったわけである。

インドへ出発する前、別れのあいさつをしに行く前、セント・ジョンは、まだあきらめきれず、扉の下からジェインに次のように書かれた紙きれを差しこむ。

“You left me too suddenly last night. Had you stayed but a little longer, you would have laid your hand on the Christian’s cross and the angel’s crown. I shall expect your clear decision when I return this day fortnight. Meantime, watch and pray that you enter not into temptation: the spirit, I trust, is willing, but the flesh, I see, is weak. I shall pray for you hourly. —Yours, St. John.” (420-21)

「昨夜、あなたはあまりにあわただしく行ってしまいました。もう少しとどまっていたならば、あなたはクリスチャンの十字架と天使の冠とに手をおいていたことでしょう。二週間後の今日、私が帰ってきたときには、はっきりと決意ができていることを期待しています。それまでは、『誘惑に陥らぬよう目を覚まし、かつ祈れ。げに心は熱すれども肉体よわきなり』と、心してください。私はあなたのために祈ります。——あなたのセント・ジョンより」

セント・ジョンは、「誘惑に陥らぬよう目を覚まし、祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」(Matthew 26: 41)というマタイによる福音書からの言葉を引用している。これはゲツセマネでユダに裏切られて連れ去られる前、弟子たちが眠っていたので、イエスがペテロに言った言葉である。その後弟子たちがイエスを見捨てて逃げ去ることを考えると、セント・ジョンは自身をイエスにたとえ、ロチェスターの元へ戻るという誘惑にかられているジェインを弟子たちにたとえていると言えよう。セント・ジョンが聖書の言葉を引用することは、自身を正当化し、ジェインをロチェスターの元へ帰らせまいとされているご都合主義を露呈させることとなる。しかし、ジェインは、心の中で「私の心は正しいことを進んでなすのですし、私の肉体は、神の意志がはっきり解れば、それをなしとげるだけの強さがあると思います」(421)と答え、ロチェスターの元へ戻るべく、ソーンフィールドへの馬車に乗りこむ。

ソーンフィールドに戻ってみると、邸はバーサのつけた火で燃え落ち、バーサ自身は焼死していて、ジェインとロチェスターの結びつきを妨げる障害は消えていたのだ。<sup>8</sup> 障害が消え去ったことは好都合であったが、ジェインは屋敷が崩れ落ちる際にロチェスターが怪我をし、片手がつぶされ目が見えなくなったのを知る。すでに叔父の遺産5000ポンドによって経済的に自立できるジェインは、ロチェスターを見捨てることもできたわけである。しかしジェインは、「ぼくのところにいてくれるというの？」(435)と尋ねるロチェスターに「もちろんもしおいやでなければ。わたし、あなたの隣人になり、看護婦になり、家政婦になります」(435)と言い、彼と結婚する決意をする。愛していないがゆえにセント・ジョンと結婚せず、条件は以前より悪くなっていたとしても愛しているがゆえにロチェスターと結婚したジェインの選択は彼女の願望に基づいてはいるが、ロチェスターの次のような言葉によって正しいものとなる。

“Jane! you think me, I daresay, an irreligious dog: but my heart swells

with gratitude to the beneficent God of this earth just now. He sees not as man sees, but far clearer: judges not as man judges, but far more wisely. I did wrong: I would have sullied my innocent flower—breathed guilt on its purity: the Omnipotent snatched it from me. I, in my stiff-necked rebellion, almost cursed the dispensation: instead of bending to the decree, I defied it. Divine justice pursued its course; disasters came thick on me: I was forced to pass through the valley of the shadow of death. *His* chastisements are mighty; and one smote me which has humbled me for ever. You know I was proud of my strength: but what is it now, when I must give it over to foreign guidance, as a child does its weakness? Of late, Jane—only of late—I began to see and acknowledge the hand of God in my doom. I began to experience remorse, repentance; the wish for reconciliation to my Maker. I began sometimes to pray: very brief prayers they were, but very sincere. (446)

「ジェイン！きっと君は、ぼくを、信仰心のないくだらぬ犬ころぐらいに考えるだろうが、今こそぼくの心は、この地上の慈悲にみちた神に対する感謝の気持ちでいっぱいなのだ。神は、人間の見るような見方をなさらず、もっとはるかに賢明に裁かれる。ぼくはあやまちをおかした。純粋な、ぼくの花を汚しかねなかったのだ。——その清浄な花に罪の息吹をかけようとした。そして全能の神は、ぼくからそれを奪いとってしまわれた。ぼくは、かたくなな反抗心から、その天の配剤を呪わんばかりだった。神のみ旨に従うことをしないで、それに挑戦した。神の裁きはその道筋を追って進められ、しきりに災難が振りかかってきた。ぼくは死の影の谷を過ぎなければならなかった。神のこらしめは力強いものであって、ぼくは一度打ちすえられ、僕の高慢は永久にへし折られてしまった。知ってのとおり、ぼくは自分の体力を誇っていたが、こうして、ひよわい子供のように、他人に手を引いてもらわなければならぬ今となっては、それがなんだろうか。最近になってジェイン——ほんの——つい

最近になって——僕は自分の悲運の中に、神のみ手を見、それをみとめはじめたのだ。悔恨、悔悟を経験し始め、造物主にひれ伏したいという願望を持ちはじめたのだ。ときどき、祈るようになった——ごく短い祈りなのだが、まごころをこめてのものだ。

「神は人間の見るような見方をなさらず、もっとはるかに遠くまで見ておられ、人間が裁くような裁き方をなさらず、もっとはるかに賢明に裁かれる」、  
「ぼくは自分の運命の中に、神のみ手を見、それをみとめはじめたのだ」というロチェスターの言葉は、ジェインの願望に基づいた行動も彼の中では神の計画のうちに入っていることを示している。このように考えると、ジェインの選択は、セント・ジョンだけでなく、ロチェスターにも神がいて、人間は神の前に平等であることを示す手助けとなっていると言っている。

## 結 び

以上、本論文では *Jane Eyre* におけるヒロインの願望と選択の相関関係と選択の意味について考えてきた。作品においてジェインは、二重結婚しようとしたロチェスターの元を去り、モートン (Morton) へ至る。レベッカ・N・ミッチェル (Rebecca N. Mitchell) は、「モートンでのジェインの時間はロチェスターとの生活から逃れての気晴らしだけでなく、ロチェスターとの生活へ至る必要な段階である」と述べている (Mitchell 309-10)。モートンでのジェインの時間は、セント・ジョンとの関係において彼女がロチェスターの重要性を認識する時間でもあったのだ。ジェインは自身の願望に基づいて最終的な選択をし、その選択は最後のロチェスターの言葉によって正当化される。

アイリーン・テイラー (Irene Taylor) は、「ジェインの結婚がなしとげられ、彼女の家庭的な幸福が確かなものとなるやいなや、セント・ジョンは再びストーリーに入ってきて、彼の性格はもはや不穏なものではなく、賞賛すべきものとなる」と述べているが (Taylor 179)、もし、ジェインがセント・ジョンの説得に応じ彼の妻となってインドへ行っていたとしたら、愛する男

性と結婚するという願望を犠牲にするところであった。

シャーロット・ブロンテは、ジェインにセント・ジョンとの結婚を拒否させることにより、女性にも選択権があること、神は女性のためにも存在していることを示した、と言っているだろう。

### 注

\*本稿は、欧米言語文化学会第25回関西支部例会におけるワークショップ「ジェンダーの諸相（2012年9月11日，同志社大学）での発表原稿に加筆修正を施したものである。

1. キャロル・ボック (Carol Bock) は、「ドイツヘッドでの読書は若いジェインに純粋で慰めを与える気晴らしである。なぜなら読書は、現実の不幸な環境からの逃避であり、自身の経験を受け入れる手助けとなる本の中の類似物を見つけることだからである」と述べている (Bock 72)。また、ボックは、赤い部屋におけるヒステリックなノイローゼ状態とできごとの後遺症によりジェインの解釈をする習慣が破滅的になっていること、困惑した自身の心理状態を表すためジェインがガリヴァーを用いていることを指摘している (Bock 73)。
2. カウワン・ブリッジについて1842年の報告書には、入学規則が書かれている。

「規則第二条。衣服，住居，食事，教育に関する費用は年14ポンド。その半額を生徒が入学したときに前払いとし，書籍，その他の使用料として1ポンド入学金を納める。授業科目は，歴史，地理，天文学，文法，作文と算数，あらゆる針仕事，そしてより上品な家事仕事——例えば上等なリンネルの仕上げ方，アイロンかけ——などである。芸事を望む場合は，音楽，絵画にそれぞれ年3ポンド付加する」(Gaskell 50)。

3. カウアン・ブリッジの学校の規則は厳しく，他の生徒の前で打たれることもあった。食事は汚染されていて，変な味がした。1825年に発疹チフスが発生した。
4. 1840年代と1850年代において，*The Times* にガヴァネスの職を求める毎日約5つの広告が見られた。次のものは典型的な例である。

Governess.—a Lady, of considerable experience in tuition, wishes to obtain a SUTUATION in a gentleman's family. She is competent to teach English, French and Italian languages, music, drawing, and the usual branches of a lady's education.

The advertiser has resided three years in Paris. Address, post paid, to P. A., at Mr Stranger's 14, Broadway, near Queen's—Square, Westminster. (*The Times*, 24 September 1850)

次は、生徒の日課の一例である。

Practice	Dinner (lunch)
Breakfast	Rest (using a backboard)
Copy books	Bible reading and reading aloud from a novel
Arithmetic	Walk
History	Tea
Break	Sewing/reading aloud
Geography	
Poems	

8歳くらいになると、フランス語やドイツ語が時間割に加わった。外国人のガヴァネスが雇われる場合は、一日中外国語の訓練に使われる可能性があった。音楽は、カリキュラムにおいて重要な位置を占めていた。ピアノ、ヴァイオリン、歌の練習は基本的に行われ、一週間に一、二度先生にレッスンを受けることもあった (Hughes 71)。

ガヴァネスは、自分を支えてくれる夫も自分の金も持たない場合、中産階級の女性が生活費を稼ぐ唯一の方法であった。1851年の国勢調査によると、2,5000人のガヴァネスがいた。それは、20歳から40歳までの未婚女性の2パーセントであった (Brandon 1)。

しかし同時に750,000人の女性の召使いがいた。メアリー・プーヴィー (Mary Poovey) は、「女性の召使いの労働条件と賃金は、人間を衰弱させるようなものであったが、ガヴァネスの貧苦ほど嘆かわしいものではなかった」と述べている (Poovey 169)。

ガヴァネスは育ちが良いことが求められた。牧師の娘はとりわけ人気があった。非公式なネットワークと、友人の紹介による慎重な問い合わせが職を見つける方法としては好まれた。別の方法として人材紹介所があるが、ここでは手数料をとられることも多かった。

ガヴァネスの希望者は、手詰まりになったときだけ、しかたなしに地元の新

聞や全国紙に求職広告を出した。よく選ばれたのは *The Times* で、1840年代末期には、一日あたり100件にもものぼる家庭教師の求職広告を掲載していた (Evans 121)。

5. シャーロットは、1839年5月にストーンギャップ (Stonegappe) に住むシジウィック家 (The Sidgewicks) のガヴァネスになった。シジウィック夫人の父親のスクォークリフ・ホール (Swarcliffe Hall) に滞在していたときに、シャーロットはノートン・コンヤーズ (Norton Conyers) を訪れ、狂女が閉じ込められていたという言い伝えのある屋根裏部屋を見ている。これが *Jane Eyre* に影響を与えていると考えられている。
6. ジェインの行為は、一生独身でいる覚悟に基づく行為であると言っていい。一生独身でいる女性に関し、シャーロットは、1846年1月30日のウラー (Wooler) 先生への手紙で、「夫や兄弟の扶養を受けなくて、静かに忍耐強く人生で我が道を進む未婚の女性以上に、この世でもっと尊敬される女性はいないと考えようになりました」と述べている。その理由としてシャーロットは、「45歳あるいはそれ以上になった彼女たちは、調整のとれた精神や、ささやかな喜びを楽しむ性格や避けがたい苦痛を我慢する不屈の精神を持ち、他人の苦しみに同情し、資金が続く限り、貧困を進んで救済しようとする気持ちを持ち続けているのです」と述べている (Gaskell 232)。(1831年1月から1832年5月までシャーロットはミス・ウラーの経営するロー・ヘッド・スクール (Roe Head School) で学んだ。)
7. ムア・フィールズ (Moor Fields) にあったロンドン宣教師館は、19世紀初頭の時代精神をよくつかんでいた博物館であった。この博物館は、きわめて敬虔にして不屈の精神を持った宣教師たちがさまざまな時期に地球上の僻遠の地へと散らばり、異教徒にキリスト教信仰を広めるため艱難辛苦に嬉々として耐えながら収集した品々で構成されていた。収集品のうち多くの品々が、宣教師たちが駐在した地域の人々の信仰を詳しく描き出しているだけでなく、多くは未開人たちがヨーロッパ人と交流を持つ以前からそなえていた、品物を精巧につくる技術も明らかにしていた。そしてそれ以外の品々にも宣教師たちの尽力によって彼らの技術と文明にもたらされた大いなる進歩が示されていた。加えて、ヒンドゥー教や中国、ビルマの偶像の多量の収集品や、多数の宣教師と、同じように進取的で尊敬に値するその妻たちの、細密画の肖像も集められていた (Paterson 207-8)。
8. 川本静子氏は、ジェインとロチェスターの結びつきを妨げる障害が消えること

について、「シャーロットが一人のガヴァネスの自己実現を、強引なプロットの展開によって、合法的結婚という既成の秩序の限界内にかろうじてとどめた」と考えている（川本 144）。

## 作 品

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Oxford: Oxford UP, 2000.

## 参 考 文 献

Berg Maggie. *Jane Eyre: Portrait of a Life*. Boston: Twayne Publishers, 1987.

Bock, Carol. *Charlotte Brontë and the Storyteller's Audience*. Iowa City: U of Iowa P, 1992.

Brandon, Ruth. *Governess: The Lives and Times of the Real Jane Eyres*. New York: Walker & Company, 2008.

Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontë*. London: Macmillan, 1975.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Oxford: Oxford UP, 1996.

Hughes, Kathryn. *The Victorian Governess*. London: Cambridge UP, 1993.

Macleod, John. *Beginning Postcolonialism*. New York: Manchester UP, 2000.

Mitchell, Rebecca N. “The Rosamond Plots: Alterity and the Unknown in *Jane Eyre* and *Middlemarch*”, *Nineteenth-Century Literature*. Vol. 66. No. 3. Ed. Jonathan H. Grossman, Saree Makdisi. Berkeley: U of California P, 2011.

Poovey, Mary. “The Anathematised Race: The Governess and *Jane Eyre*”, *Jane Eyre: Contemporary Critical Essays*. Ed. Heather Glen. New York: St Martin's P, 1997.

Roberts, Doren. “*Jane Eyre* and ‘The Warped System of Things’”, *Jane Eyre: Contemporary Critical Essays*. Ed. Heather Glen. New York: St. Martin's P, 1997.

Shuttleworth, Sally. Introduction to *Jane Eyre*. Oxford: Oxford UP, 2000.

Taylor, Irene. *Holly Ghost: The Male Muses Emily and Charlotte Brontë*. New York: Columbia UP, 1990.

内田能嗣（編著），『ブロンテ姉妹の世界』，ミネルヴァ書房，2010。

エヴァンズ，シャーン，『図説 メイドと執事の文化史 英国家事使用人たちの日常』，村上リコ（訳），原書房，2012。

粟屋利江，『イギリス支配とインド社会』，山川出版社，2003。

川本静子，『ガヴァネス ヴィクトリア朝時代の<余った>女たち』，みすず書房，

*Jane Eyre* におけるヒロインの願望と選択

2007.

バターソン, マイケル, 『ディケンズのロンドン案内』, 原書房, 2010.

## The Wish and the Choice of the Heroine in *Jane Eyre*

YOSHIDA, Kazuho

*Jane Eyre* (1847) is a novel by Charlotte Brontë. When it was first published in October 1847, it caused a literary sensation. It was widely reviewed in the national and provincial press, with critics falling over one another to praise its freshness, vigour and reality. However, it was often attacked because of its radical thought of feminism.

The heroine, a penniless orphan, has been left to the care of her aunt, Mrs. Reed. Harsh and unsympathetic treatment rouses the spirit of the child, and a passionate outbreak leads to her consignment to Lowood Asylum, a charitable institution, where after some miserable years she becomes a teacher. (In Lowood Asylum Miss Brontë depicted the school at Cowan Bridge where she spent some unhappy years.) Thence she passes to be a governess at Thornfield Hall to a little girl, the natural daughter of Mr. Rochester, a man of grim aspect and sardonic temper.

In spite of Jane Eyre's plainness, Rochester is fascinated by her elfish wit and courageous spirit, and falls in love with her, and she also falls in love with him. Their marriage is prevented at the last moment by the revelation that he has a wife living, a raving lunatic, kept in seclusion at Thornfield Hall. Jane flees from the Hall, and after nearly perishing on the moors is taken in and cared for by the Revd. St. John Rivers and his sisters.

In the eighteenth century, marriage had involved not just the individuals concerned but had been public contract in which two clans, as well as two people, were joined together. However, by the time *Jane Eyre* was written, it had become a private emotional bond between two individuals based on the promise of personal fulfillment, with no outside interference and no redress. Jane's refusal to live with Rochester, the married man, shows not only her wish of being on an equal footing with him but also the necessity of his purification.

St. John Rivers saves her from living as a homeless wanderer. Under the influence of the strong personality of Rivers, Jane nearly consents (in spite of her undiminished love for Rochester) to marry him and accompany him to India. She is prevented by a telepathic appeal from Rochester, and sets out for Thornfield Hall, to learn that the hall has been burnt down, and that Rochester, in vainly trying to save his wife from the flames, has been blinded and maimed. She finds him in utter dejection, becomes his wife, and restores him to happiness.

If she had accompanied Rivers to India, she would sacrifice her marriage with Rochester. Fortunately she refuses to defer to Rivers's wishes, escapes from his mind control, and gets married to Rochester. At the end of the story, Rochester approves of Jane's decision that she rejected him, the married man, by the name of God. Charlotte Brontë shows that a woman has her own right of choice and God exists not only for a man but also for a woman.

# Simulation and Educational Technology for Foreign Language Learning

IWASAKI, Irene

## Introduction

Although all teachers of English as Foreign Language (EFL) attempt to help learners increase their knowledge and facilitate practice of the language in order to get closer to a level of fluency, there are conflicting opinions on what the most effective methods are to accomplish this. However, most EFL teachers will agree that one of the biggest barriers to learning a foreign language is that it is foreign. Learning the subject matter may then seem understandably meaningless to those who have no plans to use it at the present time, or even in the near future, and may seem too artificial a practice even to those who do. In order to bring more sense and relevancy to learning, teachers would have to implement methods that seem immediate, real and personally meaningful and motivating for their learners. In creating a learning environment that is going to seem relevant to the learner, especially when the information is about a distant matter, reliance should be placed on the *simulability* of the learning that is taking place.

## Simulation and Educational Technology

Although educational technology is usually associated with that which is electrical or digital, in a broader definition, educational technology is any supply, instrument or tool that aids the learning process. A product that enables or enhances the process of learning may be considered an artifact of educational technology, be it chalk and slate, pencil and paper, a textbook or a computer. Educational technology supports the flow of thought and the retainment of ideas (memory and memes), and may allow the learner to simulate situations beyond

---

Keywords: EFL/ESL, CALL, Simulation, Educational Technology, Second Life

their present time and place.

More than educational technology, the learning process depends on the concept of simulation. Although contemporary associations with simulation are synonymous with digital technology and computations (Kuppers/Lenhard/Shinn, 2006: 3-4), *The Oxford English Dictionary* defines *simulation* as: “The action or practice of simulating, with intent to deceive; false pretence, deceitful profession.” There is then perhaps, no practice more deceitful than that of the teacher who attempts to guide his or her students on false pretences and constant deception to legitimize what is being learned. A few examples of simulation philosophized by Jean Baudrillard in his book, *Simulacra and Simulation*, are: images, imagination, imitation, representations, duplications, parody, algebra, references and maps. Simulacra and/or simulation can be found in all disciplines, from math to art, from science to religion. Simulation, then, is much more than present-day notions of the physical use or operation of machine simulators for practical training or war-based gaming. Simulation is the very process of learning through repetition or through the use of representations that exist outside of the learning environment. Simulations are not limited to the use of computers or hypermedia.

Simulations are the foundation of knowledge-building and training in general. Simulations do not rely solely on educational technology, such as machine simulators, but they do require exercising the imagination and having belief in a situation beyond the learner’s present knowledge. Simulations may be as basic as practical activities that imitate ideas or events that take place away from the learning environment. A simulation may be as basic as “a representation, a sign, a copy: an image without the substance or quality of the original” (Riordan: 5). Without educational simulacra, the learning process would be severely hindered because our memory and imagination need to be primed and rely on educational simulacra such as notes or diagrams.

Digital simulations are currently the most evolved form of simulation, or hypersimulation, which includes 3D simulations. Such simulations are hyper-real, giving way for audio and visual learning that is responsive and dependent on the actions of its participants. Incorporating a digital learning system, application, software or online game into the artificial learning environment can make for more natural acquisition of the language because it is multi-sensory and

interactive. The greater the simulation, the greater the capacity for learning.

### **Popular Media-induced Simulations**

Learning culture is an integral part of learning language. Language and culture cannot be separated, especially in the realm of a practical whole language approach. Learners may learn about culture by reading alone or through a passive lecture, but giving students the opportunity to interact directly within that culture puts an aspect of authentic practice into their learning. Cultural simulations are a necessary part of EFL learning, but how can culture be effectively brought into an EFL setting? A foreign teacher alone is not enough, especially with larger classes. The solution must lie with the capabilities of media systems that afford learners with direct and personal connection to the cultural information. Where television may bring a satisfactory audio-visual element to learning, the medium itself is not interactive and remains a passive medium without supportive instruction. A higher level of simulation requires interactivity or learner participation in order to develop. Such simulations invite the learner to collaboratively control the mode of action and communication. This is hypersimulation, which “threatens the difference between the ‘true’ and the ‘false,’ the ‘real’ and the ‘imaginary’” (Baudrillard, 1981: 3). From wire, machineware and artificial light, real use of language and interplay in a foreign culture can evolve.

In the classic novel *Simulacra*, written by Philip K. Dick (1964), an entire nation of people live in a society dominated by mass media and the presence of simulacra in every aspect of their lives, and are even led by a President who is not real, but a simulated character. Although a work of science fiction, Dick’s futuristic story reflects many aspects of society, from media control to replications of objects and products, to online personas, which we rely on for our social realities.

In *Simulacrum*, the poet Timothy Riordan expresses our temporal relationship with the passing of real time, compared with the permanence and omnipresence of time in media simulations:

how quickly  
things disappear

(thoughts for instance)

an entire nation

living inside

the television

and now the internet (Riordan, 2011: 9)

Media such as television and the Internet have consumed us to the point where Riordan believes we are permanently living within simulation. Although a criticism of society, Riordan's expression of the simulacrum of life states how dependent society is on media for information and communication. Whether we believe this is a positive or negative attribute of the way we live, it is unrealistic to run a classroom in a way that is isolated or unreflective of the way contemporary society communicates on a daily basis. In his book, *Simulation and Simulacra*, Jean Baudrillard (1981) philosophizes on the process of simulation. He describes media as a system that metaphorically begins as a desert that can suddenly implode with social meaning that is infinite, fuelled not only by necessary electricity, but also by the users that interact within the system (161) and social networks. This describes both machine and people as the collaborators of simulation.

### **Simulation Games and Virtual Worlds**

Computer games functioning in the target language are an example of authentic culture (Gane, 2006: 283), the culture of the creators as well as the culture of the participants. Playing or interacting in these games allows learners to experience both the target language and the cultural forms that appear simultaneously with it. Cultural understanding such as the look of characters and their settings, as well as the cultural activity such as character lifestyle, gestures and clothing are a few of the cultural concepts that can be learned from participating in game simulations. Many simulation games and virtual worlds are full of cultural information such as the way people (characters and avatars) interact and the type of objects and products they use. Games are a medium for cultural exchange or the merging of cultures, and are an example of a "powerful dimension of global culture" (Gane, 2006: 283).

Within the situation of a simulation, learners may be exposed to and generate language naturally, instead of being taught language items in isolation or analytically. Rather than attempting to learn the foreign language by analyzing isolated language items or segments, participating in a simulated approach will allow learners to experience authentic communication while affording them with hints such as language cues (text or signs), animation or images (relevant objects, background settings) and cultural scenes/situations. Learners may effectively learn how to negotiate meaning (Garcia-Carbonell/Rising/Wattsi, 2001: 486) using interactive digital situations.

Virtual worlds are an exciting and therefore motivating way for learners to experience foreign language and culture. *The Sims* games series and the online site *Second Life* are two examples of virtual worlds in which learners can engage in the authentic target language. Computer-mediated simulations such as these will allow users to delve deeper into their learning simulations and retain language items through interactive learning with authentic language used regularly by first language speakers.

### ***Sims and Second Life***

*The Sims* are a series of single and multiple player video games where learners/participants can interact within a simulated world by controlling an avatar that can communicate and perform actions. The characters and settings in *The Sims* worlds are hyperreal with each game involving a multitude of characters and with settings that imitate different cities and places. *The Sims* characters and personal avatars can virtually mimic different activities, occupations and lifestyles. Unlike most popular video games, *The Sims* does not have a particular end goal, but instead involves the practice of social strategies and leisures in life such as shopping, building a home and dating. In *The Sims 2: University*, learners/participants simulate typical university life with activities such as studying/majoring in real school subjects, dealing with college finances, and socializing at parties.

*Second Life* is a virtual world where all learners/participants are real people from around the world who are simultaneously online, represented by avatars. In the multi-user online environment of *Second Life*, learners can communicate with each other by text or speech. Conversation or a meeting may be scheduled to

happen in a designated time and place within the system for groups of learners. Alternatively, learners may wish to explore areas within *Second Life* on their own, or with a partner, and may even want to try speaking with strangers in the virtual environment while they remain safe in their classroom or computer lab. If teachers use their creativity in manipulating how the site can be used for EFL and foreign culture acquisition, learners will be able to improve vocabulary and sentence structure while being exposed to visual situations that are conducive to the language being expressed. Through speaking and written production on the site, learners will also be simultaneously exercising “higher mental activities (which) are developed through social interaction involving the use of tools” (Petersen, 2010: 74).

Both *The Sims Series* and *Second Life* are examples of simulated environments in which participants can improve their language skills and perhaps even their social skills since simulated interaction with real participants and/or real-to-life characters, is required. Since the visuals and capabilities of these sites are constantly changing and being constructed, learners are encouraged to freely experiment with their own creative ideas and contribute to the construction of the shared virtual world. Participants may not only make alterations to their own avatars, such as changing hairstyles and clothes, but may also start up their own social group, or run a business in the target language. This requires collaboration with the available functions within the site and with other participants. These tasks are a model of how “language acquisition is facilitated by participation in collaborative dialogue involving co-construction of the target language” (Petersen, 2010: 74). While attempting to acquire and improve on their language skills, students are also improving on their computer skills and digital literacy in the process. The use of avatars to represent themselves may also act as a method of anxiety-relief of having to communicate face to face in a language that learners are not yet comfortable in. Learner affinity with a personalized avatar may also help make them feel motivated and responsible over how they act and develop both online and off.

Simulated games are more engaging than traditional classroom learning because they are a personalized method of learning, supposing that each learner has his or her own computer. When learners are working individually (but also interactively), they are able to work at their pace and proficiency level— this

may not be possible in a regular classroom where a high number of students may also mean a slower pace or greater downtime (White and Gillard, 2011: 2). It is possible that some learners may find it difficult to focus on the simulation and the language simultaneously. However, this could be resolved by allowing learners to work in pairs, with one participating actively and the other observing the action and language information that accompanies it. The cognitive load is reduced on the observing learner, and he or she may be better able to retain the new language information and cultural experiences played out by their partner (deHaan/Reed/Kuwada, 2010: 84). Because simulations are multi-sensory, there may be significant mental effort required, however, this is relevant training for real life situations, which are often fast-paced and never single-sensory.

### **Educational Technology and The Role of the Teacher**

Perhaps some teachers are hesitant to use simulated games because of the association with playing instead of productive studying. For the concept of serious gaming is to be considered, the concept of teacher-centred learning must first be reconsidered. Student creativity, a constructive approach to learning as well as co-operative learning have to be encouraged in order for student-centred simulations to be effective. The use of CALL systems must also continue to be monitored by an active teacher so that serious play and evaluation can be ensured.

When the learning process becomes more student-controlled, the teacher will no longer need to be the centre focus of the learning. What then should the role of the teacher be in a CALL classroom or a learning environment where students must take responsibility of their learning tasks? Or should teachers be threatened by the ever-growing presence of technology in schools? Perhaps the answer to this question is best answered by British author and inventor, Arthur C. Clark: “Any teacher that can be replaced by a machine should be” (1980). Whether as facilitators, instructors or learner-support, the role of the teacher in a CALL classroom is no less important than in a traditional classroom, but that role does have to be reconsidered.

Within TEFL communities, there has always been disagreement and skepticism towards new language learning methods, especially those that challenge traditional teaching or involve the use of digital equipment. To keep up with so-

cietal changes, teachers must learn to trust technology that they cannot completely control, explore the possibilities of it, and accept that efforts in “declassifying the classroom,” (Garcia-Carbonell/Rising/Wattsi, 2001 : 485) are inevitable if we really want to try to empower our learners.

### **Conclusion**

Until learners are able to experience the target culture and language in a real-life setting, successful EFL learning will depend on learning simulations, which have always been heightened with the use of educational technology. Effective EFL learning cannot happen without simulations and the use of computer or digital technology is a highly effective way to allow students to experience realistic situations while remaining in their campus environment. In considering what the most effective methods are for learning EFL, we must consider what is both effective and affective for the learner. Serious games and playing in virtual worlds are methods that can help students understand foreign cultures and retain language information such as vocabulary and sentence structure. Communicating in simulated environments may also reduce anxiety levels and improve motivation compared to simple face-to-face communication in the classroom with the teacher and/or peers.

Simulation is an inescapable part of the learning process. It always was, even before it was ever defined. Educational technology merely allows us to fall deeper into our learning simulations, and with more ease of learning, there is possibly more enjoyment and success in it. As teachers, we have to teach our students to see beyond what their eyes can immediately envision at the present time, to see beyond chalk and slate, to see beyond paper and ink and to see beyond machine and wires. The more we create, and the more we encourage our students to re-create and re-imagine, the greater our simulations can become.

### **References :**

- Baudrillard, J. (1994). *Simulacra and Simulation* (S. F. Glaser, Trans.). University of Michigan Press. (Original work published 1981).
- Bostrom, M. (2003) “Are You Living in a Computer Simulation?” *Philosophical Quarterly*. 53 (211): 243-255. Retrieved on August 1, 2012: <http://www.simulation-argument.com/simulation.html>

- Clarke, A. C. (1980). "Electronic Tutors." *Omni Magazine Online*. Retrieved on August 1, 2012: [http://www.omnimagonline.com/1980\\_06omnimag.htm](http://www.omnimagonline.com/1980_06omnimag.htm)
- Crookall, D. (2010). "Serious Games, Debriefing, and Simulation/Gaming as a Discipline." *Simulation and Gaming*. 41 (6): 89: 920.
- DeHaan, J. (2010). "The Effect of Interactivity with a Music Video Game on Second Language Vocabulary Recall." *Language Learning and Technology*. 14 (2): 74-94.
- Dick, P. K. (1964). *The Simulacra*. London: Orion Publishing Group.
- Fowler, S and Pusch, M. (2010). "Intercultural Simulation Games: A Review (of the United States and Beyond)." *Simulation and Gaming*. 41 (1): 94-115.
- Gane, N. (2006). "Simulation." *Theory, Culture and Society*. 23 (282): 1-3. TCS Centre, Nottingham Trent University: Sage Publications.
- Garcia-Carbonell, A., Rising, B., Watts, B. (2001). "Simulation/gaming and the Acquisition of Communicative Competence in Another Language." *Simulation and Gaming*. 32 (4): 481-491.
- Kuppers, G., Lenhard, J., Shinn, T. (2006). "Computer Simulation: Practice, Epistemology and Social Dynamics," in *Simulation: Pragmatic Construction of Reality* (P. Weingart and U. Yaron-Felt, Eds.). Dordrecht, Netherlands: Springer. Chapter 1, 3-22.
- Manuel, D. (2011). *Philosophy and Simulation: The Emergence of Synthetic Reason*. New York: Continuum International Publishing Group.
- Petersen, M. (2010). "Computerized Games and Simulations in Computer-Assisted Language Learning: A Meta-Analysis of Research." *Simulation and Gaming*. 41 (1): 72-93.
- Riordan, T. (2011). *Simulacrum: A Poem*. Publisher: Lulu.com (i-Bookstore).
- Simulation (1989). *The Oxford English Dictionary*. Retrieved on August 1, 2012: <http://www.oed.com.ezproxy.library.ubc.ca/view/Entry/180009?redirectedFrom=simulation#eid>
- White, E. and Gillard, S (2011). "Technology-based Literacy Instruction for English Language Learners." *Journal of College Teaching and Learning*. 8 (6): 1-5.

## Simulation and Educational Technology for Foreign Language Learning

IWASAKI, Irene

### Abstract

Simulation is a necessity for training, practice and learning. It may be in the form of a learner repeating a single skill numerous times in order to reach a desired level of perfection (low-level simulation), or it may be in the form of a multi-sensory simulation that requires critical thinking and creativity on the part of the participant (high-level simulation). Regardless of the depth of the simulation, the purpose is to involve the learner in a practice that will help them to act accordingly in a real life situation or a situation that is relevant to the purpose of learning, beyond the place where it is being practiced. Simulation requires both the imagination and the belief that what is being practiced is useful or meaningful.

Educational technology may be the main indicator to the level and quality of a simulation. Educational technology may be considered any tools used by the teacher and student, such as a textbook or a CD player, or a personal computer or computing device used to retrieve and share information. More advanced forms of educational technology are more likely to aid the realization that the targets of learning have a purpose or intentions that are both important and interesting for the learner to acquire. If this can be realized, motivation can also be enhanced, supporting an upward cycle of positive learning to take place.

As one of the main challenges of teaching a foreign language is that the content of the subject may seem too far-reaching and even irrelevant to the learner, this paper will discuss how improving the *simulability* of learning may make the subject matter (foreign language and foreign culture) appear immediately relevant as well as personally meaningful to the learner. This discussion will be followed by analysis of two multi-player, multi-dimensional games: *SIMS* and *Second Life*, which afford the practice of language items, attainment of cultural

knowledge as well as the construction of self.

# トロロープとアイルランド： Palliser series におけるアイルランド（1）

藤 居 亜矢子

## は じ め に

この論文は、19世紀イギリスの小説家トロロープ（Anthony Trollope 1815-82）による Palliser series と呼ばれる作品群で、アイルランドがどのように描かれているかを検討するものである。

トロロープは19世紀イングランドの作家である。多作で知られており、長編小説48冊（自伝・死後出版も含む）、短編43編、旅行記5冊、伝記3冊、劇2作を執筆している。多くの作品の中でも、イングランドの架空の都市 Barset を舞台にした小説やロンドンを中心とした政治小説でよく知られている。イングランドを舞台にした作品で有名であるが、郵便局員としてアイルランドに赴任したのを契機に、アイルランド関連のテーマを好んで書くようになった。

アイルランドとイギリスは地理的に隣接しているため、両者は政治的、社会的、文化的に深く関係してきた。19世紀アイルランドは1801年の併合法に端を発して、アイルランド自治運動が激化した1世紀と言える。この頃のアイルランドに関わった宗主国イギリスの思想家の中には、アイルランドに対して共通した態度がみられた。彼らには、当初はアイルランドに理解と同情を示すものの、自治の機運が高まると一転してその機運を制止しようとする、

---

キーワード：アンソニー・トロロープ、Palliser シリーズ、ヴィクトリア朝  
アイルランド

言わば、アイルランドへの相反する感情がみられた。歴史家 R. F. Foster は、*Paddy & Mr. Punch* において、彼らのことを「境界人 (marginal men)」と呼んでいる。「境界人」は、文化の境界に身を置く人間、つまり、この場合、アイルランドとイングランドという二つの文化に接する人間であった。トロロープはこの典型例といえる。

トロロープの場合、イングランド社会では出世が叶わなかったが、アイルランドに赴任してからの人生は輝き、願っていた多くを自分のものとするのができた。仕事でアイルランドを訪れてから、これまで順調とは程遠かった彼の人生は幸運に恵まれる。妻と出会い結婚したのも、子供が生まれたのも、小説を書き始めたのもアイルランドにいるときである。トロロープの狩猟への愛好は生涯続くことになるが、初めて狩りを体験したのはアイルランドにおいてであった。地主の屋敷においても、トロロープは紳士の待遇を受け、歓迎された。アイルランドにおいて彼は望んでいた自分の姿を手に入れるのができた。そのため、アイルランドはトロロープが生まれ変わった場所として、生涯特別な土地であり続けた。また、政治的にはトロロープの併合を支持する態度は生涯を通じて変化しなかった。晩年、アイルランド自治運動が活発になると、自治に対し強い反感を示すことになるが、これはイギリス系アイルランド人にも共通してみられる態度であった。トロロープのアイルランドに対する共感および併合を支持する態度は、アイルランドをテーマにした作品に共通してみることができる。

アイルランド体験は、トロロープ個人だけでなく、小説家としてのトロロープにも大きな影響を与えた。トロロープとアイルランドの関わりを見いだすことのできる作品には次のようなものがある。最初の小説、*The Macdermots of Ballycloran* (以下 *The Macdermots* 1847) はアイルランドで執筆され、アイルランドを舞台にしている。第二作目の小説、*The Kellys and the O'Kellys; or, Landlords and Tenants* (以下 *The Kellys* 1848) もまたアイルランドを舞台にした小説である。1840年代と50年代の大半をアイルランドで過ごした後、彼はアイルランドを去ることになるが、その時別れを記念して、*Castle*

*Richmond* (1860) を書いた。トロロープが執筆途中で死亡したため、未完成に終わることになったが、最後の作品、*The Landleaguers* (1883) もアイルランドを舞台にした作品である。

このほかにも、イングランドを舞台にした作品でも、アイルランドに関するテーマを扱ったものがある。ロンドンを舞台にした作品の中で、Plantagenet Palliser とその妻 Glencora が登場するものを Palliser series と呼び、シリーズには、*Can You Forgive Her?* (1865), *Phineas Finn* (1869), *The Eustace Diamonds* (1873), *Phineas Redux* (1874), *The Prime Minister* (1876), *The Duke's Children* (1880) の6作品がある。このうち、*Phineas Finn* と *Phineas Redux* は、アイルランド出身の青年 Phineas を主人公とするものである。その結果、アイルランドがメインテーマに関わるものが決定的となっているのである。また、トロロープはアイルランドに関するテーマの作品において、一貫して、アイルランドとイングランドの関係を扱っていたが、*Phineas Finn* と *Phineas Redux* でもイングランドを夫、アイルランドを妻とする比喩を用いて両者の関係を描いている。そのため、「イングランドとアイルランドの関係は Palliser と Glencora の関係によく似ている」と Lonergan が述べているように、<sup>1</sup> シリーズの中心となる Palliser 夫妻の結婚を併合に喩えていてもおかしくない。この夫妻の結婚を併合に喩えているとすれば、Palliser series は想像以上にアイルランド的要素の濃厚な作品と言える。年月を経て変化していく夫婦の姿を通して、変化していくアイルランドとイングランドの関係を描こうとしたものと考えられる。Palliser series のアイルランド要素を扱った論文には、例えば、Dougherty や Lonergan による Phineas のアイルランド性を重要視する論文が存在するが、作品の邦文はまだない。論文では、Phineas の存在に注目されることが多いが、Lonergan が述べているように、シリーズの中心人物である Palliser 夫妻と併合が象徴的な意味で重ねられているのなら、注目に値する。本論では Palliser series では、トロロープがアイルランドとイングランドの関係をどのように描き、両者がどのような関係にあることを望んでいるのか、につい

て分析していくことにする。今回はシリーズの最初の2作品となる *Can You Forgive Her?* と *Phineas Finn* を取り上げ、残りの作品については次回に述べる。

## 第1章 *Can You Forgive Her?*

### (1)

*Can You Forgive Her?* はシリーズの1作目である。二人の男性の間で揺れ動く女性3人の姿が描かれる。主人公 Alice Vavasor は昔の恋人 George と現在の婚約者 Grey, どちらと結婚するほうが自分の人生を有意義なものにできるのか悩む。Glencora Palliser は Palliser と結婚したものの、依然として Burgo を忘れられないでいる。本論では Glencora の場合では、アイルランドとイングランドの関係をどのように描いているか、をみていくことにする。

Glencora は作品の開始より前に結婚している。二人が結婚するまでの経緯は *The Small House at Allington* (1864) で語られている。その経緯は以下のようなものである。Glencora は、Burgo Fitzgerald を愛していた。しかし、Burgo は品行方正とは言えない人物であるため、彼女の財産が浪費されるのを危惧した親戚によって、二人は引き離される。その後、彼女は好きでもない Palliser と結婚するが、“They browbeat me and frightened me till I did as I was told” (1: 285) と Glencora が述べているように、強制的な結婚であった。一方、Palliser の側でも “he had married without loving or without requiring love.” (2: 199) と認めているように、二人の結婚は愛の無い政略結婚であった。Palliser 夫妻の結婚がイギリスによるアイルランドの併合と比喩的に重なるのであれば、併合は政略結婚で、その始まりには何の愛も含まれていない、とトロロープは示唆していることになる。

結婚したものの Glencora は Burgo のことをいつまでも忘れられないでいる。昔の恋を忘れられず二人の男性の間で揺れ動く、というこの構図はトロロープのほかの小説でもみることができ、例えば、*Castle Richmond* が挙げられる。この作品では、Lady Clara Desmond をめぐる Herbert Fitzgerald と

そのいとこ Owen Fitzgerald の三角関係が描かれている。Clara は、最初 Owen に恋をするが、その後、Herbert と婚約する。しかし、現実的には Herbert との結婚を決意していても、心情的には Owen のことを気にかける。Clara の置かれている状況は、婚約中と結婚中という違いがあるものの、Glencora の置かれている状況と同じである。

*Castle Richmond* の場合、Matthews-Kane が述べているように、<sup>2</sup> Herbert は、イングランドの影響を受けている併合後のアイルランドを象徴し、Owen は併合以前の、過去のゲール系アイルランドを象徴している。「ゲール、ノルマン、イングランド的な背景は、アイルランドを表すのに典型的なものではないが、アイルランドの混成的な性質を的確に表している」、<sup>3</sup> と Matthews-Kane が述べているが、ここでゲール、アングロ・アイリッシュ、イングランドなど様々な文化が混在したアイルランドを象徴しているのが Clara である。Clara は伯爵の娘で、一家は “[the Desmonds] had been kings once over those wild mountains” (5) と述べられているように、ゲール貴族の血統を持っている。また、母親の Lady Desmond はイングランド出身である。このように、Clara にはゲール貴族の血、Desmond というアングロ・アイリッシュ貴族の名前、イングランド出身の母親の血という風に、様々な要素が混ざっている。また、彼女の貧しい経済状況も貧しいアイルランドを象徴している。このように、三人はそれぞれ異なるアイルランドを象徴しているが、*Can You Forgive Her?* で Clara, Owen, Herbert にあたるのが Glencora, Burgo, Palliser である。

さて、Glencora の旧姓は M'Cluskie であるが、この名前は、アイルランドでトロロープを乗せた馬車の御者の名前である。「イングランド人が成熟した男らしい人物であるとしたら、アイルランド人は子供っぽく女性らしい人物であるに違いない」と Kiberd が述べているが、<sup>4</sup> Glencora も子供のイメージで描かれることがある。“[Palliser] would say a word of caution to her with reference to those childish ways” (1: 249) とあるように、子供じみた態度を夫に注意されることがある。Glencora のほかにも、Phineas や Owen にも子

供のイメージをもたせており、二人ともイングランドの女性との間に母と子のイメージが存在する。「女性であれ子供であれ、アイルランド人は自治ができない人物である」と述べられているように、<sup>5</sup> 女性らしさ、未成熟、子供らしさのイメージをつけることは、男性であり、成熟した大人であるイングランドが導き、保護してやらねばならないという主張を示唆している。そのため、アイルランドに女性や子供のイメージをもたせることは、併合を支持するトロロープの、植民地主義的かつ男性中心主義的な態度の表れといえる。

Burgo の姓は、Owen と同じく Fitzgerald であるが、Fitzgerald という名前もアイルランドによくみられる名前である。Owen はハンサムで魅力的であるが、酒飲みの上、浪費家で、結婚相手としては問題がある人物として描かれている。Burgo も “No more handsome man than Burgo Fitzgerald lived in his days” (1: 188) と魅力的な人物として描かれているが、その一方で、“He was now thirty, and for some years past had been known to be much worse than penniless; but still he lived on in the same circles, still slept softly and drank of the best [...]” (1: 187) と貧しく酒飲みな人物として描かれる。アイルランド人は貧しく、汚らしい酒飲みのイメージがステレオタイプとなっていることを想起すれば、Burgo には貧しいアイルランドのイメージが重ねられている、と考えられる。このように、Glencora と Burgo はアイルランドを象徴している。

Plantagenet Palliser は国会議員で、Burgo とは対照的な人物である。次のように描写されている。

He was not a brilliant man, [...] He was now listened to in the House, as the phrase goes; but he was listened to as a laborious man, who was in earnest in what he did, who got up his facts with accuracy, and who, dull though he be, was worthy of confidence. (1: 246)

Palliser は Burgo のように魅力的な人物ではないが、勤勉で信頼のできる人物として描かれている。その上、公爵の跡継ぎなので金持ちでもある。「ジョン・ブルが勤勉で信頼できる人間であるなら、パディは怠惰でへそ曲がりと考えられていた。前者が成熟して理性的であるなら、後者は気まぐれで感情的であるに違いない」<sup>6</sup> という分類は Palliser にも当てはまる。このように、Palliser はイングランドを象徴していることがわかる。

三角関係の構図や人物像の共通点をみると、Glencora をめぐる三角関係は Clara をめぐる三角関係を再現したもの、と考えられる。*Castle Richmond* では、「イギリスとの併合を続けることはアイルランドのためになる、ということを描くため、Lady Clara Desmond が象徴するアイルランドに、Owen Fitzgerald が象徴するゲール・アイルランドと Herbert Fitzgerald が象徴するアングロ・アイルランドの間で選択させている」、<sup>7</sup> と Matthews-Kane が述べているように、Clara とイングランドの影響を受けた Herbert の結婚には、アイルランドはイングランドとのつながり、つまりは併合を重要視するべきだ、というトロロープの考えが示されていた。*Castle Richmond* で示したのと同じ主張を、*Can You Forgive Her?* においても述べようとしているのではないだろうか。

今回、*Castle Richmond* 執筆から5年後に書かれた本作品でアイルランドを舞台にせず、イングランドを舞台にしたのは、アイルランドに関するテーマの小説がイングランドでは人気がないことも影響していると考えられる。トロロープの第1作目 *The Macdermots* と第2作目 *The Kellys* はアイルランドを舞台にした小説である。この2作品が出版されたころ、アイルランドでは飢饉が起きていた。飢饉によって、アイルランドでは、150万人近くの人口が減少した。Douglas が述べているように、飢饉は、現代でさえ、イギリスとアイルランドの関係に影を落とす出来事である。<sup>8</sup> その上、*The Kellys* が出版された1848年には、飢饉だけでなく、青年アイルランド党による蜂起も起こっていた。そのため、イングランドの読者がアイルランドやアイルランドを題材にした小説に共感することができなくとも不思議ではなく、出版社

に、“it is evident that readers do not like novels on Irish subjects as well as on others.” (*An Autobiography* 以下 *Autobiography* 78) と言われたように、イングランドでは売れ行きが悪かった。アイルランドでは好意的な批評もあったが、*The Kellys* 出版時の *New Monthly Magazine* 誌における批評では、「この奇妙で、野蛮で、創造力に富む人々の風変わりな言動に、現在共感することはできない」と述べられている。アイルランドをテーマにした3作品目の *Castle Richmond* はアイルランドの飢饉を題材にしたものであったため、出版社は“an English tale, on English life, with a clerical flavour” (*Autobiography* 142) と、イングランドを舞台にした作品を望んだ。そのため、*Castle Richmond* は一時中断され、架空の都市 Barsey を舞台にした Barseyshire series の第4作品目である *Framley Parsonage* (1861) が代わりに執筆されることになる。結局、*Castle Richmond* は *Framley Parsonage* 完成後に再開されることになる。こうして、アイルランドで執筆が開始された作品は、1860年にイングランドで完成することになる。このように、アイルランドテーマの人気のないことを知りながらも、この作品を執筆したのは、一般的なイングランド人とは異なり、自分の生活を良い方向へと変えてくれたアイルランドに対し、トロロープが愛情を抱いていたからである。自分の政治姿勢を鮮明に示しつつ、イギリス人を読者層としてターゲットに据えた小説として商業的な成功も目論んだ結果生まれたのが、*Can You Forgive Her?* であるとすれば、この作品は成功と言える。その後、*Phineas Finn* でもアイルランド出身の主人公からアイルランドの否定的な要素を取り除き、好感が持てるような人物に設定している。この設定が、自分の主張を犠牲にせず、なおかつ、小説の売り上げも意識してのことであるなら、トロロープが完璧なプロの小説家としてデビューしたと見て間違いはあるまい。

アイルランド要素を含んだこのシリーズは、内部にアイルランドを含んだ併合後の英国に喩えることができる。また、イングランドを舞台にした小説にアイルランド要素を取り込もうとするトロロープは、アイルランドを併合により取り込もうとしたイングランドと重なるところがある。そのため、

Palliser series はアイルランドへの共感を示してはいても、イングランド人の視点から書かれたものであることが窺える。

(2)

物語が始まる前に Glencora は Palliser と結婚しているが、Burgo のことを忘れられないでいる。“She knew well enough that [Burgo] was a man infinitely less worthy than her husband.” (2: 182) と述べられているように、Glencora は、理性的には Palliser の方が優れていること、夫を捨てて Burgo の愛人になる可能性はないことなどを認識しているが、心情的には Burgo のことを愛さずにはいられない。同様の態度が Clara にも見られたが、この点からも、イングランドは理性と、アイルランドは感情と結びついていることが窺える。Burgo に対する恋心は結婚を妨害するものなので、イングランドへの反抗につながる。

Glencora をあきらめられない Burgo は彼女を駆け落ちに誘う。Fegan が述べているように、Clara と Herbert の婚約に異議を唱える Owen の姿は併合解消を求めたダニエル・オコンネル (Daniel O'Connell 1775-1847) と重なる。<sup>10</sup> Owen と Burgo が重なるのであれば、Glencora の結婚に異議を唱える Burgo もまたアイルランドとイングランドの併合を解消しようとするオコンネルの姿と重ねることができる。そのため、Glencora が Burgo を選択することは、アイルランドがイングランドの影響から逃れて、独立の道を歩むことにつながる。普通なら、併合を支持するトロロープにとって、オコンネルと重なる Burgo は共感できない相手である。しかし、“Poor Burgo! All who had seen him since life had loved him and striven to cherish him. And with it all, to what a state had he come!” (1: 310) と述べたり、“Nobody now thought of saying much to reproach [Burgo]” (1: 305) と述べたりするなど、Burgo に同情的な態度をとっている。Owen に対しても、共感と称賛の気持ちを示していた。この二人に対するトロロープの態度にはアイルランドに対する共感が示されている。

Glencora の場合、Clara とは異なりすでに結婚している。そのため、Burgo を選択して駆け落ちすると、社会から追放されることになる。アイルランドがイングランドとの併合を解消してもよいことがない、ということをつロロープは示そうとしている。

アイルランドによるイングランドからの分離に対する反発は、*Phineas Finn* でも次のように述べられている。

England and Ireland had been apparently joined together by laws of nature so fixed, that even politicians liberal as was Mr. Monk,—liberal as was Mr. Turnbull,—could not trust themselves to think that disunion could be for the good for the Irish. They had taught themselves that it certainly could not be good for the English. (2: 180)

このまま関係が改善されなければ、最終的に併合の解消が予測されるが、分離が夫と妻双方によい結果を与えないというのならどうするべきか。「変える必要があるもの、変えることが可能なものがあるとすれば、それはアイルランドではなくアイルランドに対するイングランドの態度である」、<sup>11</sup> と Corbett が述べているが、結婚生活を双方にとって充実したものにするには、夫の態度が重要であるとつロロープもまた考えている。“I think that she might have learned to forget her early lover, or to look back upon it with a soft melancholy hardly amounting to regret, had her new lord been more tender in his ways with her.” (1: 249) と Glencora が Burgo を忘れられないのは Palliser の態度に責任があると述べている。最終的に Glencora が Burgo のことは諦め、夫の下に留まることを決意したのは、Palliser が妻を愛する気持ちを表し、閣僚になるという夢を犠牲にしてまで、妻を守ろうとしたためである。その後、新たなきずなを象徴する子供も生まれ、結婚は落ち着くことになる。

当時の批評の中には、「つロロープ氏は（Glencora に不幸な結末をもたら

すことから）尻込みした」とあるように、<sup>12</sup> Glencora が駆け落ちした場合に予想される暗い結末から尻込みした、と述べるものもある。Glencora に不幸な結末をもたらさなかった理由のひとつとして、Glencora に対する敬意や共感が考えられるが、これはアイルランドに対する敬意と共感につながる。ほかに、単なる悲劇を描くのではなく、アイルランドとイングランドの安定した関係を描こうとしたからではないだろうか。

(3)

このように、*Can You Forgive Her?* ではアイルランドの分離独立を阻止できた状況が象徴的に描かれているが、*Phineas Finn* では、アイルランドがイングランドの下を去った場合の状況が Laura の結婚で描かれている。Laura の場合、Glencora と同じく愛のない結婚するが、Laura は自分の意志でお金を目当てに結婚した、という点で異なる。彼女の結婚は、夫、妻、双方に経済的金銭的利益をもたらすものと考えられていたが、結婚後は不満をもつ Laura の反抗に夫の Kennedy は頭を悩ませることになる。Laura もまた結婚前の恋を忘れられず苦しむが、夫は妻の気持ちを理解することもなく、いや理解しようともせず、ただただ妻の恋心にも嫉妬するだけだった。Kennedy は妻の従順は当然だと思っており、妻が自分に従わないことを嘆く。Glencora の場合とは異なり、二人の仲は改善されず、Laura の場合は家を出て、英国の法律が及ばない外国へと去る。別居の結果、Laura は海外で世捨て人のように世間から分断されて生きていかなければならなくなり、Kennedy はまだ50代だというのに6、70代に見えるほど老け、最後まで妻が不満をもつ理由を全く理解できぬまま死亡する。この結果には、一度結婚した以上はいくら夫婦仲が悪くとも、分離はイングランド、アイルランド双方にとってよい結果を与えないというトロロープの、もしこう言っただけならば保守的な考えが示されている。この結婚が失敗した理由は、Laura の Phineas に対する感情が Laura の想像以上に強く、夫の態度が変化しなかったためである。どちらも結婚前の男性を忘れることができない原因は夫の態度にあっ

た。このことからトロロープが夫、つまりイングランドの態度が重要であると考えていることが窺える。

*Castle Richmond* では、Clara の態度が変化したのは、Herbert の困難に直面したからであって、Herbert の態度が変化したとか彼が何らかの感情を示したからではない。そのため、1872年に書かれた、*Dublin Review* 誌における批評のように、「Herbertとその花嫁の、安定し、幸福で、財力のある、平凡な未来には関心がない。だが、放浪するOwenの後について行く」、<sup>13</sup> と幸福な結婚よりもOwenのほうに関心が寄せられる。その結果、HerbertとClaraの経済的にも情緒的にも充実した結婚は、トロロープが望む併合の姿と重なるのに、一見したところ揺るぎがないかに見える夫婦のきずなもOwenの存在により弱められていた。今回は、*Athenaeum* 誌で、「Palliserは寛大にふるまった。そのため、気まぐれで分別がないが魅力的な妻の愛情をついに勝ち取ったとき、読者の共感も得た」と述べられているように、<sup>14</sup> Palliserに共感させることに成功している。今回は幸福な併合という主張を弱めることなく描くことに成功している。前回の失敗を活かしている点でも小説家としてのプロ意識が窺える。

その後も、Palliser夫妻はその後もほかの作品にも姿を現す。トロロープが夫妻の結婚において、アイルランドとイングランドの関係を表そうとしているのであれば、このPalliser seriesは、政治や単なる結婚だけでなく、時が経つにつれイギリス人の視点からすれば成熟を遂げたと映るアイルランドとイングランドの関係も追跡したもの、と言える。

## 第2章 *Phineas Finn*

### (1)

*Phineas Finn* は、1866～7年における選挙法改正の時期を背景とした政治小説である。そのため、政界における党派心の問題点、選挙や政治における人脈の重要性、女性の政治への影響力など政治に関する出来事が詳しく描写されている。

この小説は、国会議員となった主人公 Phineas が政界で成功するが、最終的には辞職し、故郷へ帰った後、幼なじみの女性と結婚するという物語となっている。政界で出世するため、自分の意思に反しても、自分の所属する党を支持することを Phineas は要求される。そのため、出世のためなら自分の良心を偽ってもあるいは裏切ってもよいのか、という道徳的な問題で悩むことになる。この良心と社会での成功という問題は、愛を重視する結婚と社会での成功を重視する結婚との選択というトロロープの小説に繰り返し現れるテーマと重なり合う。

この小説で最も特筆すべき点は、主人公がアイルランド生まれに設定されていることである。トロロープとアイルランドの関係を考えれば、主人公がアイルランド出身であっても特に不思議ではないように思われる。しかし、19世紀ヴィクトリア朝において、アイルランドが文学作品や雑誌などに登場するとき、肯定的イメージで描かれる場合もあったが、アイルランド人は不潔で酒飲みの男性、という否定的イメージのほうが支配的であった。トロロープもそのことを意識していて、アイルランド生まれの人物を主人公にしながら本を成功させることの難しさをトロロープは自伝で次のように語っている。“There was nothing to be gained by the peculiarity, and there was an added difficulty in obtaining sympathy and affection for a politician belonging to a nationality whose politics are not respected in England” (318)。このように、アイルランド出身の主人公にすることで得られるものは何もなく、読者の共感を得ることが難しくなると考えているにもかかわらず、Phineas をアイルランド人に設定したのはなぜだろうか。

*Phineas Finn* が書かれた時期はフィニアン (the Fenians) が活動していた時期でもある。フィニアンは1858年、アイルランドとアメリカにおいてアイルランド独立を目標に結成された秘密結社である。1867年にダブリン各地で蜂起するが、運動は失敗に終わった。しかし、アイルランドにおけるその後の民族運動の形態に力を与えただけでなく、イギリス国内におけるアイルランド政策にも大きな影響を与えていくことになる。この頃、フィニアンに反

応してアイルランドとイングランドの関係はいかにあるべきかという意見がいくつか登場している。例えば、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill 1806-73) は「イングランドとアイルランド ('England and Ireland', 1868)」において併合を継続させることの利、そのためにはどうすべきかについて論じている。マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-88) も『ケルト文学の研究 (*On the Study of Celtic Literature*, 1867)』において、男性的なサクソンを補完する存在として女性的なケルトの精神性が必要だと述べている。<sup>15</sup> 彼らの意見は併合存続が前提となっているが、それはトロロープにも当てはまる。

トロロープもまた次のようにフィニアンに反対する意見を述べている。“It had been all very well to put down Fenianism, [...] and everything that had been put down in Ireland in the way of rebellion for the last seventy-five years” (2: 180). このように、アイルランドの独立を望むフィニアンに対してトロロープもまた反対の意を示している。トロロープはアイルランドに対して愛情を抱いているが、アイルランドの独立を望むことは決してなかった。後に、1879年からアイルランドで土地戦争が始まり、土地をめぐる地主層と農民層が対立することになる。このときもトロロープは小説内において土地をめぐる争いについて描き、反乱的な農民に対して激しい反感を示している。今回の場合も、わざわざ主人公をアイルランド出身に設定したのは、ミルたちのようにフィニアンを意識してのことではないだろうか。「台頭してきたフィニアンの活動に応じて、英国とアイルランドの併合継続に賛成する意見を述べたいと、トロロープは考えている」と Dougherty が述べているように、<sup>16</sup> 併合が存続するために、アイルランドとイングランドの関係はいかにあるべきかという考えをトロロープは示したかったのではないだろうか。

Dougherty が述べているように、併合はイングランドを花婿、アイルランドを花嫁とする結婚の比喩で描かれてきた。<sup>17</sup> *Phineas Finn* においても、イングランドを夫、アイルランドを妻とする比喩が用いられている。Phineas が友人に政界へ誘われる場面を、「まさに、結婚の申し込みのように読める

場面]、と Dougherty が求婚の場面に喩えているように、<sup>18</sup> Phineas と政党の関係は一種の結婚として描かれている。Phineas の党との関係は Lady Laura の結婚と対比されていると McMaster が述べているように、<sup>19</sup> Phineas と党の関係は、Lady Laura と夫の関係に対応している。Phineas の党との関係、Laura の結婚は失敗した結婚として描かれている。「*Phineas Finn* における、うまくいかない結婚は、明らかに、イングランドとアイルランドの不幸な併合を模して作られている」、と Corbett が述べているように、<sup>20</sup> 作中の失敗した結婚は作品発表時の併合の姿と様々な点で重ねることができる。*Can You Forgive Her?* では恋愛と結婚を描くことでイングランドとアイルランドの関係を述べようとしていた。今作も結婚を通して、アイルランドとイングランドの関係がどうあるべきか描こうとしている。さらに、今作はアイルランド出身の青年が主人公で、アイルランドとイングランドの間で揺れ動く。Glencora の場合、Burgo への感情がアイルランドに対する共感を表していたが、Phineas の場合はアイルランドへの帰属性という形で表されている。前作では結婚という比喩で描かれていただけのアイルランドとイングランドの関係が、今作では Phineas の帰属性によりさらに具体的になっている。両者がどのような関係にあることをトロロープは望んでいるのかを考察していきたい。

(2)

まず、トロロープが主人公をどのように描いているのかを分析していきたい。主人公 Phineas Finn は、Dr. Finn の長男として中流階級に生まれる。彼の父はカトリックであるが、母はプロテスタントである。アイルランドはカトリック、イングランドはプロテスタントと結び付けられて考えられてきた。<sup>21</sup> カトリック教徒とプロテスタント教徒の子供であるということは、Phineas の存在自体がアイルランドとイングランドの結婚、つまり併合の産物であるということを示している。Phineas はカトリック教徒でありながら、プロテスタントの性質ももち合わせている。

Phineas はプロテスタント系のトリニティ大学で教育を受けるが、父の勧めるダブリンではなくロンドンで成功したいと望む。その後、友人の提案を受けて議員になることを夢見るようになる。“He had taken up politics with the express desire of getting his foot upon a rung of the ladder of promotion [...]” (2: 44) とあるように、Phineas には議員として成功し、出世したいという野心がある。「アイルランドのプロテスタント教徒は出世することしか考えていないように思われる」とイエイツ (William Butler Yeats 1865-1939) が述べているが、<sup>22</sup> 立身出世を望む性格、教育状況だけをみれば、Phineas はプロテスタント寄りの性質をしている。それでもカトリック教徒に設定してあるのは、アイルランド人であるというイメージをつけるためであろう。

19世紀のアイルランドは少数のプロテスタントが多数のカトリックを支配しているという状況にあった。当時の移民の1人にジャスティン・マッカーシー (Justin McCarthy 1830-1912) という人物がいる。彼は、カトリック教徒でナショナリストであったが、新聞業界で大きな成功を収めた。Phineas の場合も同様に、カトリック教徒であることは、アイルランドでの生活だけでなく、ロンドンの生活においても何の妨げにもならなかった。

当時、アイルランドからイングランドへの移民は多数存在していた。アイルランドはイギリスとの併合のために、またヨーロッパ系白人であるということによってイギリスの支配下にあるインド人たちはつけない職業でも選択することができた。中流階級のアイルランド人の中には、ロンドンで医師、弁護士、ジャーナリスト、国会議員などの職につくものもいた。そのため、アイルランド人の Phineas がロンドンへ出てきて国会議員になることができるのも併合という状況が存在したためである。アイルランドからイングランドでの成功を考えて移住していった人たちのことを、歴史家の R. F. Foster は、*Paddy & Punch* において、「成功を求めるアイルランド人 (micks on the make)」と呼んでいる。<sup>23</sup> Phineas はまさにその “micks on the make” である。主人公 Phineas の原型となる人物像として、トロロープと同じハロー (Harrow)

校出身で友人でもあるウィリアム・グレゴリー（William Henry Gregory 1817-92）、議員として Phineas と同じ役職についていたチチェスター・パーキンソン・フォーテスキュー（Chichester Parkinson-Portescue 1823-98）、Phineas と同じ中流階級出身でロンドン社会に受け入れられたジョン・ポープ・ヘネシー（John Pope Hennessy 1834-91）などが考えられているが、彼らはみなアイルランド出身の議員でアイルランドのために尽力したものである。<sup>24</sup>

Phineas は、カトリックとプロテスタント、アイルランドとイングランドというふたつの文化を知る人物である。この立場は、トロローブにも重ねることができる。トロローブはイングランド出身であるが、アイルランドを訪れた結果、Phineas と同様に、アイルランドとイングランド、ふたつの文化を知る人物となった。トロローブと Phineas には、ほかにも共通する部分がある。ロンドンにおける借金生活、国会議員になることへの憧れ、トロローブが議員に立候補して敗北したときの経験などが Phineas にも反映されている。重要な共通点は、トロローブの成功と Phineas の存在は併合と切り離すことができないということである。トロローブは自分が併合から恩恵を受けたように、Phineas に対しても併合が有利に働くと考えている。「イングランド（とイングランド女性）は Phineas を成功させた。つまり、Phineas はトロローブが望む両国の理想的な関係を象徴している」、と Foster が述べているように、<sup>25</sup> Phineas の成功は、併合はイングランドだけではなく、アイルランドにも利益をもたらす、という証明になり、併合の正当化につながる。そのため、Phineas の成功は、併合を支持するトロローブにとって好ましいものといえる。

結婚の比喻にみることができるように、イングランドとの関わりにおいてアイルランドは女性的なポジションに置かれることがある。そのため、Phineas もアイルランド生まれであるがゆえに、男性でありながら、女性としての立場に置かれることがある。<sup>26</sup> このことは、党との関係だけでなく、Laura との関係にも当てはまる。イギリスの政界にあかるくない Phineas は

政治についてよく知っている Laura の “political pupil” (1: 76) となり、彼女の指導を受けることになる。男性が女性を指導するのが小説でもよく見られるお決まりのパターンであるが、「従来の性別における役割が逆転している」と McMaster が述べているように、<sup>27</sup> 男性である Phineas のほうが導かれる立場にある。Phineas 自身、この関係を受け入れ、彼女を助言者である Mentor、自分を弟子である Telemachus に喩えている。Phineas が女性の立場に置かれる例はほかにもみることができ、物語の後半において、Phineas は Madame Goesler という女性から求婚される。

政治的に成熟しているイングランドと未熟なアイルランドという関係は Phineas と同僚の関係にも表れている。物語に登場する自由党の閣僚たちは、年長者で政治経験が豊富な者が多い。例えば、その中で Plantagenet Palliser は閣僚の中では比較的若い、すでに大蔵大臣 (Chancellor of the Exchequer) を経験している。そのため、25歳で議員となった Phineas の若さと経験のなさが浮き彫りになる。“If I go into Parliament, I shall go there as a sound Liberal—not to support a party, but to do the best I can for the country.” (1: 14) と党の利益より自分の考えを優先させて行動するような発言をして同僚の気分を害しているが、このこともまた、Phineas がイングランド政界における党派心という問題点をよく理解していない未熟さを示している。

Phineas は Laura や党と関わるとき子供のイメージを伴うこともある。McMaster は Phineas と Laura の関係は擬似母子関係に近いと指摘しているが、<sup>28</sup> ともあれ二人の関係はとても親密なものとして描かれている。Laura は Phineas が政界で成功できるよう全力を尽くす。例えば、Phineas が今まで立候補していた選挙区で当選しにくい状況になったときも、自分の父が影響力を持っている選挙区から立候補できるよう手配してくれる。彼女の Phineas への熱意は偶像崇拜の域にまで達していると夫に非難され、夫との不和の一因になるほど強いものとして描かれている。Phineas の場合も、“Phineas liked being called an impetuous Irish boy, and came close to her, sitting where he could look up into her face [...]” (1: 75) とあるように、子ども扱

いされることに不満を持っていないどころか自ら進んで子供のような態度をとることがある。Phineas は何かあると報告，または相談のために Laura を訪れるほど彼女を頼りにしている。

また，“I look upon you, you know, as in some sort my own child.” (2: 274) と同僚にも子ども扱われている。Phineas Finn には，小説終了時から約3年後を舞台とした *Phineas Redux* という作品があるが，ここでも子供としての Phineas のイメージが存在し続けている。Phineas の Laura や同僚との親密な関係は，アイルランドとイングランドに関係におけるイングランド側から見て親密な一側面を示している。また，女性らしさ，未成熟，子供らしさのイメージをつけることで，男性であり，成熟した大人であるイングランドが導き，保護してやらねばならないという主張を示唆している。また，Phineas が政界に興味をもったのは，友人による影響である。Letters to the *Examiner*（以下 *Letters*）において，“[The Irish] are [...] the more inclined to follow implicitly the guidance of a master, and to submit in all things to commands” (98) と述べているように，アイルランドの大衆は指導者に影響されやすい，とトロロープは考えている。Phineas のこの態度には，トロロープの考えが反映されていると考えられる。アイルランドの大衆に影響されやすい存在として描くことに関して，King は，「アイルランド人は無力で，カトリック聖職者の影響を受けやすいので，より責任感のあるイギリス政府のような存在が実施する強い政策を必要とする，という植民地主義的主張」，と述べている。<sup>29</sup> King が述べているように，Phineas を影響されやすく，子供や女性のように，導き，保護してやらねばならない存在として描くことは，イングランドのような存在が導かなければならない，という考えにつながる。そのため，Phineas がもつ子供や女性のイメージは，併合を支持するトロロープの，植民地主義的な態度の表れといえる。

当時の『パンチ』誌などの挿絵をみると，イングランドに反抗するものは男性，イングランドに協力的なアイルランドは女性の姿で描かれていた。フィニアンが活動していたとき，フィニアンはサルや蛮人のような男性の姿で描

かれ、その一方でイングランド側のアイルランドは女性の姿で描かれていた。Phineas が女性のイメージをもつことは、彼がイングランドと友好的な関係にあることを示すだけでなく、男性的、暴力的、こう言ってよければ暴力的なフィニアン（Finnian）のイメージから切り離すことになる。トロロープは Phineas を反抗的なアイルランドのイメージから切り離そうと努力している。この試みは Phineas の性質や外見に関する設定においてもみることができる。Phineas は当時の典型的なアイルランド像として述べられていた不潔でも怠け者でもなく、飲酒癖もない。フィニアンは古代アイルランドのフィアナ騎士団（Finnian）に起源を持つ。騎士団は Finn MacCool によって率いられていた。Finn という名前は、フィニアンを連想させるが、Phineas には攻撃的なところはない。好きな女性をめぐって決闘したときもわざと弾をはずし、それだけではなく強盗から同僚を救出するなど紳土的、騎士的イメージが付与されている。強盗を捕らえた彼は友人の女性からパラディン（Paladin）と賞賛されている。外見は彼を好きな女性が “he was as handsome as a god.” (1: 136) と賞するほどである。また, “there was, too, a look of breeding about him which had come to him, no doubt, from the royal Finns of old, [...]” (1: 136) と描写されているように、野蛮さとはかけ離れた、高貴なケルト人のイメージが付け加えられている。

Phineas はみなに好かれる人物として次のように描かれている。“It soon came to be admitted by all who knew Phineas Finn that he had a peculiar power of making himself agreeable which no one knew how to analyse or define. [...] It was simply his nature to be pleasant” (1: 118). このような感じのよさに顔のよさも加わり、彼はどの家においても歓迎される。公爵の開くガーデンパーティーにも招待されることになる。このようにトロロープは Phineas を社交界に受け入れることのできる人物として設定し、アイルランド生まれであることが不利に働かないよう非常に好意的に描いている。ここに挙げた設定が、イングランド読者に与える影響を考えてのことであるなら、これは読者によく言えば配慮する、悪く言えば迎合する小説家としての態度といえる。Can

*you Forgive Her?* でみたように、アイルランドに関してイギリスを代弁しイギリスの利益を擁護しつつ、小説も成功させる、という意識が、Phineas の造形にはみられる。

また、「Phineas の流暢さ、魅力、育ちの良さは、トロロープがアイルランドで愛する全てを象徴する」、と Foster が述べているように、<sup>30</sup> Phineas の魅力や高貴なイメージが、トロロープが賞賛するアイルランド要素であるなら、Phineas には、トロロープのアイルランドに対する賞賛も込められていることになる。

このように、Phineas は、フォーテスキューやポープ・ヘネシーなど実際の人物の経歴を参考にして造られているが、ほかにも、トロロープ自身の姿、彼のアイルランドへの好意、併合支持の態度、読者への配慮など、様々な立場が反映されていることがわかる。

(3)

Phineas は党内で順調に出世していくが、役職を得るまでには至らなかった。当時、国会議員は名誉職で役職のない議員は給料を得ることがなかった。金の心配をする必要のない地主たちと違って、役職を得ることは Phineas にとって死活問題に等しかった。役職を得るためには、自分の所属する党が優位に立たなければならない。そのためには、自分の意に沿わない法案にも賛成しなければならないことがある。党の一員であるというのに、自分の意見を持つことは許されない。議員になる前に、Phineas は次のように警告されていた。

[The] party [...] required that the candidate should be a safe man, one who would support 'the party,—not a Cantankerous, red-hot semi-fenian, running about to meetings at the Rotunda, and such-like, with views of his own about tenant right and the Irish Church. (1: 6)

このように、党の利益を優先し、党を支持する議員こそが必要とされ、自分の意見を主張する人間は望まれていない。なおかつ党を支持しない人間は、フィニアンなどの反乱分子と結び付けられている。フィニアンがアイルランドとの併合にとって邪魔な存在であるように、Phineas が党の方針に反する行動をとれば非難されることになる。しかし、Phineas は、フィニアンと結び付けて考えられている小作人の権利を支持することになる。

作品では、アイルランドとイングランドの間で揺れ動く、Phineas のアイデンティティの問題についても描かれている。Phineas は帰属先が二つに分裂している。“He felt that he had two identities,—that he was, as it were two separate persons, [...]” (1: 330) とあるように、彼のアイデンティティはイングランドとアイルランドの間で揺れ動いている。その揺らぎは、アイルランド、イングランド両方の選挙区から立候補していることにも反映されている。しかし、“his Irish birth and Irish connection had brought this misfortune of his country so closely home to him that he found the task of extricating himself from it to be impossible” (2: 340) と述べられているように、アイルランド人であるという帰属意識を捨て去ることはできなかった。アイルランドに関する問題に関わる場合、Phineas は党の利益よりも自分の意思を優先させる傾向にある。たとえば、同僚の Monk がアイルランドの小作人の権利を擁護する法案を提出したとき、その法案は党の方針に反するものであったが、Phineas はアイルランドのために Monk を支持する。友人や同僚に説得されようと、自分の党内での地位を危険にさらそうとも自分の意思を貫き通すことを彼は選択する。後にも、アイルランドのためにアイルランド国教会廃止に熱心に取り組むが、法案に対して反対の姿勢をとる党とうまくなじめないでいる。こうした点にもいくらイングランドに溶け込んでいようとも Phineas の帰属意識はアイルランドに傾斜していることがわかる。

Phineas には帰属意識がふたつあることは、彼の恋愛でも描かれる。

[N]ow that he was in Ireland, he thought that he did love dear Mary very

dearly. He felt that he had two identities,—that he was, as it were, two separate persons, —that he could, without any real faithlessness, be much in love with Violet Effingham [...] in England, and also warmly attached to dear little Mary Flood Jones as an Irishman of Killaloe. (1.330)

イングランドではイングランドの女性を、アイルランドではアイルランドの女性を愛すると描くことで、Phineas はアイルランドとイングランド、場所が変わればアイデンティティも変化する人物として描かれている。

アイルランド的なものを捨てることができない Phineas の姿は、Burgo への恋心を完全に消すことができない Glencora の姿に重なる。Phineas にとってのアイルランドが、Glencora にとっての Burgo に当たる。しかし、夫の下に留まる事を選択した Glencora と異なり、アイルランドを選択した Phineas は、Laura と同じく Glencora の失敗例なのである。1 作目では併合の成功例が中心に描かれていたのに対し、Phineas を主人公とした小説では、併合の失敗例の方が中心に描かれている。Phineas が主人公の作品の方がアイルランドとイングランドの不平等な関係をよく表しており、現在の併合の状況をより正確に表したものといえる。

とはいえ、成功した併合として描かれている Glencora の結婚にも不安の種がないわけではない。Glencora は Palliser の下に留まることを選択したが、Burgo のことを完全に忘れたわけではない。これ以外にもシリーズ 5 作目の *The Prime Minister* では、Lopez という人物が登場するが、Burgo を連想させるため好意を抱く。夫の注意を聞かず Lopez に関わったため、結果的に、夫の政権に問題をもたらすことになる。このように、Glencora が Burgo つまりアイルランド側に傾くとき、Palliser つまりイングランド側に問題が生じる。シリーズ最後の作品でも、結婚してから約 20 年近く経つというのに、Burgo とほかの男性の姿を重ねている。Burgo を切り離せない Glencora の姿は、アイルランドへの帰属性を決して切り離すことができない Phineas の姿と重なる。Burgo に対する感情が消えず、問題を起こす原因になる、という

ことは、結婚として表象される併合には問題の火種が常にくすぶり続けていることになる。トロロープは併合を支持しているが、併合の不安定さを表わすことも忘れていない。

*Phineas Finn* では、イングランドとアイルランド、ふたつのアイデンティティは両立しないもので、Phineas のアイルランド要素はロンドンでの生活を疎外するものとして描かれる。Phineas はロンドンにおいて、従順で忠実であること、アイルランド要素を捨て去ることを要求される。トロロープがアイルランドの生活に適應する際、イングランド要素を捨てる必要はなかった。この違いは、イングランドとアイルランドの不平等な関係を反映している。トロロープは自分が成功した場所としてアイルランドに愛情を抱き、アイルランドの苦境に共感的関心を示しているが、その一方でアイルランドの幸せはイングランドとの併合にあると考え、アイルランドの独立を望まなかった。最終的にイギリス人の立場からアイルランドを描いている。このように、トロロープがいくらアイルランドに共感しようとも、所詮イングランド人の域を出るものではないことがわかる。

ふたつの作品では、イングランドとアイルランドの併合が結婚という比喻により表されている。トロロープはアイルランドを成熟した男性ではなく、女性として描いている。この点にはトロロープの男性的植民地主義的な態度がみられる。Lonergan が述べているように、<sup>31</sup> Phineas が堅苦しく、主人公としては面白みのない Plantagenet Palliser を補完するための存在として創造されたのであれば、トロロープはイングランドを補完する役割をアイルランドに期待していることがわかる。シリーズ後半の *The Prime Minister* では、イングランドの貴族である Palliser が中心となるため、Phineas はあまり目立たない周辺人物としてしか登場しない。この Palliser と Phineas の関係は中心のイングランドと周辺のアイルランドという関係を反映している。このように、作品中のイングランドとアイルランドの関係は、両者の宗主国とその植民地という関係をよく表したものである、と言える。

次回、シリーズの残りの作品である、*The Eustace Diamonds, Phineas Redux,*

*The Prime Minister, The Duke's Children* について述べる。

注

この論文で用いたトロロープの作品は、以下の版による。

Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.

———, *Can You Forgive Her?*. Ed. Andrew Swarbrick. New York: Oxford UP, 1999.

———, *Phineas Finn*. Ed. Jacques Berthoud. New York: Oxford UP, 1999.

1. Patrick Lonergan. “The Representation of Phineas Finn: Anthony Trollope’s Palliser Series and Victorian Ireland.” *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004), p. 156.
2. Bridget Matthews-Kane. “Love’s Labour’s Lost: Romantic Allegory in Trollope’s *Castle Richmond*.” *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004), p. 118.
3. Matthews-Kane *op. cit.*, p. 119.
4. Declan Kiberd. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. (London: Vintage, 1995), p. 30.
5. Kiberd *op. cit.*, p. 30.
6. Kiberd *op. cit.*, p. 30.
7. Matthews-Kane *op. cit.*, p. 118.
8. Roy Douglas. Liam Harte. Jim O’Hara. *Drawing Conclusions : A Cartoon History of Anglo-Irish Relations 1798-1998*. (Belfast: The Blackstaff P, 1998), p. 51.
9. Donald Smalley Ed. *Trollope: The Critical Heritage* (London: Routledge & K. Paul; New York: Barnes & Nobles, 1985), p. 555.
10. Melissa Fegan. *Literature and the Irish Famine, 1845-1919*. (Oxford: Clarendon P, 2002), p. 127-8.
11. Mary Jean Corbett. *Allegories of Union in Irish and English writing, 1790-1870: Politics, History, and the Family from Edgeworth to Arnold*. (Cambridge: Cambridge UP, 2000), p. 150
12. Smalley *op. cit.*, p. 247.
13. Smalley *op. cit.*, p. 112.
14. Smalley *op. cit.*, p. 242.
15. アーノルドはケルトの必要性について次のように述べている。

Now, then, is the moment for the greater delicacy and spirituality of the Celtic

- peoples who are blended with us, if it be but wisely directed, to make itself prized and honoured. (Introduction to *On the Study of Celtic Literature* 390)
16. Jane Elizabeth Dougherty. "A Man of the House: Phineas Finn and the Quest for Irish Membership." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 158.
  17. Jane Elizabeth Dougherty. "Mr and Mrs England: the Act of Union as national marriage." *Acts of Union The Causes, contexts, and consequences of the Act of Union*. Ed. Daire Elizabeth and Kevin Whelan. (Dublin: Four Courts Press, 2001), p. 202.
  18. Dougherty 'A Man of the House' *op. cit.*, p. 161.
  19. Juliet McMaster. *Trollope's Palliser Novels: Theme and Pattern*. (New York: Oxford, 1978), p. 39.
  20. Corbett *op. cit.*, p. 148.
  21. 例えば、Nie はアイルランドとイングランドのイメージに関して次のように述べている。  

For the objectified Irishman, Paddy, was always a peasant, a Catholic, and a Celt, while John Bull was Anglo-Saxon, Protestant, and (usually) middle-class (Michael de Nie. 'Britania's Sick Sister: Irish Identity and the British Press, 1798-1882' in *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 174.)
  22. W. B. Yeats. *Autobiographies*. Hon-no-tomosya, 1990. Reprint Originally Published: (London: Macmillan, 1926), p. 126.
  23. R. F. Foster. *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History*. (Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995)
  24. John Halperin. *Trollope and Politics: A Study of the Pallisers and Others*. London: Macmillan, 1977. 参考
  25. R. F. Foster. *The Irish Story: Telling Tales and Making it up*. (New York: Oxford, 2004), p. 137.
  26. このように、男性でありながら女性要素をもち合わせるからこそが Phineas の最も注目すべきアイルランド的な性質だと Dougherty は指摘している。"[It] is Phineas's gender hybridity, itself produced by the gender position of his country, which is his most noticeably 'Irish' quality" (Dougherty 'A Man of the House' *op. cit.*, p. 162.).
  27. McMaster *op. cit.*, p. 52.

28. *Ibid.*, p. 54.
29. Carla King, Neil McCaw. ‘Some Victorian Novels and the Irish Land Question.’ *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 219.
30. Foster *The Irish Story op. cit.*, p. 137.
31. Lonergan *op. cit.*, p. 155.

### 参 考 文 献

この論文に関しては、トロロープの作品による引用は、以下のトロロープの作品を用いた。

#### The Primary Sources

- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.
- . Trollope’s Letters to the *Examiner*. Ed. Helen Garlinghouse King. Princeton University Library Chronicle 26(2) (1965): 71-101.
- . *Castle Richmond*. Ed. David Skilton. London: Trollope Society, 1994.
- , *Phineas Finn*. Ed. Jacques Berthoud. New York: Oxford UP, 1999.
- , *Phineas Redux*. Ed. John C. Whale. New York: Oxford UP, 2000.

#### The Second Sources

- Arnold, Matthew. *Lectures and Essays in Criticism* (The Complete Prose Works of Matthew Arnold, Vol. 3) Ed. R. H. Super. Ann Arbor: Michigan UP, 1980.
- Corbett, Mary Jean. *Allegories of Union in Irish and English Writing, 1790-1870: Politics, History, and the Family from Edgeworth to Arnold*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Dougherty, Jane Elizabeth. “An Angel in the House: The Act of Union and Anthony Trollope’s Irish Hero” *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004): 133-145.
- , “A Man of the House: Phineas Finn and the Quest for Irish Membership.” *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Douglas, Roy. Harte, Liam. O’Hara, Jim. *Drawing Conclusions: A Cartoon History of Anglo-Irish Relations 1798-1998*. Belfast: The Blackstaff P, 1998.

- Fegan, Melissa. *Literature and the Irish Famine, 1845-1919*. Oxford: Clarendon P, 2002.
- Foster, R. F. *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995.
- . *The Irish Story: Telling Tales and Making it up*. New York: Oxford, 2004.
- Halperin, John. *Trollope and Politics: A Study of the Pallisers and Others*. London: Macmillan, 1977.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. London: Vintage, 1995.
- King, Carla. McCaw, Neil. 'Some Victorian Novels and the Irish Land Question.' *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004. 210-227.
- Loneragan, Patrick. "The Representation of Phineas Finn: Anthony Trollope's Palliser Series and Victorian Ireland." *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004): 147-158.
- McMaster, Juliet. *Trollope's Palliser Novels: Theme and Pattern*. New York: Oxford, 1978.
- Matthews-Kane, Bridget. "Love's Labour's Lost: Romantic Allegory in Trollope's *Castle Richmond*." *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004): 117-131.
- Nie, Michael de. 'Britania's Sick Sister: Irish Identity and the British Press, 1798-1882' in *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Smalley, Donald Ed. *Trollope: The Critical Heritage*. London: Routledge & K. Paul; New York: Barnes & Nobles, 1985.
- Yeats, W. B. *Autobiographies*. Hon-no-tomosya, 1990. Reprint Originally Published: London: Macmillan, 1926.

## Anthony Trollope and Ireland: Ireland in Trollope's Palliser Series (1)

FUJII, Ayako

This paper is chiefly concerned with Trollope's view about Ireland in the Palliser series. Anthony Trollope (1815–82) was a novelist in the Victorian age. He dealt with a wide range of subjects and was a highly fertile writer of fiction, writing 48 novels, 43 short stories, 5 travel books, and so on. He is famous for the Chronicles of Barsetshire and the Palliser series of novels. He also wrote novels with an Irish theme.

Ireland was a significant place for Trollope. His life changed for the better in Ireland, and his sympathy for Ireland continued for his entire life. His experience in Ireland had a great influence on his life and his novels.

The Palliser series consists of six novels: *Can You Forgive Her?* (1865), *Phineas Finn* (1869), *The Eustace Diamonds* (1873), *Phineas Redux* (1874), *The Prime Minister* (1876), and *The Duke's Children* (1880). In these novels he depicts the married life of Plantagenet and Glencora Palliser, who are the central figures of the Palliser series. In these novels, Irish elements are noticeable. In *Phineas Finn* and *Phineas Redux*, the hero is an Irishman. The Union between England and Ireland has been depicted as an image of marriage, and Trollope uses this metaphor in the novels. He compares the Union to not only Mr. and Mrs. Palliser's marriage but to all the marriages in the Palliser series. Thus, Trollope describes his view about what the Union should be like.

*Can You Forgive Her?* is the first novel of the Palliser series. It is the first time that Glencora and Plantagenet Palliser appear as major characters. Before the beginning of the story Glencora has already married Plantagenet but she still loves Burgo Fitzgerald, her first love. She wavers between the two men.

A similar situation is seen in Trollope's *Castle Richmond* (1860). In this story, Clara Desmond wavers between Herbert Fitzgerald and Owen Fitzgerald. Trollope expresses his view about the Union in this love triangle. In *Can You*

*Forgive Her?*, Trollope does the same thing as in *Castle Richmond*. Trollope tries to express his opinion about the Union through the marriage of Plantagenet and Glencora Palliser.

Glencora is tempted to elope with Burgo but she decides not to leave her husband. Her decision reflects Trollope's attitude. Trollope thinks that it would be disastrous for both England and Ireland to break the Union. This is also shown in the marriage of Mr. Kennedy and Laura. Kennedy's tyrannical attitude towards his wife causes her to rebel, but he can never understand the reason why she does not obey him. That is also true of the metaphorical marriage between England and Ireland. Eventually, Laura leaves her husband, and their marriage ends in disastrous failure. Their situation anticipates a dark future for the Union. Unlike Kennedy, Mr. Palliser changes his attitude toward his wife and this results in the success of their marriage. Trollope thinks that it is a husband's attitude toward his wife that should be changed in order to make the Union successful.

*Phineas Finn* is a political novel, which was written by Anthony Trollope between 1866 and 1867, when the Second Reform Bill was being debated. As Trollope says in his *Autobiography*, he had difficulty obtaining readers' sympathy to Irish heroes. But Trollope nevertheless made his hero Irish. To gain the reader's sympathy, Phineas does not fit the negative stereotypes of the Irish at the time. He is depicted as a gentleman and receives an exceptionally favorable response from his friends.

When the novel was written, the Fenians, which is a secret society with the object of independence for Ireland, was active. As Dougherty points out, Trollope wrote *Phineas Finn* as his reaction against the Fenians.

Trollope compares the relationship between Phineas and the Liberal Party to marriage. Phineas's relationship with the Party parallels the unfortunate marriages between Mr. and Mrs. Kennedy and between England and Ireland. In various marriages in this novel, Trollope tries to express his opinion as to what England and Ireland should do to make the Union successful.

To succeed as an MP, Phineas is requested to be obedient to the Party, even if to support the Party is against his own will. Those who do not support the Party are associated with undesirable elements, such as the Fenians. Eventually he votes against the Party due to his sense of belonging to Ireland, and

resigns.

Trollope has a deep affection for Ireland. He never wishes for the independence of Ireland and needs Ireland as a complement to England. This shows that Trollope wrote the novel from the viewpoint of English conservatives.

# *Nineteen Eighty-Four*: Decency の追求とその挫折

谷 山 智 彦

## 序 論

*Nineteen Eighty-Four* (1949) は George Orwell (1903-1950) の最後の小説である。この作品は、Aldous Huxley の *Brave New World* (1932) と並ぶ未来の人類社会の恐るべき全体主義社会を描いたディストピア小説として知られている。この *Nineteen Eighty-Four* に先行して、Orwell はやはり全体主義の一党独裁社会の恐怖を描いた寓話、*Animal Farm* (1945) を著しており、この作品で Orwell はソヴィエト連邦のスターリン体制を風刺している。この背景には、Orwell の1936年～1937年に渡るスペイン内戦への参戦とその体験があった。Orwell は同国に台頭するファシズムに反対する共和国側の民兵隊の一人として戦闘に参加した。この際に、彼は共に戦った兵士達の姿に非常に感銘を受け共感したが、同時に彼らが、当時、ソ連の影響下にあった同国の共産党によって、その存在が党の方針にそぐわないが故に、理不尽な言いがかりやレッテル貼りによって弾圧される姿を目にした。Orwell が参戦した1930年代後半当時、ソヴィエトでは、スターリンによる大粛清の最中であり、彼が目撃し、体験した弾圧はこの影響によるものであった。またこれに加えて、英国において彼が目撃、体験した事実は、ソ連当局の方針の影響によって、歪曲されて伝わり、まったく真実が人々に伝わっていなかったという実情も彼に強い衝撃を与えた。彼はこのスペイン内戦への参戦を通して、ソヴィエト連邦が当時抱えていた恐怖に満ちた全体主義的な体制の真実を、身を持って体感したのである。こうした実体験の下に、*Animal Farm* は

著された。スターリン体制の恐怖はこの作品で農場の動物達がより良き社会の構築を試みようとして、全体主義的な体制へと墮落していつてしまう姿を通して描かれ、痛烈に批判されている。これによって Orwell はソヴィエトの体制の欺瞞を暴こうと試みたのである。

Orwell にとって、全体主義体制は同時代的な恐怖であり、また将来的にも起こりえる恐怖でもあった。同時代的な恐怖を告発する作品として上述の作品を著した後、彼は近未来に起こりえる全体主義体制を描いた作品として、*Animal Farm* に続いてこの *Nineteen Eighty-Four* を著したのである。

*Animal Farm* においては、全体主義社会が構築される恐怖の過程がアレゴリカルに描かれていたが、この作品においては近未来に既に構築された全体主義社会の中の人間の姿、そこで彼らが直面する様々な問題が細部に渡って描かれている。その中で特に、重要なものとして描かれるのが人間同士の愛などの人間を人間的とあらしめる根拠とも言うべき感情、それに伴う振舞いに関する問題である。これらは、人間的なまともさ“decency”とも言い換えることができるものに関する問題でもある。主人公 Winston Smith を中心とした物語からは、こうした問題が如実に見えてくる。これらは真に存在し得るものか、人間社会において真に価値を持ち得るものであろうかといったような事柄がそういったものがことごとく抑圧される全体主義国家という極限的な状況の中で本作では、問われている。

Winston Smith は全体主義国家 Oceania の体制が禁じる自由や愛情といった人間が健全な人間性を保つ上に欠かせないものを希求する人物として描かれる。それを模索する中で彼は Julia という女性と出会い、彼女との関係、特に性関係、異性愛を伴う関係を契機としてそのようなものを実感していく。言わば、彼は彼女との関係を通して、徐々に失われた人間としての健全さとも言うべきものを獲得、経験していくのである。そして、彼は人間の間の愛情や絆こそが、全体主義の体制に対抗し得る力を秘めていると信じるに至る。彼の信念と目論見は、結果として物語の中で挫折してしまうが、この Winston の挫折の物語を通して、人間性に関する George Orwell の見識が本

作では窺えるようになっている。本稿では、全体主義国家体制を背景として展開し、彼が人間性の価値を見出す契機となるこの Winston と Julia の関係とその中で Winston の内面の動向、異性に対する意識の動向等に着目し、それを追いながら彼の理念の追求と挫折の意義を検討し、作家 George Orwell の描いた人間観に迫るものとする。

## 1. Oceania 社会における異性愛の収奪

最初に、*Nineteen Eighty-Four* の舞台となるディストピアについて見て行くことにする。Winston が暮らす国は、Big Brother と呼ばれる神格化された指導者と彼が率いる党が治める独裁体制の全体主義国家である。人々は telescreen と呼ばれる通信機器によって常時、国家から監視と支配を受ける。そしてまた、人々もそうした視線の存在を強く意識し、適切な振る舞いを求められ、それに従って生活しているのである。言い換えれば、巨大なパノプティコン<sup>1</sup>のような社会に暮らしているのである。この監視装置に加えて、この世界でさらにそうした権力による監視と管理を助長させる装置が Newspeak と呼ばれる Oceania の公用語である。これは既存の英語を改良した新言語である。作中でこの言語に精通した専門家である Syme は、Newspeak は英語の各単語の意味を限界まで制限し、語彙を限られた少数に狭めたものであり、それによって、人々の表現と思考を制限する意図を持っている言語であると主張する。これは、言語的な監獄を実現し得る装置であるとも言える。限られた語彙や単語の意味では、人々はさまざまな意味を暗に語や言い回しの中に含ませることは、事実上不可能となる。話者や筆者は意図を隠して、物を巧みに言い、表現することが不可能なり、表現に含まれる意図は容易に外部から察知され、監視を受けやすくなる。こうした点から、これもまた人間を権力による管理を助長する重要なシステムの一つであると言えるのである。こうした監視社会の中で、Oceania の人々は暮らす。

このような、執拗な監視に加えて、国家は歴史や言論などあらゆるものを統制下に置き、一切の自由を許容しない。そしてさらに、国家権力による統

制は本稿で問題として取り上げる人々の間に存在する愛情や友情といった個人的な対人感情にも例外なく及ぶ。人間の間の究極的、根本的な愛情関係の一例として、男女間の性関係が挙げられるが、国家を治める党は性をも強く管理下に置く。そして、そこから派生し得る結婚や家族関係といった多くの人々の間の繋がりを権力で押さえつけ、その容貌を強く変質させようとするのである。

Oceania 当局は支配の為に、人間の男女の性関係を規制する。党は男女の自由な交遊を認めず、また自由な恋愛感情、情動に基づいた関係性というものもを否定する。そして、その代わりに男女の関係を社会に必要な人員を供給する為の単なる生産行為へと還元させる。この点は、実際に作品において次のように語られる。

The aim of the Party was not merely to prevent men and women from forming loyalties which it might not be able to control. Its real, undeclared purpose was to remove all pleasure from the sexual act. [...] The only recognised purpose of marriage was to beget children for the service of the Party.<sup>2</sup>

国家は男女から性的な情念や悦楽を奪おうとする。その方法の一つとして、党は男女の間に自然的に存在する肉体関係、その意義を上述のように大きく書き換えるのである。こうした現象に伴って、必然的に男女の性の概念、そしてそこから派生することになる家族などの人間の相関関係も大きく変化する。上記のように、男女の性的な関係は、国家に奉仕するものとされ、“our duty to the Party” (77) と称されるようになり、いわゆる、男女間での愛情や喜びといったものは、払拭されるのである。そうした Oceania の性に関する観念は、実際に作中で Winston の妻である Katherine によって語られる。彼女と Winston の間には、いわゆる夫婦としての愛情や信頼は希薄であり、Winston も Katherine も互いに強く惹かれあうところは少ない。そうした状

態にも関わらず、彼女は党に対する義務として、Winston との性行為を受容する。ここには、我々が想定するような愛情の概念は存在しない。彼女はただ義務であるという脅迫観念に駆られて、Winston との関係を継続しようとするのである。

She would lie there with shut eyes, neither resisting nor co-operating, but *submitting*. It was extraordinarily embarrassing, and, after a while, horrible. But even then he could have borne living with her if it had been agreed that they should remain celibate. But curiously enough it was Katherine who refused this. They must, she said, produce a child if they could. So the performance continued to happen, once a week quite regularly, whenever it was not impossible. [...] She had two names for it. One was ‘making a baby’, and the other was ‘our duty to the Party’ (77)

Katherine は夫と別れることもなく、国家より課せられた義務の遂行を継続しようとする。ここには、Katherine 個人から Winston に向けられる愛情などは皆無であり、従来の意味での夫婦間の愛は存在しない。このように、明らかに旧来の情愛などが打ち消されており、非常に異常な様相を呈したものとして男女の行為は語られる。

実際に、社会で使用される言語の面でもこうした事は明確に示される。Oceania の公用語である Newspeak では、目的に則った行為を goodsex、それ以外の性行為や関係の全ては sexcrime、つまり性犯罪の範疇に含まれている。<sup>3</sup> つまり、全ては生殖の為であり、従来の男女間の愛情による結びつき等は否定され、認められることはないのである。女性は出産の器官を備えた国家のための再生産の為の機械的存在に過ぎないものとなっている。そして、故に、必然的に Oceania 社会では男と女の結びつきや絆のような感情は非合法的なものとなっているのである。

こうした男女関係に対する支配と管理の結果、結婚や恋愛から派生する関

係性である家族関係もやはり必然的に大きく変質を被ることになる。Oceania 社会においては、旧来の親と子の情愛や絆といったものは消失している。子や若い世代の者達は、親の世代を国家の奨励する思想に基づいて監視し、必要となれば、政治犯として告発する。この典型と言えるのが、Winston の隣人である Parsons 夫妻とその子供である。作中で、Parsons は自分の幼い娘に自分が、寝言で反動的な発言をしてしまったことを当局に密告され、国家によって拘束されてしまう。この時彼は、そうした親子の関係性について、“In fact I’m proud of her. It shows I brought her up in the right spirit, anyway” (268) と述べる。子が国家の方針を何よりも優先し、その為親をも告発することは正しいこととされるのである。家族は監視の為の出先機関であり、国家の思想警察の延長的な存在となっているのである。こうした関係性を国家が奨励しており、これによって親子は分断され、結果として旧来の家族関係、親子の関係性は歪曲させられているのである。

このように、かつて人々を互いに結び付けていた愛情や親愛の感情は国家権力による管理と支配の結果、消失、歪曲させられている。この世界で男と女、そして人々を結びつけるものは只一つである。それこそが Big Brother と彼が率いる国家に対する熱狂的崇拝である。そして、これが従来の男女の関係と家族関係を変質させた原因でもある。

Oceania において、国家の首長であるとされる Big Brother は国民の父であり、長兄的な存在として賛美され崇拝される。人々は強烈な存在感を持つこの男性の姿を賛美し、その国家と自己との繋がりに歓喜し、熱狂的に受容するのである。

Oceania の人々にとって、この Big Brother はまさに神のような存在である。人々の熱狂を受けるこの存在と彼の党、組織は単純な政治集団のみならず、宗教的な側面を持っている。家族としての連帯や男女間の愛情による関係を失った人々は、そうした旧来に絆に代わり、この国家と指導者に対する半ば宗教的な熱狂によって結びつこうとするのである。

Mason Harris は、こうした国家の支配の中で暮らす人々の心理に着目し、

それについて考察する。Harris によると、同じようにディストピア小説である Huxley 等の作品と共通してこの作品において、人々は “an oppressive atmosphere of constant surveillance, and a drastic annihilation of the self”,<sup>4</sup> 即ち、国家の権力機構による常時監視と劇的な自己の消失の二つの要素によってその心理を支配されていると述べ、それが全体主義社会の人々の特徴的な心理状態であることを指摘する。つまり、常時監視を受けることによって、人々の心理領域は国家による介入受け、独立した自己や個性を国家へと投げ出すことを支配者によって促されるのである。この自己の消失をもたらすものは、上述した宗教的な熱狂を思わせる政治指導者と権力機構に対する崇拜であると Harris は指摘する。Oceania の市民達は、日々、Big Brother と党に強く感情移入し、自らがその力の一翼を担う存在であるという意識を喚起させられ、自己をそうした組織、集団の中へと一体化、埋没させる。この集団に対する自己の埋没は、避けがたい病的な悦楽を人々にもたらす。偉大なる存在、力との一体化とそれによる快楽を共有することによって、人々は同じ国家の国民として連帯、一体化しているという幻想を強める。こうした幻想を継続的に人々に植え付けることによって、党はその支配を磐石なものにしているのである。そして、このような劇的な自己の消失こそが人々の旧来の絆、繋がりに代わる存在なのである。

注目すべきことに、こうした国家への熱狂や支配者への強烈な感情移入は、旧来の人々の人間的な相互関係やその中の愛情といったような感情の重要なファクターであった性的情念とも根本で密接な関係を持っている。上述したように、Oceania では、性、特に男女の性的な情念、快楽やそれに伴う愛情といったものは国家の運営において、不要なものとして判断され、抑圧されている。この性の抑圧の奥底には、人々の情念や衝動を管理し、それらを国家や指導者の崇拜へ誘導するという意図がある。そして、その意図は次のように実際に語られる。

It was not merely that the sex instinct created a world of its own which was

outside the Party's control and which therefore had to be destroyed if possible. What was more important was that sexual privation induced hysteria, which was desirable because it could be transformed into war-fever and leader-worship. (153)

男女間に発生し、彼らを互いに結びつける性的情念や愛情等は国家により管理すべきものであり、生殖の為に合理化すべきものとされ、抑圧される。抑圧を受けた性的なエネルギーは必然的にヒステリーなどの鬱屈したものとして表出することになるが、ここに体制側は付けこむのである。抑圧下にある情念は国家によって、巧みに指導者への崇拜や熱狂などへと向けられるように、誘導される。言い換えれば、人々の熱狂、Harrisの言う劇的な“annihilation of the self”とそれによる快感とは性的情念を巧みな管理と操作によって別の形に転換したものであるとも言えるのである。

この集団的な熱狂の端的な例が定期的に行なわれる Two Minutes Hate という催物である。これは、Oceania が仮想敵国とする他国の映像や指導者 Big Brother の映像を人々に向けて放送し、プロパガンダに満ちた映像によって、人々の憎しみや賞賛といった感情を意図的に一定の方向に向けさせるという支配の為の行事である。この様子は次のように語られる。

The horrible thing about the Two Minutes Hate was not that one was obliged to act a part, but that it was impossible to avoid joining in. Within thirty seconds any pretence was always unnecessary. A hideous ecstasy of fear and vindictiveness, a desire to kill, to torture, to smash faces in with a sledge-hammer, seemed to flow through the whole group of people like an electric current, turning one even against one's will into a grimacing, screaming lunatic. (17)

Two Minute Hate で流される映像は老若男女を問わず人を熱狂の渦へと引

き寄せる。このイベントの熱狂は一定の敵に対する憎しみや指導者に対する憧憬や賞賛の感情の共有による強烈な一体感とそれによる避けがたい快感をもたらし、人々の個を埋没させて、一体化させる。そして、こうした感情の昂ぶりは、Big Brother の映像が流れる際により強く現れる。その映像の様子は、“as though the impact that it had made on everyone’s eyeballs was too vivid to wear off immediately” (19) と描写され、聴衆に強く訴えかけるものとして描かれる。指導者の威力は強烈な存在感は誇示され、聴衆はこれに感情移入する。Big Brother の率いる Oceania のという国家の威力が映像によって強調され、人々の眼前に示される。それによって聴衆は自らもその一部であるという感情を鼓舞され、しだいに主体性を投げ出し、党や国家といったものへと取り込まれていく。こうした行事に参加し、のめり込むことによって、人々は鬱積した性的情念を発散するのである。

さらに、この鬱積した性的情念の発散とそれによる支配の過程において、重要なものとなるのが、国家の長とされる Big Brother の力に内在するジェンダー・システムの存在である。人々が自己を埋没させる力は強烈な父権的な力である。先に少し見たが、Big Brother はその名が示すように男性であり、全国民の長兄のような存在として君臨している。この名はこの国家の指導者の力が父権的な権力であることを示唆している。言わば、国家は強大な男性が家長として支配する巨大な家庭のような存在となり、人々はそれに飲み込まれる存在となる。

こうした力の影響によって、人々の持つ文化的性も変化を被る。例えば、やや前時代的な例ではあるが、根強く存在する一家を支える家長的存在としての男性像やそれを支える女性像と言ったものは、この近未来社会にはもはや存在しなくなっている。そうした観念を人々が持ちえなくなっているのである。

masculinity や femininity といった概念は、この Big Brother の持つ強烈な父権的な力の下に置かれる。Big Brother の父権的な力は、上述したように全ての人々をその中に飲み込む。人々はこの存在と一体化することによって、

強大な力を持ったかのように錯覚する。男性はその身に秘めた父権的、男性的な願望をこれによって充足させる。そうした形によって、抑圧された性衝動を発散、解消させるのである。そして一方で女性もまたその中に取り込まれ、その強烈な父権的存在の庇護下にあることの快樂に耽溺するのである。

その結果として、masculinity は Big Brother の占有物となり、男性は、個々の異性に対して男性的、父権的な力や性的衝動を向けることはなくなり、また女性は抑圧の中、旧来の個々の異性の為に作られ、表出してきた女性的な風貌や振る舞いを縮小させていくことになる。このように、Oceania の国家体制は人々の性的衝動を誘導し、解消させると同時に人々の旧来の文化的性と性差も弱体化させるのである。

この中でも特に女性の変化は顕著である。女性達の感情は、そうした感情がすでに、国家への熱狂へと転換させられているがゆえに、決して旧来のように異性の恋人や配偶者に向けられることはない。只、強烈な威力を持つ Big Brother と国家に向けられるのみである。彼女らに国家から求められることは、国家の為に生殖、人材の再生産である。彼女らは只それに従って、その奉仕のみを至上の義務として遂行しようとする。こうした状況下では、必然的にいわゆる女性的な装いや振る舞いというものは、削ぎ落とされ、消失していく。女性性、文化的性に基づいた女性的な姿や振る舞いというものは、元来、異性に対する感情や視線を強く意識することによって存在するものであり、個々人の異性間の結び付きが前提として存在するものである。それ故に、上述のような体制の中では必然的に女性性はパージされていく。そして、究極的には国家のために人的財産を再生産する存在という意義のみが評価対象となり、残されていくのである。只、国家に従属し、奉仕する存在となり、それ以外の意味は不必要なものとして削ぎ落とされてしまい、全ての情熱は国家へと収斂していつてしまうのである。

実際に、この作品において、多くの女性達の姿は、いわゆる旧来の女性的な姿を弱体化させた姿で描かれる。化粧や女性的な装いなどは Oceania において存在しないのである。実際にこの社会の女性の特徴として、Winston は、

“Party women never paint their faces” (73) と日記にしたためている。そして服装もまた、女性的な臭いを感じさせるものは希薄である。例として、telescreen 越しに Winston の目の前に現れる早朝の体操の為の女性インストラクターの姿は、そういった様子を代弁している。

Winston sprang to attention in front of the telescreen, upon which the image of a youngish woman, scrawny but muscular, dressed in tunic and gym-shoes, had already appeared. (37)

画面に現れる女性は筋肉質で、シルエットは何処か男性的な様相も含んでいるように描かれる。

このように、Oceania の管理社会は人間の心理を巧みに操作し、その上で性衝動や文化的性と性差の概念を支配する。そして、結果として、異性間の愛情や絆、家族関係を大きく変質させてしまうのである。男と女、家族の全ては相互監視機構と同列の存在へと成り果て、彼らは只、国家と指導者に対する熱狂という経験を共有し、そこに自己を埋没させることによって繋がる。国家は人々から文化的な性と両性間の愛情を収奪することによって、旧来の人々の絆や愛といった人間性とも言うべきものを破壊し、国家に彼らを縛り付け、支配するのである。それでは次節以降から、この性愛と人間性が極限まで弱体化した世界の中で主人公 Winston Smith が如何なる性的情念や異性に対する意識を持っていたか、また、そこから彼が如何なるものを求め、見出し、理想として追求したか、そして如何にそれが挫折したかを検討し、その意義を見ていくことにする。

## 2. Winston Smith の性的情念の鬱積

この物語は、以上のような社会の中で物語が展開し、Winston Smith の視点を中心にして語られ、描写される。彼は、Oceania の社会において Outer Party と呼ばれる中流階級に該当する市民として生活している。彼は、真実

省“Ministry of Truth”と呼ばれる行政機関に勤務しており、そこで党の方針に従って過去の歴史や事件、事象を書き換えるという業務を担当している人物である。

*Nineteen Eighty-Four*はこのWinston Smithの叛乱への意思と企図、そしてその挫折の物語である。彼はこのOceania社会に違和感と疑念を抱き、失われた人間愛や人々の間の絆を希求する者として描かれる。彼の挫折へと至る人生は性に対する意識が重要な意味を持つ要素となっている。現行の体制に対して疑問を持ち、容易に適応できずに叛意をも抱く彼の内面や周囲には、常に性が関わり、彼は常にそれを意識し、思い悩むことになる。

先に見たように、Oceaniaの社会において人間の性と性衝動は国家によって巧妙に管理、支配されている。性関係は飽くまで生殖の為のものであり、性関係によってもたらされる快楽やそれとも関わってくる男女を結びつける感情は非合法的なものとされている。それ故に、体制を疑問視し、人間愛や絆を求めるWinston Smithは物語全体を通して、必然的に性やそうした事象と関わる愛等、他者に対する感情の問題とぶつかることとなるのである。

では、彼の精神、特に、性に関わる感情の動向等を具体的に見てみることにする。体制に疑念を抱く為に現状の社会に対して、違和感を絶えず抱え、適応しきれないWinstonは健全な心身の状態を保つことができない。彼はその内に行き場のない憤りや攻撃的な性衝動を抱えることになる。そして肉体的にも、右脚に腫瘍を抱え、時折、その痛み悩まされる弱々しいものとして描かれる。このように非常に病的で危うい姿である。すでに見たように、Oceania社会では、人間の内面も巧妙に国家によって管理されており、性衝動をはじめとする人の心理の根底に存在する衝動は、全て巧みに国家や指導者に対する熱狂へと向けられていた。しかし、Winstonはこの体制に対する違和感と疑念を抱くが故に、自分の衝動を完全には国家が誘導する方向に向けることができない。結果、彼の内には発散しきれない抑圧された性的情念が燻ることになる。彼はその衝動をしばしば異性へと向ける。そこには複雑な彼の性的な情念が垣間見える。

Winston succeeded in transferring his hatred from the face on the screen to the dark-haired girl behind him. Vivid, beautiful hallucinations flashed through his mind. He would flog her to death with a rubber truncheon. He would tie her naked to a stake and shoot her full arrows like Saint Sebastian. He would ravish her and cut her throat at the moment of climax. (18)

彼は Two Minutes Hate の最中、唐突に自分の後方にいた若い女性へその意識を向ける。

その瞬間、彼の脳裏には女性の凄惨なヴィジョンが過ぎる。想像の中で Winston は女性の衣服を剥ぎ、縛りつけて矢襖にして殺害する。この女性の身体に対する強烈な破壊衝動の根本には、Winston の鬱屈した性的な衝動がある。矢による刺殺や身体へ刻み付けられる切り傷は暴力的な女性器への侵入や攻撃、即ち強姦を強く想起するものとなっている。実際にそれを示すように、作中においてこの狂気的な憎悪の理由として、女性が若く美しかったことが語られている。このことから、強烈な女性に対する攻撃性は彼の内部に燃える女性に対する性的な衝動に端を発していることが窺える。Two Minutes Hate に向けられる人々の熱狂や憎しみの感情は、本来、人間が持つ性衝動や情念を意図的に国家の想定する仮想敵国や国家の指導者へと転換させたものであった。彼はそうした国家による情動の操作に完全に盲従できないために、女性に対する性的衝動を向け、女性の身体に対する強烈な破壊衝動という形で発露させているのである。

この異性に対する破壊衝動と後述する憎しみは、Oceania 社会の中の異性間の愛の欠如という絶望的な状況の中で彼が抱いた「ある感情」によって、性的情念が鬱屈した形に変化し、表面化したものである。その屈折の原因となった感情とは、孤独と嫉妬の感情である。彼は Oceania 社会の中で一人、体制に疑問を持ち、既に失われた家族や男女の繋がり、性愛に相当するものを求める。しかし、そうした彼の願望は決して満たされることはない。異性

との絆を求めながらも、彼は決して女性から意識され、求められることはない。なぜなら上述したように異性に向けられるべき衝動や愛情はすべて国家や指導者に向けられているからである。異性から向けられる愛情によって、彼の自尊心が満たされることもなく、彼は孤独である。彼に意識や愛情を向けることがなく、Big Brother と国家へ意識を向ける異性に対して Winston は強烈な憎しみを向け、その結果として凄惨なイメージを脳裏に描くのである。このように異性への憎しみと殺意の根源には、本能による性的な衝動に加えて、満たされぬ孤独と自尊感情の欠如、そして国家への熱狂に耽溺する異性、セクシュアリティを収奪し、寡占する国家に対する嫉妬、憎悪の感情が動因となっているのである。

尚、こうした Winston に内在する狂気に近い衝動は、作家 Orwell が1930年代に London の都心で目撃した下層階級の人々、特に路上生活の浮浪者が抱えることになる精神病理を想起させるものとなっている。Orwell は植民地ビルマの警察官の職を辞した後、1930年代に Paris と London の二つの都市を、貧困生活を送りながら彷徨した。その様子を基にしたルポルタージュ作品である *Down and Out in Paris and London* (1936) において、London の浮浪者達の置かれた環境やその中で発生する精神への影響について次のように書いている。

Tramps are cut off from women, in the first place, because there are very few women at their level of society. One might imagine that among destitute people the sexes would be as equally balanced as elsewhere. But it is not so; in fact, one can almost say that below a certain level society is entirely male. [...]

It is obvious what the results of this must be: homosexuality, for instance, and occasional rape cases. But deeper than these there is the degradation worked in a man [...]. The sexual impulse, not to put it any higher, is a fundamental impulse, and starvation of it can be almost as demoralising as

physical hunger. [...] Cut off from the whole race of women, a tramp feels himself degraded to the rank of a cripple or a lunatic. No humiliation could do more damage to a man's self-respect.<sup>5</sup>

Orwell は浮浪者達の男女比率は非常に男性が圧倒的に多く偏っており、その多くが女性との接触を絶たれ、性愛の関係を欠いた環境の中にあつたと指摘する。そして、そういった中では必然的に性的な情念が抑圧され、それらが性犯罪や異常性癖といった鬱屈した形で表出し、また自尊心も不足することから、最悪の場合、狂気へと傾いてしまいがちになるということを示した。

この社会状況と病理はこの作品における Winston の精神状態とそれをもたらす周囲の状況と近似したものである。Oceania では、勿論、男性が圧倒的に多いということはないが、Winston の周囲の異性は旧来の女性的な側面を失っており、彼がいくら働きかけたとしても、周囲の女性達はそれに応えることはない。彼らは若く、相応の魅力を持っているが、どこか“sexless”な存在であり、実際に Winston はそうした不可解な異性の姿に感情を強く乱され、狂気とも言える殺意を女性に向けてしまうのである。こうした状況はやはり、上述した下層階級の浮浪者達の性の閉塞的な状況と結果に通じるものがある。そして、それに加えて、上述の浮浪者の例にあるように Winston もまた性愛を欠いた環境の中で“self-respect”，自尊心をも欠損させられている。その例の一つと言えるのが、彼の身体の腫瘍を原因とする自身の容姿に対する意識である。それは“he had been too much ashamed of his pale and meagre body, with the varicose veins standing out on his calves and the discoloured patch over his ankle” (165) と描写されるように、彼の劣等感の元となっている。異性からの情愛受けられない環境下において、彼の劣等感は強まり、それは後に関係を持つ Julia と出会うまで決して止むことなく彼と苦しめるのである。このような彼の持つ性愛を成就させることが不可能なことに起因するルサンチマン的感情や自尊心の欠損は、作家 Orwell が実

際に目の当たりにした1930年代の社会に内在する病理を継承させたものとも考えられる。本作が舞台とするのはこの年代から50年近く先の未来であるが、社会体制が全体主義となったこの世界でもやや形を変えて出現する。前述のルポルタージュでは、経済的な貧困に伴って現れる精神の貧困の現象として描かれていたが、ここでは全体主義社会が愛や情といった良心的なものをおぼろげながら持ち、求める人間にもたらす精神的な疲弊という形で継承され、描かれるのである。このようにして、全体主義社会の非人間性が強く示されており、ここから、Orwell が性愛を、人間性を考える上で重要視していたことが窺えるようになっている。

このように Winston は満たされない性的情念と愛への渴望を抱えており、本来ならそれを発散すべき Two Minutes Hate にも疑問を持ち、全体主義国家と同化できずにいるために、孤独と、そして国家に取り込まれる異性と異性を収奪する国家に対しての鬱屈した感情を抱えている。この Winston の性に対する意識に大きな変化が訪れることになる。それをもたらす存在が Julia である。

### 3. 憎悪から愛情へ

この物語において、Julia は Winston の渴望する愛や性関係等に応える唯一の女性である。体制に対する疑念を抱えながら日々生活し、そこに完全に適応しきれない状況にある Winston であるが、彼は突如として Julia から “I love you” の言葉がしたためられた手紙を密かに受け取る。これを契機として彼らは頻繁に逢瀬と肉体関係を重ねていくことになる。この過程で Winston は自身や女性に対する感情や思考を大きく変えていく。

愛を示す言葉を送ってきた Julia に対して、Winston が最初に抱いた感情はやはり憎悪と不信の感情であった。実際に彼は彼女を前にして次のように発言する。

‘I hated the sight of you,’ he said. ‘I wanted to rape you and then murder you

afterwards. Two weeks ago I thought seriously of smashing your head in with a cobblestone. If you really want to know, I imagined that you had something to do with the Thought Police.’ (139)

Winston は、この発言に見られるように、女性に対する激しい暴力的な衝動を抱えている。こうした感情は既に見た社会環境によってもたらされた屈折した情動である。即ち、女性のセクシュアリティを奪い取る国家と国家に抱え込まれる女性に対する不信と憎悪である。彼は実際に異性を前にした時にも、一貫してこうした衝動から逃れられずにいる。彼女の身体に触れ、性関係に及んだ際にもやはり彼を突き動かすのは、こうした憎悪に満ちた衝動なのである。

彼女と肉体関係を持った際に、彼は Julia から今に至るまで性遍歴を聞かされるが、その際に彼女が以前に党の高官の男性とも関係を持っていたことがあると聞くと、彼は憎悪を含んだ嗜虐的な感情を爆発させる。

His heart leapt. Scores of times she had done it: he wished it had been hundreds — thousands. Anything that hinted at corruption always filled him with a wild hope. Who knew, perhaps the Party was rotten under the surface, its cult of strenuousness and self-denial simply a sham concealing iniquity. If he could have infected the whole lot of them with leprosy or syphilis, how gladly he would have done so! Anything to rot, to weaken, to undermine! (144)

彼女が国家の要職にある男と関係を結んだ数が多ければ、多いほど良いと Winston は願う。数多い性交渉によって彼らの多くに性病を蔓延させ、堕落させる、そのような手段による国家への攻撃性をここで Winston は示している。また、性病は彼女と関係を結ぶ国家の男達のみならず、彼女自身にもダメージを与え、破滅させるものでもある。ここから、国家と女性双方に対す

る憎悪に充ちた破壊衝動が示唆されていると言える。このように、この時点で彼にとって、Julia は、国家と密着した女性であり、性的欲望の対象であると同時に憎悪の対象でもある。こうした彼女は国家を攻撃し、破壊し得る対象として、独特の魅力も持ち、彼を引き寄せる。この点に関して、Stephen Ingle もまた次のように述べ、同様に分析している。

Julia's great attraction, as far as Winston was concerned, was her vaunted promiscuity, her simple, unconstrained love of carnal pleasures. When they were first alone in the hazel grove, Winston described Julia quickly unzipping her clothing and flinging it aside as a gesture which seemed to be annihilating a whole civilisation based upon the Party's values. He was fully aware of, indeed rejoiced in, the treasonable nature of sexual pleasure. [...] Promiscuity, Winston recognised, would provide 'a force that would tear the Party to pieces'.<sup>6</sup>

Ingle は、彼女の性遍歴と性的な快樂に対する執着は、Oceania が禁止、制限するものであり、それに彼も関わることは、党が作り上げた文明を否定、破壊することに繋がるという背徳的な魅力に満ちており、それが彼女の魅力ともなっているということを指摘する。

Ingle の指摘するように、Winston はそうした国家に対する憎しみと破壊願望に基づいて、Julia の性的放蕩の共犯者となるのである。彼は、この女性の身体を通して、性病の蔓延の一翼を担い、この文明を破壊、攻撃するという意図をもって彼女との関係に及んでいるのである。それに加えて、上述したように彼女自身の性病による破壊という意図も決して見逃すことが出来ない。つまり、ここで彼女は、彼の国家と女性に対する憎悪、攻撃への欲望を満たすと共に、異性への性的情念を満たす存在となっていると言える。

このように、Winston は Julia に対して、国家、異性への憎悪と異性への性的情念がないまぜになった感情を向け、関係を結ぶ。それ故に、彼らの性

関係は、単なる性的関係のみならず、国家に対する否定的感情や攻撃性を含むものであり、政治的な含みが存在し、旧来の男女の関係とは依然として異なるものであるとも言える。それを示すように、この時点での彼らの関係については次のように表される。

In the old days, he thought, a man looked at a girl's body and saw that it was desirable, and that was the end of the story. But you could not have pure love or pure lust nowadays. No emotion was pure, because everything was mixed up with fear and hatred. Their embrace had been a battle, the climax a victory. It was a blow struck against the Party. It was political act. (145)

男女の関係の周囲には常に党や国家の存在があり、本来あるべき純粋な愛情や信頼、性に対する情動などはありえなくなっている。このように彼は考え、自身が強烈な憎悪や攻撃性を動因として女性と関係を持っていることを自覚する。

こうした荒廃した内面を抱える Winston の精神状態を Julia は彼と肉体と接触を重ねることによって変化させる。Julia は Winston と同じく中産階級相当の社会的地位の女性であり、やはり行政機関に職を持っている。彼女は性的に奔放で、性的な快樂に耽溺し、それを追及する女性である。前述の引用において、Winston の精神の周辺には常に国家が存在し、“pure love”、“pure lust” が存在しないことが言明されていた訳であるが、彼女には少なくとも国家をものともしない強烈な身体的快樂に対する欲求“lust”が存在し、その延長線的な感情として彼女は Winston に対して興味と愛着を持っており、愛情の種子ともなり得るような感情を持っている。国家から見れば、奔放に自己の感情に任せて快樂を追求し、体制の方針を無視して、恣意的に他者に対して感情すら向ける彼女は反体制的な要素を持った人物なのである。

Julia は性的快樂に執着し、その経験も多く持つが故に、国家における性の支配をよく観察し、熟知している。彼女は Winston と関係を持った際に、

彼女は彼が無自覚であった国家による人々の性的エネルギーの国家崇拜や戦争への熱狂への巧みな誘導という真実を彼に伝える。

‘When you make love you’re using up energy; and afterwards you feel happy and don’t give a damn for anything. [...] If you’re happy inside yourself, why should you get excited about Big Brother and the Three-Years Plans and the Two Minutes Hate and all the rest of their bloody rot?’  
(153)

Julia は実際に経験した性体験や交友関係を踏まえて、性的な欲望、性愛の鬱積こそが、強く人を Oceania の支配の中へ取り込み、動かす根本的動因の一つであることを語る。既に見たように、実際に Oceania の人々の国家に対する熱狂は性的抑圧によるものである。人々の自然的な欲求をこの抑圧から解放し、その自然の衝動に身を任させ、発散させれば、人々は充足感を得る。そうすることによって、国家による支配力は弱体化し、人々は支配から逃れられるのである。実際に、彼女はそうしたものを発散し、その結果、国家への熱狂からも醒めており、そこからは距離を取っている。

こうした Julia の性的奔放やそれに関わる見識は上述のようは彼女の発言と実際の性行為を通して、Winston にも伝わり、彼に変化を与える。Julia は Winston を国家に対する憎悪や嫉妬といった感情から解放する。彼女は肉体関係によって性的な情念を解消させ、同時に利他的ではあるが、愛情の片鱗のようなものを Winston に向ける。そのようにして渴望を充足させることで、彼の鬱屈した情念を癒すのである。言い換えれば、彼は政治的な意味合いを帯びない純粋な愛や情念を彼に伝えているといっても良いであろう。

実際に、彼は彼女との関係を継続的に重ねる内にそれ以前まで持っていた狂気とも言えるような激しい憎悪や破壊的な衝動は姿を潜めていく。彼は Julia が言及したような充足感や幸福感を感じ、憎悪に代わって、彼女に対する愛着や愛情、絆といったものを次第に求め始める。彼は Julia との性的

な接触、身体的な接触を契機として、既に Oceania では失われて久しい異性間の愛情、そしてそこから派生する家族間の繋がりなどを思い起こし、それに今まで以上に価値を見出すようになる。

He wished that they were a married couple of ten years' standing. He wished that he were walking through the streets with her just as they were doing now, but openly and without fear, talking of trivialities and buying odds and ends for the household. (161)

雑踏の中で密かにコンタクトし、彼女と関係を持ちながら、Winston は密かに彼女との恒久的な繋がりを求め始める。それは彼女との婚姻関係である。何者の監視や干渉を受けずに彼女と共にいること、それによって、精神的な充足感を得ること、そしてそれが保証される関係性やそれが可能な居場所を希求するようになるのである。こうした願望の根本には彼が彼女と肉体関係を持った際に感じた「ある感情」がある。

Winston はもはや、肉体的な欲望や屈折した憎悪によって彼女を求めることはない。彼は Julia と肉体関係を持った後、彼女に対して、僅かずつではあるが、彼女に対しての庇護欲のようなものを発露させる。行為の事後、“The young, strong body, now helpless in sleep, awoke in him a pitying, protecting feeling” (145) とあるように、彼の傍らで眠る若い彼女の身体は、彼の目には “helpless”, 寄る辺なき者、弱き者として映り、彼の庇護欲を強く呼び覚ます。そして、彼はここから、大きく自意識もそれに伴って変化させていく。既に上述したように、自分に関して、強く劣等感を持ち、自尊感情を失っていたが、彼女と同衾するうちにこうした感情は緩和されていく。彼はそれ以前まで、自身の身体を人前に晒すことを恥じ、望まなかったのであるが、この空間で彼女との関係を重ねるうちにそうした劣等感による行動はおさまり、彼女の前で堂々と身体を見せるようになる。こうした彼の物腰の変化は彼が彼女を守る存在、保護者としての自分を意識し始めたということ

示す。彼は女性を守る力ある男性という自意識を持つのである。言わば、体制が占有、支配していた文化的男性性、masculinity とも言うべきものを彼はこの女性との接触を通して得るのである。

一見して判るように、ここで Winston が取り戻したジェンダーの概念は、女性を保護する男性、そして庇護される女性という父権的で男性中心主義的なものである。彼はこうした概念に基づいて構築される愛情や慈愛を重要視し、それを人間的なまともさ“decency”として追及することになる。彼がこうした父権的な性観念を是認する理由はこのまともさ、“decency”という概念とも深く関わっているが、それについては後述することにして、引き続き、Julia との関係の中で展開する彼の彼女への愛情や彼の自尊心の反転の様子を見ていくことにする。

父権的な男性性を手に入れた彼に対して、Julia もまた、Winston の内面の変化を鼓舞するかのよう Oceania では失われて久しい女性性を発露させ、彼に感情を向ける。

She must have slipped into some shop in the proletarian quarters and bought herself a complete set of make-up materials. Her lips were deeply reddened, her cheeks rouged, her nose powdered; there was even a touch of something under the eyes to make them brighter. [...] The improvement in her appearance was startling. With just a few dabs of colour in the right places she had become not only very much prettier, but, above all, far more feminine. (164)

Julia は Oceania の中産階級の女性の中では既に忘れられた化粧を自身に施す。これにより、彼女はこれまでにない女性性を持ち、Winston の目を強く惹き付ける。彼はここで、女性との接触、交遊の悦びを経験し、彼女の対する愛着をより一層に強め、自身の男性としての自尊心も強化されて行くのである。

Winston は女性に対する庇護欲を契機として、失っていた自尊心を復権さ

せ、彼女に対する愛情を育んでいく。そしてそれは最終的に恒久的な彼女との繋がり、そして、彼女をあらゆる外部の危険から庇護したいという願望、即ち、究極には前述した婚姻関係への渴望へと至るのである。当然ながら、彼の周囲の社会環境ではそうしたことは現実的ではないが、彼は何者の干渉や監視も受けずに彼女との関係を持つ空間を何とか確保し、そこで彼女との逢瀬を重ねるようになる。

彼が借り受ける古物商 Charrington の二階の一室には telescreen による監視もなく、その為に Oceania 社会の抑圧的な支配からは隔離された空間である。こうした空間の中で Winston は気兼ねなく彼女に対して愛情を向ける。この空間は彼が彼女の為に確保した安全地帯であり、この中で彼女は Oceania 社会の目から隔離され、保護されるのである。言わば、この部屋は彼の彼女に対する保護欲や執着、愛着を強く反映した空間なのであり、彼が内面に秘める想いを強く具現化した空間であるとも言えるのである。

このようにして、Winston は失われた男女の繋がりや愛情を確保しようとするが、この彼が求める人間の絆や愛情といったものの背景には理想とも言うべき原型が存在する。それを示す存在が Oceania の下層階級である prole である。彼らは Winston や Julia が属する Outer Party よりもさらに下位に置かれる存在であり、教育等の国家による保護の外に存在する。しかし、それ故に彼らは国家当局による常時監視や性に対する抑圧を免れているのである。彼らは Winston や Julia のような教養や思考能力を持たないが、Oceania の中産階級には、法的に禁止され、忘れられ、前時代の遺物となりつつある快楽の為の性行為や旧来の家族関係を保持している。これは、即ち、彼らは既に失われたジェンダー（父権的なジェンダー）を保持し、それを前提とした愛情や慈悲といった感情を抱えている可能性も示すと思われる。そして、これはまさに、Winston が Julia との関係で見出したものである。それ故に、こうした人々を Winston は理想の人間として評価する。彼は Julia と出会う以前から、“If there is hope, it lies in the proles” (81) と日記に書きとめており、抑圧的な現状を打破し得る存在と考えていたが、Julia との実体験を経

て、それはより強固なものとなるのである。次のように、そうした prole の理想的な性質は描かれる。

They were governed by private loyalties which they did not question. What mattered were individual relationships, and a completely helpless gesture, an embrace, a tear, a word spoken to a dying man, could have value in itself. The proles, it suddenly occurred to him, had remained in this condition. They were not loyal to a party or a country or an idea, they were loyal to one another. [...] The proles had stayed human. They had not become hardened inside. They had held on to the primitive emotions. (191)

Winston は prole をかつて全ての人々が持っていた感情と行動力を持っている人間であると考え、彼らこそ本当の人間であると彼らの優越性を強調し、賛美する。彼の賛美する感情とは、“individual relationships”における“primitive emotion”である。即ち、特定の人物や異性に対する愛情や愛着であり、それによるか弱き者に対する同情や抱擁等の行動である。これらはまさに Winston が持った感情と非常に近いものであると言える。

また、こうしたものは Orwell が最も重視し、先に少し触れた“decency”という概念に含まれ、相当するものであると考えられる。“decency”は人間的なまともさ、健全さと言ったような意味の語である。そして、ここには他者に対する敬意や弱者に対する情を持った品性ある振る舞いといったことが含まれる。まさに Winston が獲得した“self-respect”や Julia に対する愛情や慈悲といったものと符合するものであると言える。また、この語は英国の中産階級における伝統的な家族観や男女観がおぼろげに前提とされている概念でもある。<sup>7</sup> ここまで見た Winston が覚醒したジェンダーに関する意識が父権的なものであった背景にはこの概念に内包される中産階級の保守的な性観念、家族観が少なからず作用していると考えられる。つまり、Winston の念頭にあった人間的なまともさというのは、こうした非常に中産階級的な文化

の産物であったとも言える。

実際に Winston は、上述したように “helpless” な状態の彼女を認識し、それによって男性としての庇護欲を掻き立てられ、敬意と愛情を持って彼女を抱擁する。他者に対する愛情と敬意をもった振舞いと自己に対する尊敬、まさに上述の概念の一部に含まれるものと言えるだろう。彼は prole と限りなく近いものを手に入れ、自身の理想の価値をより強く信じるようになる。しかし、上述したように彼の理想の背後には父権的な価値観があったのもまた事実であり、この彼の理想は彼自身、気がつかない問題を含んでいることが判る。次節からはこうした彼の理想の影にあるものを見ていく。

#### 4. Decency の背後のエゴイズム

Winston は自分の私的領域ともいべきものを手に入れ、そこで自分が今に至るまで希求してきた異性との性関係や愛情といったものに対する欲求を満たす。これによって彼の鬱屈した想いは解消され、精神的な平穏と充足を獲得するが、こうした彼の理想としたものの奥底には、実はもう一つの隠された側面が存在する。Winston はこれに対して非常に無知であり、無意識的に認識することを忌避している。

その根底にあるものは強烈なエゴイズムである。自らの快適や快樂の為に他者を犠牲にすることも厭わない利己的な欲望、それこそが Winston の私的領域の奥底に潜むものなのである。彼は Julia に対して、庇護欲を持ち、彼に一目して利他的に見える感情を向け、人間的な健全さのようなものを示すが、彼は弱い彼女を庇護することによって、自身の優越性を実感し、充足感を得る。この点から見ると、彼にとって、彼女は彼自身の優越性を実感する為の存在であり、彼の欲望を満たす為の存在に過ぎなくなる。そして、それこそが、彼が Julia を通して得ることになった健全さの一端を担う masculinity, self-respect の本質である。これは父権的な力と力の行使への耽溺と快樂と言っても良いであろう。このように彼の精神の深部には、彼のエゴによる強烈な力への欲望とも言えるものがあるのである。

このような彼の内に潜むエゴイズムは、Winston と Julia の生活領域である古物商の二階の部屋の中において、特徴的な比喩を通して密かに暗示される。それは彼らの周辺に登場する虫や鼠といった環境の不潔さや汚れを体現する害虫、害獣の存在である。まずは虫“bugs”について見てみることにする。彼らの居住する部屋には暖を求めて、多くの虫が寝室に侵入する。“the bugs had multiplied hideously in the heat” (172) それに対して二人は次のような対応を取る

As soon as they arrived they would sprinkle everything with pepper bought on the black market, tear off their clothes and make love with sweating bodies, then fall asleep and wake to find that bugs had rallied and were massing for the counter-attack. (173)

彼らは快適な睡眠と性行為の為に虫を払いのける。しかし、虫もまた快適な環境を求めて、再び彼らの下へと蠢くように這い寄る。これは、快適さと快楽を巡っての闘争であり、自己の利益を守ろうとする強烈な常念がその根底には存在するのである。部屋に侵入する害虫の存在を通して、そうした自己中心的な人間の欲望が垣間見られる。

Winston が最も嫌悪し、恐怖する害獣である鼠もやはり同様の意を読み取れる存在となっている。Julia は鼠について Winston に次のように語る。

‘They’re all over the place,’ said Julia indifferently as she lay down again. ‘We’ve even got them in the kitchen at the hostel. Some parts of London are swarming with them. Did you know they attack children? Yes, they do. In some of these streets a woman daren’t leave a baby alone for two minutes. It’s the great huge brown ones that do it. And the nasty thing is that the brutes always —’ (166)

これは部屋の中で偶然、鼠が現れた時に、それを激しく嫌悪する Winston に対して Julia が語った言葉である。彼女は鼠の脅威を彼に伝える。鼠達はあらゆるところに群れて暮らし、時には人間の子供すら襲い、喰らってしまう凶暴な存在であると語るのである。こうしたあらゆる所に存在し、貪欲にあらゆるものを喰らい尽くし、時に人間ですらその糧とする凶暴性は、言い換えれば強烈な自己の生存の為の欲求である。これは根本的には、快適さと快樂の追求の為に、虫を殺し続ける Winston とも通じる自己の利益、快樂の飽くなき追求と通じるものである。彼はこれに強く恐怖し、拒絶してしまうが、これは彼にも内在する強烈な自己中心的な欲望に対する恐怖であり、無意識的な拒絶とも考えられる。

さらに、この群がるように生活し、自らの快樂と生存を求め続ける鼠や虫の姿は、Winston がまともな人間性を備えた存在と考える prole そのものとも近似し、その存在を暗示するように思われる。彼らは、それぞれ私的領域を持ち、国家よりも目の前の他者や近親者に対する愛情や絆も確かに持っているが、同時に知性に劣り、陳腐な娯楽やそれによる自己本位の快樂に耽溺し、消費する。そうした品性に欠ける動物的な側面も彼らの根本に存在しているのである。この側面はまさに鼠や虫が自らの生存と快適、快樂の為に群生する姿を想起させるものであり、この点からまさに上述の生物の姿は彼らの存在と性質を示唆するイメージであると考えられる。Winston は彼らを理想化するが、こうした側面に関して非常に盲目であり認識していない。やはり、上述した自らのエゴイズムの衝動と同様に、無意識的に認識することを拒絶し、目を向けずにいると言える。

Winston の周辺に登場する害獣と害虫達は単純に、環境の不衛生さや劣悪さを示すのみならず、自己の快樂や利益の為に他の存在をも犠牲にすることも厭わない自己本位的な衝動を暗示するのである。Winston は特に鼠をはじめとして、こうした存在を忌避するが、これは彼のそのような物に対する無意識的な拒絶を示している。そうした側面は彼自身にも、彼が理想とする prole にも生物として例外なく内在しているが、彼はそれに目を向けようと

しない。彼が価値を見出す人間の絆や愛情の裏には少なからず、そうした側面があることを彼は無意識に拒絶し、忌避してしまうのである。このように、彼は自分の理想とし、希望として見出した私的領域やその中での愛や絆といったものの根底に存在し得る陰部ともいえる部分、それを回避し表面的な部分のみに焦点を当て、注目する。彼の周辺の害獣害虫の姿からは、それが密かに読み取れるのである。

## 5. Winston の自覚と挫折

Winston のこうした陰部に対する盲目や忌避は程なく暴かれ、彼自身もそれを意識することとなり、彼のあらゆる認識に変化が現れることになる。その契機となるものが、Oceania の国家当局の走狗である O'Brien による Winston の逮捕と監禁、拷問である。

Winston と Julia の国家の監視の目を逃れた生活は永遠に継続し得るものでは決してなかった。彼らの生活は密かに国家当局によって捕捉されており、ついに彼らは逮捕されてしまうのである。二人は隔離され、Winston は愛情省の中にあるとされる監獄へと監禁されてしまう。監獄の中で Winston は彼が以前から、反政府地下組織のメンバーであると信じていた O'Brien に再会する。O'Brien は獄中で彼に尋問と拷問を継続的に加え、彼を徹底的に弱らせるが、彼のこうした行為は単純な暴力行為に留まるものではない。このような行為により、彼は挫折し理想の追求を断念することになる。O'Brien の拷問と尋問は彼の得た人間性の核心となる自尊心と Julia への愛に揺さぶりをかけて、破壊し、その上でその内にある醜悪な本質とも言うべきものを彼に見せ付けるのである。

最初に O'Brien の手によって自尊心が破壊される。自尊心を破壊される際の Winston の様子は繰り返される尋問と拷問のダメージによって、次のように描かれる。

Abruptly he was sitting up with O'Brien's arm round his shoulders. He

had perhaps lost his consciousness for a few seconds. The bonds that had held his body down were loosened. He felt very cold, he was shaking uncontrollably, his teeth were chattering, the tears were rolling down his cheeks. For a moment he clung to O'Brien like a baby, curiously comforted by the heavy arm round his shoulders. He had the feeling that O'Brien was his protector, that the pain was something that came from outside, from some other source, and that it was O'Brien who would save him from it. (287)

Winston は上述のように激しく肉体から精神に至るまでその全てが疲弊する。疲弊の結果、彼は自身の意思で身体のコントロールができなくなるまでになる。ここでは、彼は非常に弱々しく、寄る辺なき存在となる。こうした切迫した状況に陥った彼は、何者かの助けを必要とするようになる。その際に、彼が頼るべき存在となる者が拷問と尋問を行使する O'Brien である。O'Brien は Winston に与えられる拷問の強弱や種別等、その行使の全ての権限を握る。その為、拷問と尋問に疲弊し、弱りきった Winston は苦痛から逃れるようと必然的に、彼にすがらざるを得なくなるのである。そのような彼の姿は“helpless”であり、まるで赤子のように小さな存在となる。そして、一方で O'Brien は Winston にとって、“protector”，保護者のような存在となってくるのである。

このか弱い存在とその庇護者という図式は、かつての Winston と Julia の関係性を想起させる。Winston は寄る辺なき存在としての Julia に対して、庇護欲を発揮することによって、男性的な強さと自尊心、masculinity を回復させていたが、ここではそれが逆転したものとなっている。自分の身体操作もままならぬほど弱った彼の姿は、かつての Julia の前で示されたような姿とは似ても似つかないものとなっており、自尊心は全く影を潜めてしまっている。愛情省の監獄の中で、以前とは逆に彼が Julia のような弱い存在となり、かつての masculinity を失うのである。

ここで O'Brien は弱体化した Winston を保護する強烈な男性性に満ちた者

となって彼の前に君臨する。既に上述したが、Big Brother という存在は強烈な masculinity を持っている。O'Brien はそうした力の代理行使者の一人としてそうした力を行使する。その圧倒的な力によって、弱く、寄る辺無き存在となった Winston は男性性を削がれ、去勢され、支配されたような状態となる。まさにこの点を Daphne Patai は、“Big Brother and Inner Party members such as O'Brien monopolize the masculine gender role; they reduce men like Winston to a feminine role”<sup>8</sup> と指摘する。Patai が、国家当局は男性的な力を一手に寡占する存在であり、彼らの強力な力の前で Winston は女性的な役回りへと追いやられると考察しているが、まさにここで Winston はかつて持っていた力強さや自尊心を O'Brien の手によって奪われ、以前の彼とは対照的に、かつて庇護対象とした女性 Julia のように “helpless” な存在となり、女性的な存在として国家当局の力の行使と支配の対象となってしまうのである。これはまさに O'Brien と国家の存在による文化的な去勢とも言うべきものである。

Winston の自尊感情の弱体化は、O'Brien の暴力により変わり果てた自分の姿を鏡で直接目にするすることで、さらに強固なものとなる。O'Brien は、彼の自尊心を破壊する為に彼に鏡の前に立たせ、その姿を確認させる。

He moved closer to the glass. The creature's face seemed to be protruded, because of its bent carriage. A forlorn, jailbird's face with a nobby forehead running back into a bald scalp, a crooked nose and battered-looking cheekbones above which the eyes were fierce and watchful. The cheeks were seamed, the mouth had a drawn-in look. Certainly it was his own face, but it seemed to him that it had changed more than he had changed inside. (310-311)

鏡に映る Winston の鏡像は彼を激しく動揺させる。彼の姿は拷問と監禁による疲弊と物理的なダメージによって、それ以前の彼のそれに比べて非常に醜

いものとなっている。彼はそれが自分の容貌であることに衝撃を受ける。ここに至るまで彼は O'Brien の手によって、自尊心を激しく痛めつけられているが、この身体の変化によって自尊心はさらに弱体化する。その姿は彼にとって、“skeleton”と描写されるように、非常に弱りきった存在、限りなく死者に近づくような者であり、重篤な病“malignant disease”(311)に冒された者のように写るのである。こうした決定的な弱さと醜さを見せ付けられ、彼はそれまで持っていたような自尊心は崩壊し、彼は自身の存在に対して恥ずべきもの、国家のような力ある存在によって保護されるべきものという意識を植え付けられるのである。

このように、彼は自身を力なき存在、醜い存在として認識させられていく。ここには、もはや Julia を守る存在として、彼女を庇護しようとしていた彼の姿は見るともなない。Julia との関係を通して彼が得た masculinity はここで消滅してしまうのである。

上述したように、か弱い Julia という存在への同情と庇護欲は Winston の彼女への愛情の発端となった感情であり、その背後には必然的に彼女を守るものとしての自身の自負心があった。それ故にその自尊心の崩壊は、彼女へ向ける彼の愛の成立と発展の源泉となった感情の破壊と同義であり、彼の Julia へ向ける感情は必然的に弱体化していき、維持することが困難になる。

O'Brien はこうした精神状況にある Winston に対してさらに執拗に責め立て、彼の Julia に対する感情をも破壊しようとする。彼はさらなる破壊の方法として、Winston の自尊感情や Julia への愛情の奥底に存在する隠された影の側面を Winston 自身に見せつけ、自覚させる。その隠されたものとは、Winston と Julia の情事の描写の中で虫や鼠の存在を通して暗示されたあの衝動である。即ち、自己の快適と快楽を追求する飽くなきエゴイスティックな欲望である。上述したように、彼はこうしたものに対し、無自覚であり、無意識に認知することを拒絶していた。そして、それは既に見た害獣や害虫の存在がそれを静かに暗示していたが、O'Brien はこうしたものを彼に強く自覚させる。

ここで彼に強くその自覚を促すものはやはり鼠である。Winston は101号室と呼ばれる囚人たちが最も恐れる究極の拷問室へと連れて行かれ、そこで O'Brien は鼠を使って彼を恐怖させる。Winston は次のような形で拘束され、鼻先に鼠を突きつけられる。

He [O'Brien] had moved a little to one side, so that Winston had a better view of the thing on the table. It was an oblong wire cage with a handle on top for carrying it by. Fixed to the front of it was something that looked like a fencing mask, with the concave side outwards. Although it was three or four metres away from him, he could see that the cage was divided lengthways into two compartments, and that there was some kind of creature in each. They were rats. (326)

彼は鼠の檻と接続された拘束具によって拘束され、目を背けることもままならず、鼠と対峙させられる。拘束具と鼠の檻の間には仕切があり、鼠の彼への直接の接触は防がれているが、それは O'Brien の気分しだいで取り外され得るものである。こうした状況下で彼は鼠を目視することになり、激しく恐怖する。そして、そこで描かれる鼠の様子は非常に凶暴なものとなっており、以前にも増してエゴイスティックで強烈な自己保存の衝動を体現するものとなっている。

There was an outburst of squeals from the cage. It seemed to reach Winston from far away. The rats were fighting; they were trying to get at each other through the partition. (328)

檻に入っている鼠は飢えた鼠である。彼らは餌となるものを求めて、互いにいち早く檻から出ようと、むき出しの闘争心で争い合う。その姿は強烈に自己の利益、快楽を貪欲に追求しようという衝動を象徴的に示していると言え

る。既に見たように、鼠は以前にも登場した彼の内にある暗い衝動を示す象徴的存在であった。ここで彼は再びこの害獣に対面する。これは、象徴的に以前は忌避していたものを彼が直接、目の当たりにしていることを示している。彼は鏡で自分の姿を見るように、自らをここで直視することを強制されるのである。

実際に、鏡写しのように、彼はこの凶暴性をむき出しにする鼠と対面することによって、自らの中にある眼前の鼠と同質の強烈なエゴをむき出しにすることになる。飢えた凶暴な鼠は彼をその餌食にしようと牙を向けようとするが、これに対峙する Winston は自身の生命の危機的状況から、自身の生存への渴望を強く発露させる。彼は自分の危機的状況からの解放を何よりも重視することになり、今まで持っていた信念や理想の一切をかなぐり捨てる。それを決定的に示すものが、Winston の “Do it to Julia! Do it to Julia! Not me! Julia! I don't care what you do to her. Tear her face off, strip her to the bones. Not me! Julia! Not me” (329) という発言である。彼は、Julia を身代わりとして差し出すことで、自分の危機を逃れようとするのである。この瞬間、彼は自身の中にある眼前の害獣と共通するエゴの存在を否認なく実感することになる。なぜなら、ここでの彼の行動は、彼の眼前で我先に餌食となる Winston の鼻先に向かおうと合い争う鼠達と変わらないからである。彼のエゴは不快な状況を逃れ、安全と快適を得る為に Julia を犠牲にするのである。そして、この Julia という存在の放棄は、彼の彼女との絆や愛情が、こうしたエゴの存在を前提としたものであり、そこから派生したのもであったこと、これなしでは成立し得ないということを露呈させる。Winston は自分の理想の背後に存在した影の本質とも言うべきものを絶望の中で見てしまうのである。

これに加えて、彼の絶望感をさらに強烈にする事実がある。彼の内面にある上述のものと彼を苛む国家の支配の原理との共通性である。Winston の Julia に対する感情は、振り返って見れば、彼女に対する父権的庇護欲に端を発するものであり、これは彼女に対する支配への欲望とも言い得るもので

あった。言い換えれば、彼の彼女の存在に対する力の行使の悦楽に耽溺であり、そこには彼の貪欲なエゴの存在が見出せる。こうした欲望は、皮肉にも実は Winston が叛意を示す対象であった Oceania の支配の原理と通じるものなのである。国家の走狗 O'Brien は次のように、それを Winston に説明する。

'But always — do not forget this, Winston — always there will be the intoxication of power, constantly increasing and constantly growing subtler. Always, at every moment, there will be the thrill of victory, the sensation of trampling on an enemy who is helpless.' (306-307)

O'Brien は、このように Oceania が人々を支配するメカニズムは、国家権力の代行者、即ち、人々に権力の代理執行に伴う陶酔感を味わわせることにありと語る。人々は寄る辺なき弱者を踏みつけるように力を行使し、その快楽に酔うことによって、国家への忠誠を維持し、結果的に国家に絡め取られていく。

そのように彼はここで Winston に強調する。彼の語るように、実際に人々は Two Minutes Hate などにおいて、Big Brother の強大な力に一体化し、その力を傘に着ながら、仮想敵国へ憎しみをぶつけ、その力を行使する快楽に耽溺していた。

こうした力の行使とそれによる悦楽は、Winston と Julia の関係の中にも存在する。既に見たように、彼の Julia への愛情や絆は寄る辺なくか弱い“helpless”存在として彼の目に映った彼女に対する男性中心的、父権的とも言える庇護欲であった。Winston の愛情の根幹である庇護欲と O'Brien の言う国家の支配の本質は、“helpless”な存在に対する力の行使とそれによる快楽と言う点で共通であると言えるのである。

ここまで見たように、Winston は異性愛や友愛、家族愛といった感情の一切が失われた Oceania という社会の中で Julia との関係を通して、そうしたものを実際に体感し、現状の国家体制を覆すものとして至上の価値を見出す。

彼は人が国家ではなく他者に対して、愛情を向けることこそが人間としてのまともさ“decency”であり、正しきものであり、目指すべき理想とした。しかし、彼が抱いたまともさ“decency”の背後には、強烈なエゴイズムの存在があり、彼の得た“decency”の一部である愛や彼がそこから得た自尊心、父権的な色合いを持つ masculinity といったものの全ては自己の快適と快楽を追求する衝動を原動力としていたのである。彼はそれに対して、盲目であり、無意識的に忌避していたが、O'Brien の手によってこれをも暴露され、そして、その本質が全体主義国家の支配の原理と同質のものでもあったことを露呈させられてしまう。こうして彼の理想は絶望の中、崩壊する。寄る辺を失った彼は挫折し、国家の支配の中に戻るより他の道を失ってしまうのである。

## 結 論

この作品で描かれた Winston の理想の追求と挫折の意義とは何であったのだろうか。それが示していたものは、Orwell の持つ両義的な人間観であったと考えられる。つまり、人間のエゴは人間的なまともさ“decency”，他者に対する情や愛を育むこともあれば、一方で他者や弱者を痛めつけ、支配する全体主義国家の支配原理を呼び込むこともあり得るというものである。実は、この人間観は同時に Orwell の英国の中産階級の文化に対するアンビバレンスな意識であるとも言えるものである。George Orwell はその多くの作品において、“decency”，即ち人間の持つまともさを追求した作家でもあったが、この概念そのものの中には、中産階級の父権的な家族像や男女観、弱者や下層の存在に対する見下した意識の存在がどこか見え隠れしている。例えば、本作で Winston が示した男性が女性を愛情や自愛を持って保護すると同時に優越的存在として支配するという構造などがそうである。この階級という社会構造と文化は、この“decency”という概念が示すように他者や下層の弱者に対する情や愛、品位ある行動といった善行を発生させるが、同時にそうしたものに対する理不尽な支配と権力の行使という面も併せ持ってい

る。それ故に、上述した人間の根底的な部分にあるアンビバレントなエゴを強く反映したものであると言える。Orwellは英国の彼の周囲にあった階級という社会を通して、人間の根底にあるエゴの存在を見通していたと考えられる。彼の“decency”に対する意識の背後には、こうした階級とそこから見える人間のエゴに対する両義的な意識が伺えるのである。

このOrwellの最後の小説では、こうした両義的な姿勢が、WinstonのJuliaへの愛情や関係性とOceaniaという国家とその走狗O'Brienの姿を通して、提示されているのである。この作品のテキストでは、人間の精神の最深部に存在するもの、それに基づいて構築される文化の両義性が提示されており、状況や動向次第で善良なものにも、恐るべきものにも傾きうる人間の一種の脆弱性をこの恐るべき物語を通して、警告のように示しているのではないだろうか。

#### 注

1. パノプティコンはJeremy Benthamによって企図された一望監視型の監獄である。この監獄では、構造的に囚人は監視者から一方的に視認され、その動作、行動の全てを逃れる術なく監視される。Michel Foucaultはここで囚人達に働く権力の効果について分析する。囚人達は見えざる権力者の目を意識し、それを内面化し、自発的に権力者の意に沿った行動を取るようになる。この点をFoucaultは指摘する (Foucault p. 200-p. 203)。ここでは言語が可視化の対象となっており、権力の作用によって管理されていると言える。
2. George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*. (London: Penguin Books, 2000.), p. 75  
本稿での本文引用は全てこの版によるものである。
3. George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*. (London: Penguin Books, 2000.), p. 345  
本文の appendix として収録されている *The Principles of Newspeak* において、Orwellは *Sexcrime covered all sexual misdeeds whatever. It covered fornication, adultery, homosexuality and other perversions, and, in addition, normal intercourse practiced for its own sake* と Newspeak における性犯罪の概念について説明し、生殖を目的としない行為も犯罪の範疇に含まれていることが示されている。
4. Mason Harris, “From History to Psychological Grotesque: The Politics of Sado-Masochism in *Nineteen Eighty-Four*.” in *George Orwell: A Reassessment*, ed. Peter

- Buitenhuis and Ira B. Nadel (London: Macmillan, 1988), p. 34
5. George Orwell, *Down and Out in Paris and London*. (Harmondsworth: Penguin Books, 1989), pp. 205-207
  6. Stephen Ingle, *The Social and Political Thought of George Orwell: A Reassessment*. (New York: Routledge, 2006), p. 122
  7. 佐藤義夫は“decency”という Orwell が作品を通して追求する概念であり、この人間的な品位や健全さも訳されるこの語に関して、その背景には英国の中産階級の伝統文化が存在すること、即ち、「ディーセンシィとは、中産階級の人々が過去の時代から受け継いできた価値観を指している」(p. 191) と述べる。このことから、この人間的な健全さという概念の背景には、旧来の中産階級における伝統的な父権的家族観や男女観が存在し、前提とされていることがわかる。それ故に、この概念の中には、伝統的な父性や母性、男性的なもの、女性的なものが含まれていると言え、その上での他者に対する品位ある行動、敬意であると言える。まさに Winston の Julia に対する感情や振舞いもそれを反映したものである。
  8. Daphne Patai, *The Orwell Mystique: A Study in Male Ideology* (Amherst: U of Massachusetts P., 1984), p. 261

#### 参 考 文 献

- Bloom, Harold, ed. *George Orwell's 1984*. New York: Chelsea House Publishers 1987.
- Buitenhuis, Peter. and Nadel Ira B., ed. *George Orwell: A Reassessment*. London: Macmillan, 1988.
- Foucault, Michel. *Discipline and Punish: The Birth of Prison*. Trans. Alan Sheridan New York: A Division of Random House, 1977.
- Harris, Mason. “From History to Psychological Grotesque: The Politics of Sado-Masochism in *Nineteen Eighty-Four*.” Buitenhuis and Nadel 32-50.
- Ingle, Stephen. *The Social and Political Thought of George Orwell: A Reassessment*. New York: Routledge, 2006.
- Orwell, George. *Down and Out in Paris and London*. Harmondsworth: Penguin Books, 1989.
- . *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin Books, 2000.
- . *The Penguin Essays of George Orwell*. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Patai, Daphne. *The Orwell Mystique: A Study in Male Ideology*. Amherst: U of

Massachusetts P., 1984.

Rai, Alok. *Orwell and The Politics of Despair: A Critical Study of the Writings of George Orwell*. Cambridge: Cambridge UP., 1988.

Roazen, Paul. "Orwell, Freud, and 1984." Bloom 19-34.

奥山康治 『オーウェル 時代を超える精神』 東京 早稲田大学出版部 1999.

佐藤義夫 『オーウェル研究 ディーセンシイを求めて』 東京 彩流社 2003.

ジョン・ケアリ 東郷秀光訳 『知識人と大衆 文人インテリゲンチヤにおける高慢と偏見 1880-1939』 東京 大月書店 2000.

## ***Nineteen Eighty-Four*: The Pursuit of Decency and Its Failure**

**TANIYAMA, Tomohiko**

*Nineteen Eighty-Four* (1949) is one of George Orwell's most famous works, alongside *Animal Farm* (1945). This well-known dystopian novel portrays the fear of a totalitarian society set in the near-future. Like *Animal Farm*, it reads, as a political allegory, conveying the fear of Stalinism in the Soviet Union in that era.

However, a mere allegorical interpretation does not do justice to *Nineteen Eighty-Four*. The novel's text suggests more a universal problem that has beset humanity throughout history: namely the problem of decency – love, loyalty to others, piety for those who are helpless, and the respectful behavior derived from such emotions. Decency forms the essence of human's ethics, which differentiate us humans from other creatures. This is also an important theme that George Orwell pursued during his life.

In Oceania, the totalitarian society depicted in the novel, the regime of this nation does not permit the presence of decency: love and loyalty to others are prohibited as criminal acts. Even sexual relationships – the ultimate expression of endearment and love – are restricted. Sex is illegal, unless conducted for procreation. Therefore, along with the repression of these emotions, traditional ideas of a traditional gender and family relationships are almost lost in Oceania. For the people, there is no room for private emotion. This social situation sounds the death knell for private loving relationships, eliminating fatherhood, motherhood, intimacy between men and women, and ultimately even sexual relations themselves. Winston Smith pursues the decency of man within this dystopia. Under the totalitarian domination of Oceania, he believes decency to be the only way for people to be free from the control of Oceania. He contrives to get it through relationship between him and Julia.

He discovers intimacy between a man and a woman through his life with

Julia. They have a sexual relationship. The intimate relationship transforms his outlook. Julia's emotion which is directed to Winston, and her helpless appearance and behavior afford him a self-respect which he has lacked his entire life. He gains the masculine pride of a man who protects his woman through his affection. Winston's masculinity is further enhanced by Julia's femininity – represented by the makeup on her face –and her behavior. This is the accomplishment of private love, which the Oceanian regime has always prohibited to all its citizens, and gender, which forms very essence of this love. It also falls into the domain of decency, because it is a love and loyalty for another person, not for the state.

Winston believes this decency can constitute a proper ideology that can resist the control of the state. The decency he believes in, however, has a shadowy aspect, that he evades to confront. Indeed, egocentric desire lies hidden within the very self-respect and masculinity that he has regained. Though he has gained the pride as Julia's protector through Julia's presence, this emotion is tantamount to a desire for the power to dominate her, egocentric desires to dominate her and gains pride as a superior being over her.

This brutal egocentric desire is, in fact, not so different from the dogma of Oceania's domination itself, although the latter is more sadistic in style. The state, as a matter of policy, leads people to desire to exert power over other weaker helpless people. Through this policy the state controls people's minds and actions. Winston is told this fact by O'Brien. Thus his idea is inevitably fails in despair.

The Winston's idea and subsequent failure, which are represented throughout the text, suggest an ambivalence that lies within humanity. The decency and the dogma of totalitarian domination are both derived from egocentric desire: the desire for self-comfort and superiority. This desire can create love and loyalty to others, or it can lead to the domination of others through sadistic means. Orwell appears to be warning us of the perils that lie within human's nature, through the fearful society and the despair of Winston that he depicts.

# 語 法 覚 書

都 築 郷 実

## 1. は じ め に

新たに改定された辞書が出版されると買って気になる語について読んでみる。記述が変更されたのもあれば同じのものもある。自分で用例を収集し調べないと辞書を読むだけでは分からないことも多い。ここではまだ辞書には載せられていないが、今後辞書に記述されてもいいのではと思う語、このままの記述で良くないのでは思う語、また気になる訳語について述べみたい。

## 2. 気になる語の私見

### (1) 文頭の *separately* の意味と用法

*separately* を手元の英和辞典で調べてみると次のようになっている。

#### 1. と別別に、分けて、離れて《from》；単独で

『ウィズダム英和辞典（第3版）』

#### 2. 〈…とは〉別々に、〈…から〉離れて；個別に、単独で；別便で

『ジーニアス英和辞典（第4版）』

#### 3. 別々に、個別に；別便で 『スーパー・アンカー英和辞典（第4版）』

ところが次のような文頭で使われている *separately* についての意味と用法の記載は私の調べた英和辞典、英英辞典にはない。

---

キーワード：文頭の *separately* の意味と用法，副詞の *little* の用法，  
裸眼と肉眼と *the naked eye*，*spidery* の訳語，魚の「身」の訳語

- ① LEXINGTON, Ky. (AP)-The lone air traffic controller on duty the morning Comair flight 5191 crashed cleared the jet for takeoff, then turned his back to do some “administrative duties” as the aircraft veered down the wrong runway, a federal investigation said. Separately, the U. S. Federal Aviation Administration acknowledged Tuesday violating its own policies when it assigned only one controller to the Lexington tower.

—*The Daily Yomiuri*, August 31, 2006

- ② The Sears Holdings Corporation posted a quarterly loss on Thursday as it failed to stop a prolonged sales decline despite offering more discounts, which hurt profit margins. Stock in the company, the parent of the Sears department stores and the Kmart discount chain, sank to its lowest level in two years. The company’s shares closed down 8.2 percent, at \$55.23. Separately, Gap reported quarterly profit on Thursday that beat analyst forecasts even as sales fell at stores open at least a year, known as same-store sales.

—*The New York Times* (電子版) August 18, 2011

これらの文例から判断すると、二つの要素を並べて、前述の内容と別個の内容を列挙する場合に使われていて、「それとは別に」の意味で用いられている。対比の表現には、on the one hand ... on the other hand, at the same time, in contrast, while, meanwhile, the one ... the other などがある。文頭で使われる separately は別個の内容を列挙する時に使われていると考えられるが、対比の表現の一種と考えるもいい。

## (2) 文頭の together の意味と用法

文頭に使われる together については『現代英語語法辞典』p.1110に「この語は通例、動詞の後や文尾に生起するが、「一緒に（行動する）」の意では文頭にくることもある」として Together we can own the universe. の例をあげている。ところが次のような文頭での使われ方はまだ辞書に載せられていない。

- ① Washington (Reuters)—Harper said the trade and regulatory agreements

would help create “a new modern border” between the countries, which are already linked by a free trade deal that also includes Mexico. “Together, they represent the most significant steps forward in Canada-U. S. cooperation since the North American Free Trade Agreement,” he said in remarks prepared for delivery at the White House. —*The Daily Yomiuri*, Dec. 9, 2011

『ジーニアス英和辞典（第4版）』で together を調べてみると次の4つの意味区分がある。① 共に、一緒に、協力して；結婚して、親しい関係で ②（心・物などを）一緒にして、合せて；相互に、お互いに；一か所に；合計で；合意して ③ 同時に、いっせいに ④ 《やや古》 続けて、連続して、間断なく とある。ところがこれら意味区分の訳のどれにも適切にあてはまらない。これは文頭で使われる additionally に似た用法で、既述の内容に関連したことをさらに付け加える時に使われるのではないかと推測する。手元に1例しかないので CORPUS.BYU.EDU の中の Time Magazine Corpus で調べてみた。用例は比較的多いが次の1例のみあげておきたい

② Last year such funds declined about 40% on average. The other pillar of what’s known as private equity—leveraged-buyout funds—has had problems too. Together, there are the worst returns on record for an exclusive class that often carries investment minimums of \$1 million for access to the best managers. —*Time*, Feb. 25, 2002

(3) look likely that

用例収集は新聞、雑誌、本を实际読んで集めているが、ネットで記事を読む機会も増えた。たまたまネットで記事を読んでいたら次のような見出しが目に止まった。

CIA chief says it looks likely that Mubarak is out

(AP)—Feb 10, 2011 WASHINGTON (AP)—CIA Director Peon Panetta says U. S. -backed strongman indicates that Egyptian President Hosni Mubarak is on his way out. . . . とあった。

この見出しの ‘looks likely that ...’ が普通に使われるのか疑問に思い、調べてみることにした。OALD<sup>8</sup>に (informal) It doesn’t look like we’ll be moving after all の例があがっている。また ODE には It was likely that he would make a televised statement. の例があがっている。ここから it looks like と it is likely that の混合形ではないかと考えられる。手元に用例がないので CORPUS.BYU.EDU の中の Corpus of Historical American English, Corpus of Contemporary American English, TIME Corpus of American English で検索してみた。CHAE で検索してみると、

- ① “It doesn’t look likely that he would!” said Socrates, eyeing Jim keenly.  
—*Hector’s Inheritance*, (1885)

が挙がっていた。‘appear likely that’, ‘seem likely that’ は一般的に使えるのでその類推から ‘look likely that’ も使われてきたとも考えられる。

それ程例が多くないので さらに Google news で検索してみると71例検索できた。1例のみ挙げておきたい。

- ② With an average age of just 38, it looks likely that at least one rookie will enjoy a baptism of fire next season. ... —*Daily Mail*, March 4, 2011

英国での例を見てみると、

- ③ It looks likely that his party will try, via a compensation package for households hammered out with Labor and the independents, to position itself as protecting “battlers” against what he calls the “Polluters party”.  
—*Business Spectator*, Feb. 28, 2011

これから考えると、この表現は《米》ではかなり使われてきているように思われる。《英》でも使われているので、意味的に誤解が少ないのであれば可能なように思われる。

(4) It looks that 節

電子版の Wall Street Journal (March 15, 2011) の例で

- ① “Even excluding Japan, it looks that the economic recovery is slower than thought,” said Joseph Fenech of Sandler O’Neill & Partners.

とある。本誌2月号の Question Box 75で「It sounds (to O) that 節と言うか」の Ans. で「しかし、これはおそらく話し手は seems のような何か他の動詞を念頭に置いていて、うっかり It sounds to me that... と言ってしまっただけのことにはすぎないように思います。実際 It seems (to me) that... ならばかなりよく使われています。この種の混同は話し言葉ではよくあることです。…なお、主語が仮主語の it であるときの look は、sound と同じ様ように使われます。」と書かれている。この用法については古くは Richard A. Hudson: Arguments for a non-transformational grammar (1976) p. 172 に And sound is like seem in allowing verbless complements, but it doesn't allow that-clauses or (for me) infinitives:

\*It sounds that he's suitable.

\*He sounds to be suitable.

He sounds suitable/a suitable candidate/out-of-date. とあり非文扱いになっている。ところが『ジーニアス英和辞典 (第3・4版)』の sound の項に「It ~ed (to me) that she had a cold (私には) 彼女はかぜをひいているように思われた」とあることから今では正用法と考えていいのでは思う。『ジーニアス英和大辞典』の sound の項にも《◆...: It seems (to O) that 節も可》とあり、It ~ed that she had a cold 彼女は風邪をひいているようだ とある。これから判断すると上記①の it looks that 節も it seems that 節の用法の誤った類推から使われたと考えられるが、これは以下の look の用法の変化から少しずつ使われてくるのではないかと考えられる。誤用であったものでも使われてくると、意味的に誤解が生じないのであれば、それでもいいのではないかとということで正用に近付いてくるように思う。ただ辞書ではたとえば『ウィズダム英和辞典 (第3版) p. 1140 を見ると It looks as if [like, \*that] he will win. としている。『ジーニアス英和辞典 (第4版)』p. 1160 の look の項に It looks like he's a good guy./It looks (like) he works late at night. が《米略式》と注記して載せられている。さらに p. 1727 の seem の項で it seems like... 《米略式》…のように思われる (it seems that →③) とあって③の意味のと

ころに「, …あるらしい, …のようだ (《米略式》 it seems like)」とある。これから判断すると it looks like が可能であるので, it seems that 節の類推から it looks that 節が出てきて, 意味的に誤解が生じないのであればやがては定着してくるのではないかと考えられる。一般的に意味的に近いものの構文の類推によって使われ出したとしても, 意味的に大きな支障がないのであれば誤用とされた構文もだんだん使われて来て, 誤用でなくなると考える。これらのことから it sounds that 節が正しい用法として辞書に載せられるのと同じ様に it looks that 節が誤用でなくなる日が来て辞書に載せられると予測出来る。Google News で用例を調べてみると比較的多くヒットする。一例だけ挙げておく。

- ② MARK SHIELDS: Yes... So people have a couple of extra bucks. But it's going to start feeling—and it looks that gas prices are going to continue to go up. —PBS NEWSHOUR, March 9, 2012

(5) sign on to 名詞について

少し古い新聞を読んでいたら次の記事の中の sign on to に目が留った。

- ① “I am a strong supporter of civil unions. As you say, I have been to this point unwilling to sign on to same-sex marriage primarily because of my understandings of marriage.”

—*The Washington Post* (in *The Daily Yomiuri*), Sept. 14, 2011

ここの sign on to は成句のような気がするので手元の辞書で調べたが載せられていなかった。『ジーニアス英和辞典 (第4版)』で調べてみると sign on は載せられているが sign on to はない。このような句がどうしてできたのか考えてみたい。sign 他 の意味に 1. 〈名前〉を […に] サインする [on, to] とあり sign a letter = ~ one's name to [on, in] a letter とある。『ウィズダム英和辞典』でも sign a contract [check] ≡ sign one's name on [to] a contract [check] とある。このことから考えると one's name が省略されて sign on [to] ができ sign on だけでもいいはずだけれども強調するためか on to になったと考えられる。sign to という成句がないため to on とはならないと考えら

れる。また一語の onto ともならないのではと思う。sign の他の用法であれば直接サインする意味合いが強いが、sign on to とすると直接性がやや薄れてきて幅を持った「～に署名する」の意味で使われているのではないかと思う。「～にログオンする」という場合に log on to ～が使われるが sign on to も似たような使い方である。

CORPUS.BYU.EDU 中の Corpus of Contemporary American English, Corpus of Historical American English, Time Magazine Corpus American English で調べてみた。例文は比較的多い。ただ BYU-BNC: British National Corpus では 2 例しか検索できなかった。《英》ではまだまれな用法と考えられる。*Time, Newsweek* の週刊誌からそれぞれ一例だけ例をあげておきたい。

- ② “... You just want all poor to be forced to sign on to the parish list.” —*Time*, Sept. 1, 1943
- ③ Baker believes the Soviets will eventually sign on to a U. N. resolution. —*Newsweek*, Nov. 19, 1990

今後この用法が辞書に載せられてもいいのではと思う。

#### (6) reminiscence の動詞用法

reminiscence の動詞は reminisce で reminisce about でよく使われているのは周知のことである。ところが reminiscence が動詞で使われることもあるのはあまり知られていないのではと思う。手元の辞書を調べてみても動詞の意味は載せられていない。これは reminiscence の逆成で reminisce が造語されたことに関係するのではと考えられる。reminisce の動詞が造語されていなければ reminiscence が品詞の転用で動詞で使われても不思議ではない。『英語語源辞典』の p. 1170 の reminiscence の項で reminisce v. ((1829)) ((口語)) 思い出にふける。(逆成) とある。実例を一例挙げておく。

- ① But passengers during the busy travel season around the Orthodox Christmas this past week called it the nostalgia train, and they expressed the hope that it was a signal of future harmony and not just the chance to reminisce about better times now long past.

—*International Herald Tribune*, January 9–10, 2010

(7) 伝達動詞としての tweet

インターネットの利用が増えて、それに関連する英語の語彙、意味の拡張がみられる。次の記事で分かるが tweet が伝達動詞として使われている。『ジーニアス英和辞典（第4版）』で tweet を調べてみると自さえずる、チツチと鳴くとある。ここは他動詞として使われている新しい用法である。

- ① LOS ANGELES (AP)—Baldwin tweeted that it would be his last flight with American, despite the fact that the airline shows “30 Rock” for in-flight entertainment. —*The Daily Yomiuri*, Dec. 10, 2011

手元に一例しかないののでいつ頃から使われているのか気になって調べてみた。CORPUS.BYU.EDU 中の Corpus of Contemporary American English で検索すると2009と2010の例があった。一例ずつあげておきたい。

- ② Last month, a friend of San Francisco freelance writer Karen Solomon tweeted that he had just paid \$16 for asparagus.

—*San Francisco Chronicle*, March 22, 2009

- ③ Back in Alaska, Murkowski insisted her race isn’t over. While her political rival, Palin, tweeted that she was “keeping her fingers crossed for Miller to pull off a, quote,” ... miracle on ice.

—CBS Morning News, Aug. 26, 2010

『ジーニアス英和辞典（第4版）』に blog の動詞用法が載せられているが今後 tweet のこの用法もコンピュータ 又はインターネットの専門的な語として辞書に載せられてくると思う。

(8) go on a ... spree の訳語

神戸新聞（3月12日付け）の記事で「学校で銃乱射15人死亡」の見出しがあり、本文中には「…、男が侵入して銃を乱射、…」とある。英字新聞では次のような記事が見られる。

WINNENDEN, Germany (AP)—The psychological profile of a teenager who went on a shooting spree at his former school and killed 15 people began to take

shape, ... —*The Daily Yomiuri*, March 14

この中にある went on a shooting spree が「銃を乱射 (した)」に相当するものと思う。和英辞典で「乱射」を調べてみたが a shooting spree をあげているのはなかった。英和辞典で spree を調べてみた。『ライトハウス英和辞典 (第5版)』には ばか騒ぎ, 景気良く [派手に] やることとあり a shopping spree 派手な買物, 衝動買い / have a spree ばか騒ぎをするの句例をあげている。『ウィズダム英和辞典 (第2版)』には (過度の飲酒・浪費などの) ばか騒ぎ, 浮かれ騒ぎ; 酒盛りとして a shopping [spending, buying] spree 派手な買物, 浪費の句例をあげている。調べた他の学習英和辞典もだいたい同じような例があがっている。ただ『ジーニアス英和辞典 (第4版)』の語義区分 ②で犯罪行為 (◆新聞用語) とある。この語義の例がないのでどういふ場合の例の訳か分からない。『オーレックス英和辞典』には②で (新聞などで) 犯罪行為として a killing spree 無差別殺人としている。『ランダムハウス英和辞典 (第2版)』にも語義区分3に (ある欲望・気分などにひとしきり) ふけること, 耽溺 an eating spree 食道楽 a spending spree 金に糸目をつけずに使うこと a crime spree 犯罪のやり放題とある。学習英和辞典も、もう少し細かい意味の分類が必要である。そうすることで go on a shooting spree の意味を学習者はより深く理解することができるようになる。これは上記の語義区分から考えると「むやみに銃を発射する」の意味で、そこから「銃を乱射する」の意味になることが理解できる。また a killing spree も「むやみに人を殺すこと」から「無差別殺人」の訳にしたと考えられる。go on a shooting spree の意味を考えるのに『大辞泉』で「まぐる (捲る)」を調べてみた。「(動詞の連用形について) ずっとその動作を続ける。盛んに…する」とし「書きまぐる」「走りまぐる」の句例をあげている。また『新明解国語辞典 (第6版)』では「(接尾語的に) 当初の目的を達する・(心ゆく) まで、その動作を続ける」と定義して「書きまぐる」「追いまぐる」の句例をあげている。この語義から考えてみると「むやみに銃を射ちまぐる」としても「銃を乱射する」に近い意味になる。go on a ... spree の場合、日本語

では「(むやみに) …まくる」と訳せる。日英ともあまりいい意味では使われていない。『グランドセンチュリー英和辞典 (第2版)』をみると go on a spending spree の訳を はめをはずして金をつかいまくる としている。CALD<sup>3</sup> に Twenty people were shot dead in the city making in the worst killing spree since the riots. の例がみられる。Longman Advanced American Dictionary はよく例にあげられる a shopping/buying/drinking spree 以外に a shooting spree と Tyson began his crime spree in 1978 by robbing a liquor store. の例があがっている。The New Oxford American Dictionary (2nd edition) には he went on a six-month crime spree の例があがっている。この意味は「彼は6ヵ月むやみに罪を犯し続けた。」になると思う。この語の定義には a spell or sustained period of unrestrained activity of a particular kind とある。これから考えると自分では抑制のきかないある特定の行動が一定期間続くような場合に使っている。

(9) quip の動詞の訳語

quip の自動詞の訳語を英和辞典で調べてみると次のようになっている。

1. (…に) 皮肉 [当てつけ] をいう 『ウィズダム英和辞典 (第2版)』
2. 気のきいたこと [皮肉] を言う 『ジーニアス英和辞典 (第4版)』
3. 皮肉 [気のきいたこと] を言う, 当意即妙に答える  
『アンカーコズミカ英和辞典』
4. 警句を吐く; 辛辣なこと [皮肉, 冗談] を言う  
『ルミナス英和辞典 (第2版)』

ここで問題にしたいのは、訳語にある「皮肉などを言う」のような否定的なニュアンスの意味で現在でも使われているのかという点である。Oxford Dictionary of English で調べてみると noun a witty remark verb make a witty remark としている。例文として 'Flattery will get you nowhere.' she quipped とある。語義説明で使われている witty を ODE で調べてみると showing or characterized by quick and inventive verbal humor とある。The New Oxford American Dictionary (2nd edition) も同じ語義説明である。用例も同じであ

る。 *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (8th edition) では noun a quick and clever remark, verb to make a quick and clever remark としている。 *Longman Dictionary of Contemporary English* (4th edition) では to say something clever and amusing として 'Giving up smoking is easy,' he quipped, 'I've done it hundreds of times.' *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* では to make (a clever remark) としている。 *Macmillan English Dictionary* (2nd edition) では to say something funny or clever noun では a funny or clever remark としている。電子辞書の中にある *Oxford Sentence Dictionary* で例文を調べてみた。

- ① An election, someone once quipped, is the only race in which most people pick the winner.
- ② As the New York Times has quipped, once hot offerings have now become hot potatoes. Albert Einstein once quipped that the greatest mathematical discovery of all the time is compound interest.

などが載せられている。これらの英米での辞書の説明から、悪いニュアンスのある語でなく、プラスのイメージの語のように思える。訳語としては「気のきいたことを言う、軽妙なことを言う、軽い冗談を言う」となる。いずれにしてもマイナスのイメージだけの訳語では問題がある。

(10) report と paper

24年度のセンター試験のB問3で paper ではなく report が使われている。

Anna: Will you be able to come to the party on Sunday?

Stephen: I'm not sure because I have a biology report to hand in on Monday.

25年度第2回目の英検のGrade Pre-2の問題1(2)(11)にも両例で report が使われている。

- (2) After school on Tuesday, Jane cleaned up her room, wrote a history report, and baked a cake. She was happy to ( ) so much in one evening.

- (11) A: I have to finish my geography report by Friday, but I don't have enough time to work on it.

B: You should talk to your professor and ( ) more time to finish it.

『ジーニアス英和辞典（第3版）』をみると《報告書》report; 《学生の》paper とある。授業中の指導もこのように教えている。問題は a biology paper とほぼ同義で a biology report が使われるかということである。『ランダムハウス英和大辞典』の report の項にも（◆学生の「レポート」は paper）とある。『ジーニアス英和大辞典』でも（◆学生の「(学期末) レポート」は ((term) paper) とある。『ジーニアス英和大辞典』の paper の項をみると 3...; (学生の) レポート (term paper) (◆この意で report とはいわない) とある。『英語語義語源辞典』p.976 の report の項の日英比較で「report は日本の学生たちのいう「レポート」の意味はない。宿題とか期末提出物などの「レポート」を英語では (term) paper という」と説明している。ところが『ラーナーズプログレッシブ英和辞典（第2版）』p.1259 の report の項での語法説明では「期末レポートは通例 (term) paper というが、ふだんのレポートは report でよい。例えば book report は本の内容のまとめと読後感を報告し、口頭のこともある。」としている。ふだんのレポートが具体的にどこまでさすのか分かりにくいですが、上記の例はふだんのレポートと考えれば使えるのかと思う。『ウィズダム英和辞典（第2版）』の report の項 p.1520 の3の語法欄で「report を生徒が書く課題としての「レポート」の意でもちいることはあるが、通例小・中・高のものに限られ、大学の場合は (term) paper を用いるのが普通」と説明されている。これを見る限り可能に思える。report が paper と同義には使えないと思うが、小・中・高の生徒が少し調べて報告する程度のものでは report が使え、大学生がある程度しっかり調べ、論文形式になっていれば paper が適切になるのでは思う。Google の web 全体で調べてみると次のような例が見られた。

- ① In 5th grade, I wrote a geography report on Brazil, illustrating it with a map  
I copied from the encyclopedia, carefully tracing its borders and ...  
—www.edwee.org/ Aug. 1, 1998
- ② Binky wrote a history report about Columbus.

—livedash.ark.com/ July 14, 2010

- ③ This is just another thing in the pokemon world that I chalk up to the fact a 10 year old with no schooling wrote a biology report on an animal ...

—www.reddit.com/ March 6

2013 www.ehow.com February 18, 2013 のところに How to Write a Geography Report とあり次のように書かれている。

... That stated, the world is an exciting topic and turning your geography report from a tedious task to an opportunity to learn about a destination that intrigues you might actually find your saying, “That was fun!” when it’s done.

和英辞典、英和辞典とも report がどの場合に使えるか、また paper との使い方の違いをきちんと書いておく必要がある。

(11) the Nobel Prize [prize] for/in の使い分け

山中教授がノーベル生理・医学賞を授賞した時の日本の英字新聞を読んで for or in が気になった。

- ① The Nobel Assembly at Karolinska in Stockholm on Monday announced that Dr. Shinya Yamanaka of Kyoto University will share the Nobel Prize in Physiology or Medicine with Dr. John B. Gurdon of Cambridge University.

—*The Japan Times*, October 11, 2012

- ② Kyoto University Prof. Shinya Yamanaka has been awarded the 2012 Nobel Prize in Physiology or Medicine.

—*The Daily Yomiuri*, October 10, 2012

ここでは両方とも in が使われている。日本の学習辞典ではどうなっているか調べてみると辞書によって扱いが異なることが分かった。『ジーニアス英和辞典』では初版から調べてみると次のようになっている。初版、第2版では Nobel の項に a Nobel prize for [in] physics とあり prize の項には the Nobel prize for physics とある。第3版では Nobel の項に句例はなく prize の項に be awarded [given] the Nobel prize for physics とある。第4版では Nobel の項に the Noble Prize for chemistry とある prize の項には第3版同様に be

awarded [given] the Nobel Prize for physics の例がある。Prize と p を大文字にしている点が違うだけである。『ウィズダム英和辞典（第2版）』では Nobel の項に例はなく prize の項に win the 2006 Nobel Prize for chemistry とある。『ライトハウス英和辞典（第6版）』には in or for の例はない。『アンカーコズミカ英和辞典』では Nobel の項に a Nobel Prize winner in [for] physics と the Nobel Prize for [in] literature for 2008 とある。『グランドセンチュリー英和辞典（第2版）』では Nobel の項に the Nobel Prize for [in] literature とある。『ルミナス英和辞典（第2版）』では Nobel の項に Oe Kenzo was awarded the 1994 Nobel Prize for literature とある。『レキシス英和辞典』では prize の項に the Nobel Prize for peace とある。調べた英和辞典だけで見ると for の方だけあげている辞書が多い。電子辞書版『ジーニアス英和大辞典』の用例プラスに Masatoshi Koshiha was awarded the Nobel Prize in physics for 2002. の例がある。Longman (4th edition) には Scientists from Oxford shared Nobel Prize for medicine in 1945. の例がある。Oxford collocation Dictionary for Students of English には He won the Nobel Prize for Literature. の例がある。Macmillan (2nd edition) では the Nobel Prize for chemistry の例文が見られる。電子辞書で搭載されている Oxford Sentence Dictionary で検索してみると for が圧倒的に多いが in の例も見られる。一例のみ挙げておく。

This year is the centennial of the Nobel Prize in Physics shared by Henri Becquerel and the Curies for their pioneering work on radioactivity.

英米の新聞で for or in がどのようになっているかをネットで検索すると for の方が多いようであるが in もよく使われている。

Sir John Gordon shared the Nobel Prize in physiology or medicine with Shinya Yamanaka for reprogramming adult cells.

—www.guardian.co.uk, 10 Oct. 2012

ただ学習辞典では for だけでなく in もあげて併記する場合は for と in のニュアンスの違いを書いておくのがよい。たとえば for は授賞の対象を意識して強調するのに対して、in では授賞の分野を強調する場合に使うなどと書い

ておく。

(12) 先行詞を含む関係代名詞 *what*, *who* の辞書の扱い

表記の件について改めて辞書を読み直して、考えてみることにした。手元の辞書を見てみると、『ジーニアス英和辞典（第4版）』では *what* の項で *He is not what he was [used to be].* の例をあげて「(1) 含まれている先行詞は *the man: He is not the man (who [that]) he was [used to be].* (2) 現在は通例悪い意味に用いる」と注記されている。*who* の項では関係代名詞の語義区分⑤で「先行詞を含む用法」a)「関係詞節中の補語となる」として *He is not who he was [used to be].* と *She is satisfied with who she is.* の例をあげている。『ウィズダム英和辞典（第2版）』では *what* の項で *He is not what he used to be.* の例をあげている。*who* の項では語義区分4「関係代名詞；先行詞を含む用法」として *She is not who people think she is.* と *Those experience have made me who [what] I am.* の例をあげている。『ユースプログレッシブ英和辞典』では *what* の項で *She is different from what she was ten years ago.* の例をあげている。*who* の項では（先行詞をその中に含む）として *what* に書き換えられると注記されている。例は *People should be judged from who they are.* と *He was in fact who he represented himself to be.* があげられている。これらの辞書からでは *what* と *who* の違いがわからない。*OED*<sup>2</sup> の *what* の項の説明で *Expressing quality or character: Such as; the kind of thing (or person) that* とあるように微妙な違いがあるように思う。古い用例 (*Time*, Oct. 20, 1958) だが *OED*<sup>2</sup> の説明が下記の用例の中の ‘in many different ways’ の修飾語から理解できる。Retired in Florida after 57 years of practice, Dr. Charles Ward Crampton, 81, still keeps his hand in as a consultant to the Geriatric Institute at the University of Miami’s School of Medicine and its associated Jackson Memorial Hospital. Says Dr. Crampton sagely: “If a man has sense enough to realize that in many different ways he is not what he was ten years ago, and acts accordingly, he is’ way ahead of the game. Know your limitations—adapt yourself to them—and enjoy your privileges to the utmost.”

## (13) 裸眼と肉眼と the naked eye

『大辞泉』で裸眼と肉眼を調べてみると次のようになっている。裸眼は「眼鏡やコンタクトレンズを使わないで物を見る時の目」、肉眼では「肉体に備っている目。望遠鏡・顕微鏡などを用いない生来の視力」としている。裸眼視力とは言うが肉眼視力とは通例言わないところからもその違いがわかる。『ウィズダム英和辞典（第2版）』で naked を調べてみると語義2で「めがねをかけていないく目」として be barely visible to the naked eye の例があり、訳語は「肉眼〔裸眼〕ではほとんど見えない」と併記している。『ジーニアス英和辞典（第4版）』の語義4でも「く目が」めがねなどにたよらない」として see with the naked eye の訳語は「肉眼〔裸眼〕でみる」として併記されている。『新英和大辞典（第6版）』の語義3cでも「眼鏡〔工学機械〕にたよらない」として、naked eye の訳語も「(眼鏡など器具の助けをかりない) 肉眼, 裸眼」として併記している。問題は the naked eye のような定型句の場合に裸眼の意味があるのかということである。『アンカーコズミカ英和辞典』で naked を調べてみると上記のような語義を示さないで naked eye を独立見出しとして、訳語では「肉眼」だけをあげている。OALD<sup>7</sup> で the naked eye を調べてみると ‘the normal power of your eyes without the help an instrument’ と説明している。instrument が具体的にどんな物をさすかは示していない。MED<sup>2</sup> で調べると ‘if you can see something with the naked eye, you can see it without using a telescope, microscope, etc’ とあり具体的な説明となっている。この説明からだ訳語は「肉眼」が適切であることがわかる。LDCE<sup>4</sup> でみると ‘if you can see something with the naked eye, you can see it without using anything to help you, such as a TELESCOPE’ とあり具体例が示されているので「肉眼」の訳が適切であることがわかる。さらに ODE でみると ‘unassisted vision, without a telescope, microscope, or other device’ とある。other device の中に glasses や contact lenses が入るのかどうかはわからないが訳語としては「肉眼」がいいのではと思われる。これに「裸眼」の訳語をあてるのは無理があるように思う。さらに OED<sup>2</sup> で

調べてみると 15. a で ‘the eye itself, unassisted by the microscope, telescope, or other aid to vision’ とある。ただ other aid to vision の中に glasses などを含んでいるかどうかはわからないが, *OCD* の用例に The planet should be visible to the naked eye (=without a telescope) とある。

(14) 副詞の little の用法

旺文社の『0 レックス英和辞典』の little 副詞の項で The manager resigned but his successor is little different (部長は辞職したが彼の後継者もかわりばえしない) とあり (◇different 以外の形容詞の原級を修飾することはない) とある。『研究社英和大辞典 (第5版)』でみると He is little richer than he was (昔よりちっとも金持ちになっていない) の例があるが比較級の例である。Longman Dictionary of Contemporary English (5th edition) の付属の DVD 中の collocations from the corpus を検索してみると形容詞の例がでてくる。ここであげられている形容詞は different, direct, real, good, short of, well である。原級での修飾例は different, direct, real, good, short of の例がある。

- (1) Finances at the end of 1913 were little different from 1912.
- (2) There is little direct connection, because many early ecologists were not interested in evolution.
- (3) An upper house was created, but its powers were limited, and the President had little real power.
- (4) By that time it did me little good.
- (5) It is little short of tragic that she has been cut off, while still at the peak of her singing power.

good は (4) 以外, well は全て比較級の例である。different と short of が原級で用いているが, 両方とも比較の意味を内在していると考えられる。different では *OALD*<sup>7</sup> に It's different now than it was a year ago. の例で than が使われているところからも理解できる。short of の場合 *ODE* や *NOAD*<sup>2</sup> で定義をみると less than とあり He died at sixty-one, four years short of his pensionable age とあり比較の意味を内在していると考えられる。さらに

little short of は成句として扱っている辞書もある。『グランドコンサイス英和辞典』 p. 1493 little の項で little short of を成句で載せていて「ほとんど…に近い, まるで…同様だ」としている。p. 2380 の short の項では成句として「…も同然だ」の訳語を与え、例文として To go out in this blizzard would be little short of madness./Our foreign policy has been little short of disastrous [a disaster]. の 2 例を載せている。little が原級でなく比較級を好むのは、成句表現の中にも little better [more] than, little less than などの修飾で使われていることから分かる。また direct や real は比較級で使われることはまれであるところから原級で修飾が可能になっているとも考えられる。good は通例 little better の例があげられているのに上記の一例だけ原級の例があがっているが、この good は名詞と考えられる。little は他に受け身の意味を残した過去分詞の動詞を修飾することがある。OALD<sup>7</sup> に He is little known as an artist. の例が見られる。『ジーニアス英和辞典 (第 4 版)』には I am little surprised to hear the news があげられている。ただこの例での surprised が known と同様に受け身の意味を強く残していればよいが、He looked very surprised と very で修飾できることがあるので little が使うことができるかは微妙である。a little であれば He was a little surprised at her request. (LDCE<sup>4</sup>) とあり問題はない。

(15) keep a person waiting と make a person wait の意味と用法の違い

よく使われる keep you waiting と make you wait では使われ方、意味が違う。keep と make の意味の違いで前者は結果として引き続き人を待たせている点を強調するのに対して、後者は発話者の気持ちの中にたいいはいはやむなくではあるが待つことを強いることになり、人を待たせることになってしまっている点を強調している。

Corpus of Contemporary American English, Corpus of American Historical English, Corpus of American Opera, で ‘make you wait’ として検索すると 67 例がヒットした。その中で ‘sorry to …’ の例とその類例だけをあげておきたい。

① “Sorry to make you wait,” he said.

② “Sorry to make you wait so long, doctor.”

次は Corpus of Historical American English の検索結果です。

③ “Ms. Millhone? Fiona Purcell. Sorry to make you wait. . . .”

次は Corpus of American Operas の検索からの例です。このコーパスは口語表現の宝庫である。一例のみあげておく。

④ Fine. Sorry to make you wait. Can I help you?

Wordreference.com | Language Forums に次のような質問と回答がある。

Which one is correct?

1. Sorry to make you wait.
2. Sorry for making you wait.

If both are fine, is there any difference? Or just a matter of preferences. Thanks.  
これの回答は次のようになっている。

Both work fine and mean exactly the same thing, it is a matter of preference. I say either one. However, I would say that “Sorry to make you wait” sounds slightly more formal but may still say it in every casual speech.

として次の例をあげている。

Secretary: Sorry to make you wait, but Mr. Thompson is with another client at the moment. He won't be long though. Please take a seat.

Mr. Thompson: Sorry for making you wait. Please come into my office.  
blueberriesinthefields.blogspot.com の中に次のような例がある。

I can hardly believe summer is almost over. I first announce my giveaway on June 12th, I did not realize it was so long ago! So so sorry to make you wait for such a long time. I had not forgotten, just had such a weird kind of summer.

このような例から考えると文脈によって keep you waiting を使うのがいいのか、make you wait を使った方がより適切かが決まる。

(16) concession の訳語

William F. Buckley, waves to the crowd during his concession speech after running for New York city mayor, in New York on Nov. 3, 1965

—*The Daily Yomiuri*, Feb. 29, 2008 この中にある a concession speech は「敗北宣言」にあたるものだが英和辞典で concession を調べてみてもどこにも「(選挙などで) 敗北を認めること」の訳語がない。ところが動詞ではたとえば『ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』で見ると「〈選挙などで〉敗北を認める」「選挙 [試合, ゲーム] で負けを認める」という訳語がある。このような扱いは英英辞典でも同様に見られる。たとえば *OED*<sup>2</sup> で concede を調べて見ると 1b. To admit defeat in (an election); to acknowledge that an election, town, etc., has been lost to another political party or candidate in U. S. とある。また *LDCE*<sup>4</sup> でも concede を見ると 2 ADMIT DEFEAT [I, T] to admit that you are not going to win a game, argument, battle, etc とあるが名詞ではこの語義の定義がない。ところが *MED*<sup>2</sup> の concession 4 に [U] the fact of admitting that you will not win something such as an argument or game とある。また *OALD*<sup>6,7</sup> の 2 に [U] ...; the act of conceding として (especially NAmE) Kerry's concession speech (=when he admitted that he had lost the election) とある。さらに *CALD*<sup>2</sup> にも 2 [U] when someone admits defeat と定義して次の 2 例 The former president's concession even before all the votes had been counted. と a concession speech をあげている。このことから英和辞典においても名詞の語義として「(選挙などで) 敗北を認めること」の訳語が必要である。*OALD*<sup>6,7</sup> に注記しているように concession speech の例では《主に米》として「敗北宣言」の訳語を示すといいのではと考える。なお concession speech を載せている英和辞典は『アンカーコズミカ英和辞典』で、和英辞典では『新和英大辞典 (第5版)』がある。

#### (17) spidery の訳語

Alan E. Jackson et al. の More News And Views From The Japan Times Weekly の p.45 の例文で I can't decipher this handwriting. It's so spidery. とある。この spidery の意味を英和辞典で調べてみるとたいてい「〈筆跡などが〉(くもの脚のように) 細長い」などの訳語を示している。ただ『ウィズダム英和辞典』には「乱雑な〈筆跡〉」とある。*LDCE*<sup>4</sup> で定義をみると

covered with or made of lots of long thin uneven lines: spidery handwriting とあるがイメージがわからない。*Collins COBUILD ADAE* では If you describe something such as handwriting as spidery, you mean that it consists of this, dark, pointed line とあり He saw her spidery writing on the envelope. の例があがっているが文字のイメージがよく分からない。*Shorter OED*<sup>6</sup> で調べると 2 Resembling (that of) a spider in appearance or form; elongated and thin. Also resembling a spider web in form とあって N. ANNAN His ... handwriting grew spidery and difficult to read. と例があるので読みにくいことは分かる。さらに *MED*<sup>2</sup> で調べてみると spidery の定義は 1 spidery writing is messy and consists of long thin lines とある。これから判断すると messy とあるので乱雑で読みにくいという感じがする。*OALD*<sup>7</sup> の spidery の項に spidery writing (=consisting of thin lines that are not very clear) とあるところから判断しても分りにくいというニュアンスがある。これらから考えてみると訳語が単に細長いでは spidery がどんな語感の語か分りにくい。実例をネット上で調べてみると次のような様な例が見られた。

- ① She first noticed problems with poor spelling and spidery handwriting.

—<http://www.nature.com/eye/journal>

これは Alzheimer's disease の症状の例としてあがっている。

- ② Small, cramped, spidery handwriting

—<http://wo-pub2.med.cornell.edu/cqi-bin/>

これは Parkinson's disease の症状の例としてあがっている。英国人に spidery handwriting の具体例を教えてもらった。彼によれば文字がクモの脚のように細長いイメージよりクモの巣の糸のような細いイメージのようだ。細い線で、震える手で書いたような字なので読みにくいことも多いのではないかとのことであった。日本語に「ミミズののたくったような(字)」という慣用表現があるが、読みにくいという点だけから考えると少しだけ似ている感じである。いずれにしてもイメージのわく訳語にする工夫が必要であるし、説明も必要かもしれない。さらに図があればよい。

## (18) air conditioner の訳語

手元にある『ライトハウス英和辞典（第5版）』で air conditioner の訳を調べて見ると「エアコン、クーラー、冷暖房装置；空調装置」とある。参考として「本来は温度・湿度の調整装置一般だが英米では普通クーラーを指す」とある。このことから訳語として冷暖房装置としているが暖房を入れるのは問題がある。あくまでも冷房装置でいいのではないかと思う。『ウィズダム英和辞典（第2版）』には「冷房 [空気調整] 装置, エアコン」として暖房を入れていない。OALD<sup>6,7</sup> で調べてみると a machine that cools and dries air とあり暖房の訳語は入れないのが正しいことがわかる。MED<sup>2</sup> で調べてみても a piece of electrical equipment that makes the air inside a building, room, or vehicle colder としている。日本でエアコンというと暖房もできるのが普通なので訳語でもつい冷暖房装置としてしまうのではないかと考える。このことから冷暖房装置を英語で書くと an air conditioner and heater とするしかないように思う。和英辞典においても冷暖房装置の英訳を単に an air conditioner としていることがあるが注意する必要がある。

## (19) air cleaner の訳語

『アンカーコズミカ英和辞典』で air cleaner の訳語を調べてみると「空気清浄器」とある。『新英和大辞典（第6版）』にも「空気清浄器 [装置], エアクリナー 《air filter ともいう》」とある。『ウィズダム和英辞典』で「空気清浄器」を調べてみると an air purifier とある。『大辞泉』でエアクリナーを見ると (air cleaner) と ( ) 書きし, 空気清浄器とある。これは『広辞苑』でも同様である。ところが『英和活用大辞典』で調べてみると「an engine's air cleaner エンジンのエアクリナー [空気清浄装置]」とある。さらに別の例で「The air cleaner had joggled off the carburetor エアクリナーが揺れてキャブレターからはずれてしまっていた」とある。『ジーニアス英和大辞典』で air cleaner を見ると「空気清浄器, エアクリナー 《ほこりや他の粒子が内燃機関の空気取入れ口に入るのを防ぐフィルター; air filter ともいう》」と説明されている。これらを読む限りでは air cleaner は通常車

のエンジンのところで使うもので、私たちのイメージする家庭で使う空気清浄器ではないようである。このことから air cleaner の訳語は単に空気清浄器とするよりエアクリーナーとして説明を加えるのがいいのではと思う。私たちのイメージする家庭用空気清浄器の訳語はネイティブチェックしてみたが air purifier である。

## (20) 魚の「身」の訳語

和英辞典で調べてみるといまだ揺れが見られる。『アドバンストフェイヴァリット和英辞典』で白身を調べてみると（魚などの）として the white meat としている。さらに『新和英大辞典（第5版）』では白身魚の訳が a white-[light-] meat fish としている。ただ赤身の項では赤身の魚の訳を fish with red flesh としている。一方『ルミナス和英辞典』では白身の訳は white flesh としているし、『ウイズダム和英』、『プログレッシブ和英辞典』、『新和英中辞典』なども同様に white flesh としている。flesh を使う方がいいのではと考えられるがはっきりしない。ところが *Oxford Dictionary of English* の flesh の定義を読んでも the flesh of an animal or fish, regarded as food としている。また定義ではないが *Longman Dictionary of Contemporary English* の flesh の例で a freshwater fish with firm white flesh とあるし、*Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English* の flesh の例にも ... the pale pink flesh of trout and salmon とある。さらに『ウイズダム英和辞典』の例に white flesh の訳で（魚・鳥などの）白身とある。さらに『ジーニアス英和辞典（第4版）』flesh の訳語の① b) で（食用の生の）魚肉 として例で flesh of tuna をあげていてマグロの身としている。これは第3版の記述にはなかったものである。このようなことから考えてみると flesh を使うのが一般的ではないかと思うので和英辞典でも今後は flesh に統一されてくるのではと考える。また英和辞典においても訳語に『ジーニアス英和辞典』のような記述になると予測できる。

## 3. 終 わ り に

日頃から新聞、小説を読んで面白いと思う用例を集めている。これらの用例は語法を調べる時に利用する。新しい辞書の改訂版が出版されると気になる語の扱いがどうなっているか読んでみる。集めた用例と照らし合せて辞書の記述が正しいかどうか考えることにしている。そこから他の辞書や語法書を参照しながらさらに調べてゆく。このようなことをするには根気力はいるが、興味深くやりがいもある。語の使い方は日々変化しているので語法研究に終わりが無い。これからも気になる語について調べ、発表してゆくつもりである。

## 参 考 図 書

- 『アドバンストフェイバリット和英辞典』（東京書籍）
- 『アンカーコズミカ英和辞典』（学習研究社）
- 『ウィズダム英和辞典（第2・3版）』（三省堂）
- 『ウィズダム和英辞典』（三省堂）
- 『オーレックス英和辞典』（旺文社）
- 『英語語義語法辞典』（三省堂）
- 『英語語源辞典』（研究社）
- 『グランドセンチュリー英和辞典』（三省堂）
- 『現代英語語法辞典』（三省堂）
- 『ジーニアス英和辞典（第4版）』（大修館書店）
- 『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店）
- 『ジーニアス和英辞典（第3版）』（大修館書店）
- 『新和英中辞典（第5版）』（研究社）
- 『新英和大辞典（第6版）』（研究社）
- 『新和英大辞典（第5版）』（研究社）
- 『スーパーアンカー英和辞典（第4版）』（学習研究社）
- 『フェイバリット英和辞典（第2版）』（東京書籍）
- 『プログレッシブ和英辞典』（小学館）
- 『ユースプログレッシブ英和辞典』（小学館）

語 法 覚 書

- 『ライトハウス英和辞典（第5・6版）』（研究社）  
『ラーナーズプログレッシブ英和辞典（第2版）』（小学館）  
『ランダムハウス英和大辞典（第2版）』（小学館）  
『リーダーズ英和辞典（第2版）』（研究社）  
『ルミナス英和辞典（第2版）』（研究社）  
『ルミナス和英辞典』（研究社）  
『レキシス英和辞典』（旺文社）  
『新明解国語辞典』（三省堂）  
『大辞泉』（小学館）

- Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English* (Harper Collins)  
*Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (2nd, 3rd edition) (CUP Cambridge)  
*Longman Advanced American Dictionary* (Pearson Longman)  
*Longman Dictionary of Contemporary English* (4th, 5th edition) (Pearson Longman)  
*Macmillan English Dictionary* (2nd edition) (Macmillan ELT)  
*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (Merriam Webster)  
*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (7th, 8th edition) (OUP Oxford)  
*Oxford collocations Dictionary for Students of English* (OUP Oxford)  
*Oxford Dictionary of English* (OUP Oxford)  
*The Oxford English Dictionary* (2nd edition) (OUP Oxford)  
*Shorter Oxford English Dictionary* (6th edition) (OUP Oxford)  
*The New Oxford American Dictionary* (2nd edition) (OUP Oxford)

## Notes on Usage

**TSUZUKI, Satomi**

### Abstract

English usage has changed gradually. To keep up with changing English usage we should consult newly-published English Japanese dictionaries and Japanese English dictionaries. Although there are some words and phrases that have some problems in meaning or usage, they are not dealt with properly in these dictionaries. The following are eighteen problematic words and two phrases that are dealt with in this paper.

- (1) the meaning and usage of ‘separately’ at the head of a sentence
- (2) the meaning and usage of ‘together’ at the head of a sentence
- (3) the usage of ‘look likely that’
- (4) the usage of ‘look that’
- (5) the usage of ‘sign on to’
- (6) the usage of ‘reminiscence’ as a verb
- (7) the usage of ‘tweet’ as a reported verb
- (8) a Japanese equivalent for ‘go on a ... spree’
- (9) a Japanese equivalent for ‘quip’ as a verb
- (10) the difference in meaning and usage of ‘report’ and ‘paper’
- (11) the difference in meaning and usage of ‘the Nobel Prize in /for’
- (12) the usage of ‘what’ and ‘who’ as a relative pronoun
- (13) the Japanese equivalent of ‘the naked eye’
- (14) the usage of ‘little’ as an adverb
- (15) the difference in meaning between ‘keep a person waiting’ and ‘make a person wait’
- (16) the Japanese equivalent for ‘concession’ as a noun
- (17) the Japanese equivalent for ‘spidery’
- (18) the Japanese equivalent for ‘air-conditioner’
- (19) the Japanese equivalent for ‘air cleaner’

(20) the English equivalent for '*mi*' of fish

Dictionaries have improved each time they have been revised, but the revision of dictionaries cannot keep pace with the speed of changing English usage. It is important to read dictionaries and find some problems in meaning and usage. When we find problems, we should seek for illustrative examples and use them to solve problems. There is no end to English usage research as usage is changing day by day. It is hoped that the findings in this paper will be reflected in some of the upcoming dictionaries.

<書 評>

## 沢木耕太郎 『キャパの十字架』

(文藝春秋, 2013年, 335頁)

軽 部 恵 子

本書は、ノンフィクション作家であり写真家でもある沢木耕太郎が、ロバート・キャパ (Robert Capa, 1913-1954) の最も有名な写真「崩れ落ちる兵士」(正式には「共和国軍兵士, コルドバ戦線, スペイン」) が撮影された場所を探し求める経緯を記したものである。

各章のタイトルは、第1章「崩れ落ちる兵士」、第2章「真贋」、第3章「彼の名前」、第4章「小麦とオリーブ」、第5章「その丘で起こったこと」、第6章「突撃する兵士」、第7章「ゲルダ」、第8章「影は語る」、第9章「ラスト・ピース」、そして第10章「キャパへの道」である。各章を辿っていくと、キャパの撮影場所を突き止めるミステリーを時系列に追体験できる。この他、短い「あとがき」と「参考文献」がある。

著者の沢木は、1947年に東京に生まれ、横浜国立大学を卒業後、ルポライターとして活動を始めた。1979年に『テロルの決算』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞し、1982年に『一瞬の夏』で新田次郎文学賞を受賞した。3年後の1985年に『バーボン・ストリート』で講談社エッセイ賞を受賞した。2006年には、登山家の山野井泰史・妙子夫妻がネパール国境のギャチュンカン山に挑んだ際、それぞれが下山時に経験した極限状態を描いた『凍』で、講談社ノンフィクションを受賞した。著者の確かな取材力はもとより、読みやすく、臨場感溢れる文体には定評がある。

キャパの「崩れ落ちる兵士の写真」は、1936年9月初め頃にスペイン内戦で撮影されたものとして、同年にフランスの写真週刊誌『ヴェュ』(Vue)、ついでアメリカの写真を中心とした雑誌『ライフ』(LIFE)に掲載された。し

かし、1970年代頃から真贋論争が始まり、1975年に『サンデー・タイムズ』紙の記者フィリップ・ナイトリー（Phillip Knightley, 1929-）が、クリミア戦争からスペイン内戦、ベトナム戦争まで、従軍記者の報道ぶりを検証する大著『戦争報道の内幕』を出版した（pp. 14-15）。最近では、2009年7月17日のスペイン紙『ペリオディコ』（El Periodico）は、写真の背景にある地形を分析した結果、キャバがこの写真を撮影したのはアンダルシア地方のセロ・ムリアーノ（Cerro Muriano）ではなく、そこから約50km 離れ、戦闘の行われていなかったエスペホ（Espejo）付近であるとし、ゆえに写真は「やらせ」だったと伝えた（AFPBB News「ロバート・キャバ『崩れ落ちる兵士』にやらせ疑惑、スペイン紙、2009年07月18日 16:57 発信地：マドリード／スペイン」、<http://www.afpbb.com/articles/-/2622243?pid=4372773>、最終アクセス2013年11月2日）。

ロバート・キャバは有名だが、彼の生い立ちは名前ほど知られていない。戦場カメラマンの代名詞とも言える人物は、今からちょうど100年前の1913年10月22日、ハンガリーのブダペストにユダヤ系の両親の間に生まれた。彼の名前は、ハンガリー語でフリードマン・エンドレ、ドイツ語ではエンドレ・フリートマン、フランス語でアンドレ・フリードマンと発音される（pp. 22-23 参照）。当時のハンガリーはオーストリアと二重帝国を成していたが、第1次世界大戦が終結した1918年にオーストリアから独立した。

キャバの両親は婦人服の仕立屋を営んでおり、比較的裕福だったが、ユダヤ系として差別を受ける中で、若いキャバは政治活動に関わっていった（p. 23）。1931年にドイツに渡り、ジャーナリズムを勉強していたが、世界大恐慌によって両親の資力が尽きたので、言葉ができなくてもジャーナリストになる方法として、写真家の道を志した（同上）。キャバはベルリンでフォトジャーナリズムを学んだが、1933年にナチス政権が誕生すると一時ハンガリーに戻り、数か月でパリに逃れた（p. 24）。当初は本名で写真を撮っていたが、一向に売れなかったため、恋人のゲルダ・タロー（Gerda Taro, 1910-1937）とともに、「有名なアメリカ人写真家 ロバート・キャバ」という架空の人

物を創り出し、写真を売り込んだ (pp. 27-28)。

実は、ゲルダ・タローも本名ではない。本名はゲルダ・ポホリレ (Gerda Pohorylle) で、ドイツのシュトゥットガルトに生まれた東欧系のユダヤ人だった。ゲルダとキャバの出会いから恋人になるまでの過程は劇的である (pp. 25-27)。さらに驚くことに、「タロー」は、パリ・モンパルナスの芸術家仲間の岡本太郎に由来する (p. 28)。キャバは、モンパルナスで知り合った川添浩史のアバルトマンに居候させてもらうほど一時は困窮しており、川添の紹介で毎日新聞の仕事をさせてもらっていたが、川添と付き合っていたパリ在住の日本人の中に岡本太郎がいた (p. 29)。評者にとって、岡本のイメージは「芸術は爆発だ」の名文句と、1970年の大阪万博 (日本万国博覧会) のために設計した「太陽の塔」である。パリ時代の岡本にキャバとそのようなつながりがあったとは。まさに「縁は異なるもの味なもの」ではないか。なお、川添は戦前から国際文化交流にかかわってきたが、1960年に麻布でレストラン「キャンティ」を開いた人物でもある (<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/j/man-detail.cgi?id=32>, 2013年11月25日アクセス)。

キャバはやがて、スペイン語のできるゲルダとともにスペイン内戦の取材に行く。「崩れ落ちる兵士」が『ライフ』誌1936年7月12日号に掲載されると、彼は一躍有名となった。ゲルダが1937年7月に突然の死を迎えた後も、キャバは日中戦争、1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦と、戦場を駆け巡った。第2次世界大戦後の1947年、仲間たちとともに写真通信社「マグナム・フォトス」を設立した。1954年3月の第五福竜丸被曝事件を取材し、その傍ら市井の人々の撮影を楽しんだ。東京駅のホームに立つ男の子を映した「東京駅」(1954年4月18日撮影) で見せたカメラマンの視線は優しく、暖かい。1954年5月25日、インドシナ戦争の戦場に入ったキャバは地雷に接触し、波乱に満ちた生涯を終えた。

\*\*\*\*\*

沢木耕太郎は、キャパの伝記作家リチャード・ウィーラン (Richard Whelan, 1946-2007) の翻訳作業をしながら、写真の真贋論争が気になっていた (p. 30)。ウィーランはキャパの弟コーネル・キャパの全面的な協力を得て伝記を執筆したため、兄の作品を守ろうと尽力した弟に対する遠慮もあったと推測されるが、「崩れ落ちる兵士」が最初に掲載されたフランスの写真週刊誌『ヴェ』1936年9月23日号を慎重に検証したという (pp. 31-34)。ウィーランが件の写真を戦場におけるものと断定したエッセイは、末尾の参考サイトに掲載した。

一方、著者はウィーランの著作を翻訳する過程で、写真は兵士が狙撃された際に撮影されたものではない、と考えるようになった (p. 41)。その疑問を確信に変えてくれたのが、小説家の大岡昇平 (1909-1988) である。大岡は、京都帝国大学仏文科を卒業して会社員となったが1944年に召集され、フィリピンでアメリカ軍の捕虜になった。戦後は、1949年に『俘虜記』で第1回横光利一賞を受け、その後も『野火』、『レイテ戦記』(毎日芸術大賞)と、出征体験に基づく小説を著した (<http://www.shinchosha.co.jp/writer/987/>, 2013年11月3日最終アクセス)。大岡は、沢木の持ち込んだ写真に映る兵士たちの姿勢と銃の構え方を観て、兵士たちは戦闘中でなく演習中だったと断言した (pp. 43-44)。歴史のミステリーを解決するには、折々に重要なヒントを与えてくれる人物がいる (この「いる」は、「居る」と「要る」の双方の意味である)。当時存命だった大岡の「鑑定」を得られたことは、著者にとって調査への大きな原動力になったのではないか。

その後、キャパの写真のモデルとなった兵士の身元と、1936年9月5日にセロ・ムリアーノで頭部を撃たれて戦死していたことが判明する (pp. 46-47)。さらに、現地を訪問した日本人が、現地にある「トリアルバレスの丘」と「崩れ落ちる兵士」の地形がぴったり合致したという記事を毎日新聞に掲載した (pp. 55-56)。だが、その記事は著者の疑問を一層膨らませるだけであった (p. 56)。

著者が「崩れ落ちる兵士」について再度調べようと思ったのは、先述した

2009年のAFP通信の記事を読んでからであった（p. 71）。記事が掲載された翌年の夏、著者はセベリアに在住する知り合いの日本人に連絡し、『ペリオディコ』紙の新説は、J. M. ススペレギという大学教授の研究結果に基づくことを知る（p. 72）。2010年、著者は、セロ・ムリアーノのあるコルドバ地方から800km離れたバスク地方に住む同教授を訪問した（pp. 74-75）。ここで、運命の巡り合わせのようなことが起きる。パイス・バスコ大学で映像論を教える教授の母方の曾祖母はバスク地方に住み、スペイン内戦勃発後フランスへ避難しようとしたが、1936年9月4日に海岸でカメラマンに自分の姿を取られた（p. 75）。だが、月日が経つうちに、腰を下ろして顔を覆った老女の写真は、ゲルニカの惨劇を示すものとして利用された（同上）。ススペレギ教授は、「本来の文脈を離れて別の意味を付与されるようになってしまった作品について調べる」（p. 76）ライフワークの一環として、キャバの「崩れ落ちる兵士」を取り上げたのであった。第4章には、教授がエスベホ説にたどり着くまでの過程が詳細に記されているが、これだけでドキュメンタリー番組を1本制作できるほど、驚きと感動に満ちている。

沢木は「写真は嘘をつく」（pp. 75-76）と断言する。この一節を読んで、評者は1991年の湾岸戦争で油にまみれた水鳥の写真を即座に思い出した。あの写真は、多国籍軍の攻撃に巻き込まれて死んだ民間人より、イラク軍の破壊した油井から流れ出した原油にまみれ、飛ぶことができなくなった水鳥の方を哀れに思わせた。いつの時代にも、情報を批判的に分析できるメディア・リテラシーが個々人に求められている。

本書に話を戻そう。著者は文字通り足を使い、撮影現場とされた地などを丹念に歩く。調査は数年以上にわたった。現地の空気の臭いをかぎ、天候を経験し、風景を眺めることで気付くこともあるから、この時間は無駄でなかったであろう。

読者の楽しみをとっておくため、本書の結論だけ述べると、「崩れ落ちる兵士」は、モデルの兵士は演習中に足を滑らせただけで、しかも撮影者はキャバではなく、恋人のゲルダだった（p. 296）。しかし、女性戦場カメラマン

の草分けだったゲルダは、戦車に轢かれて27歳で亡くなってしまふ。これが、著者が本書のタイトルを「キャパの十字架」とした理由に関係してくる。

著者の結論は、これから歴史家をはじめ大勢の人々による検証を経ることになるが、現時点で最も有力な説と評者には思えた。今後、他の研究者やジャーナリストが本書の説をどう検証していくかが楽しみである。

本書に基づくNHKの番組「NHKスペシャル 沢木耕太郎 推理ドキュメント 運命の一枚 ～“戦場”写真 最大の謎に挑む～」(初回放送2013年2月3日)では、現代の文明の利器コンピューター・グラフィックスを用い、撮影者の位置、カメラのアングルなどを詳細に検討して、沢木説を鮮烈に描き出す。本書を通読してから番組を観るのもよいし、あるいは番組を観てから本書に入ってもよいだろう。

最終的な真贋論争がどう決着するにせよ、「崩れ落ちる兵士」の写真が持つ強力なイメージは、スペインにおけるファシズム勢力を糾弾する共和国側のプロパガンダに使われた。そのような例は歴史上枚挙にいとまがない。

本書を読み終えた読者には、キャパのエッセイ『ちょっとピンぼけ』をぜひ手に取ってもらいたい。軽妙洒脱な文章の中に、ダンディーなカメラマンの斜に構えた笑顔が浮かび上がってくるだろう。ノルマンディー上陸作戦の直前でさえ、彼はユーモアとおしゃれを忘れなかった。そうでもしなければ、心の均衡を保てなかったのかもしれないが。

最後に、本書に関連する参考サイトを本稿末尾に付した。キャパの作品は「マグナム・フォトス」の公式ホームページで鑑賞することができる。ノルマンディー上陸作戦の写真はもちろん、アンリ・マティスの制作風景、パブロ・ピカソのおどけた顔など、多様な写真が掲載されている。『ライフ』誌のバックナンバーはLIFEのホームページ (<http://life.time.com/>) に掲載されているが、とくにHistory (<http://life.time.com/history>) を勧めたい。グーグルのイメージ検索にも、キャパの作品を集めたサイトがある。読者の参考になれば幸いである。

＜参考サイト＞

※英文タイトルの大文字小文字は原文のままである。

NHK 総合「NHK スペシャル 沢木耕太郎 推理ドキュメント 運命の一枚  
～“戦場”写真 最大の謎に挑む～」(初回放送2013年2月3日)

<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2013/0203/> (2013年11月30日最終アクセス).

NHK Eテレ「日曜美術館 ふたりの“キャバ”」(初回放送2013年3月3日)

<http://www.nhk.or.jp/nichibi/weekly/2013/0303/> (2013年11月30日最終アクセス).

NHK BS プレミアム「ロバート・キャバ生誕100年 キャバが愛した三人の女」  
(初回放送2013年3月31日)

<http://pid.nhk.or.jp/pid04/ProgramIntro/Show.do?pkey=700-20130331-10-08759>  
(2013年11月30日最終アクセス).

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館企画展「マグナムを創った写真家たち～キャ  
バ, カルティエ=ブレッソン, ロジャー, シーモア～」(開催期間2012年9月1  
日～2012年11月30日)

<http://fujifilmsquare.jp/detail/12090101.html> (2013年11月30日最終アクセス).

横浜美術館「ロバート・キャバ/ゲルダ・タロー 二人の写真家」(開催期間 2013  
年1月26日～2013年3月24日)

<http://www.yaf.or.jp/yma/jiu/2012/capataro/> (2013年11月30日最終アクセス).

BBC. “Robert Capa at 100: The war photographer’s legacy.” 22 October 2013. Available  
at <http://www.bbc.com/culture/story/20131022-robert-capa-photo-warrior> (last vis-  
ited November 30, 2013).

Estrin, James. “Robert Capa: Finding a Fearless Photographer’s Voice.” October 22,  
2013. Available at [http://lens.blogs.nytimes.com/2013/10/22/finding-a-fearless-  
photographers-voice/?\\_r=0](http://lens.blogs.nytimes.com/2013/10/22/finding-a-fearless-photographers-voice/?_r=0) (last visited November 30, 2013).

International Center of Photography. “CAPA AT 100.” Available at [http://www.icp.org/  
robert-capa-100](http://www.icp.org/robert-capa-100) (last visited November 30, 2013).

LIFE. Available at <http://life.time.com> (last visited November 30, 2013).

LIFE photo archive hosted by Google. Available at [http://images.google.com/hosted/  
life](http://images.google.com/hosted/life) (last visited November 30, 2013).

Magnum Photos. “Robert Capa: American, b. Budapest 1913 - d. Indochina 1954.”  
Available at [http://www.magnumphotos.com/C.aspx?ERID=24KL535353&VF=  
MAGO31\\_10\\_VForm&VP3=CMS3](http://www.magnumphotos.com/C.aspx?ERID=24KL535353&VF=MAGO31_10_VForm&VP3=CMS3) (last visited November 30, 2013).

PBS (Public Broadcasting Service). “Reporting America at War—The Reporters —

- Robert Capa.” Available at <http://www.pbs.org/weta/reportingamericaatwar/reporters/capa/> (last visited November 30, 2013).
- PBS. “Reporting America at War—The Reporters —Robert Capa Photo Gallery.” Available at <http://www.pbs.org/weta/reportingamericaatwar/reporters/capa/photo1.html> (last visited November 30, 2013).
- Nolan, Steven. “The celebrated work of photographer Robert Capa, famous for capturing some of the world’s most fearsome battles, who would have been 100 this week.” *MailOnline* 19 October 2013. Available at <http://www.dailymail.co.uk/news/article-2467382/Incredible-war-photos-Robert-Capa-born-100-years-ago-week.html> (last visited November 13, 2013).
- O’Hagan, Sean. “Robert Capa and Gerda Taro: love in a time of war.” *The Observer* 13 May 2012. Available at <http://www.theguardian.com/artanddesign/2012/may/13/robert-capa-gerda-taro-relationship> (last visited November 30, 2013).
- Whelan, Richard. “Proving that Robert Capa’s ‘Falling Soldier’ Is Authentic.” Available at [http://www.photographers.it/articoli/cd\\_capa/img/falling%20soldier.pdf](http://www.photographers.it/articoli/cd_capa/img/falling%20soldier.pdf) (last visited November 30, 2013).
- . “Robert Capa and the Spanish Civil War: Courage, loyalty and empathy.” Date not given. Available at <http://www.freedomforum.org/publications/msj/courage.summer2000/y07.html> (last visited November 30, 2013).
- . “Robert Capa in Love and War.” May 28th, 2006. Available at <http://www.pbs.org/wnet/americanmasters/episodes/robert-capa/in-love-and-war/47/> (last visited November 30, 2013).

# CONTENTS

Foreword .....	KUSAKA, Ryuhei	3
----------------	----------------	---

## *Articles*

Feminine Mystique and Hollywood Shakespeare:

*The Taming of the Shrew* in 1967

.....	ONO, Yoshiko	5
-------	--------------	---

Input-based Grammar Instruction

.....	SHIMADA, Katsumasa	37
-------	--------------------	----

The Deconstructible Allegory of the Failed Author-Reader Communion:

Hawthorne's "The Minister's Black Veil: A Parable"

.....	SASAKI, Eitetsu	53
-------	-----------------	----

The Wish and the Choice of the Heroin in *Jane Eyre*

.....	YOSHIDA, Kazuho	89
-------	-----------------	----

Simulation and Educational Technology

for Foreign Language Learning

.....	IWASAKI, Irene	111
-------	----------------	-----

Anthony Trollope and Ireland:

Ireland in Trollope's Palliser Series (1)

.....	FUJII, Ayako	123
-------	--------------	-----

*Nineteen Eighty-Four*:

The Pursuit of Decency and Its Failure

.....	TANIYAMA, Tomohiko	155
-------	--------------------	-----

**Note**

Notes on Usage .....TSUZUKI, Satomi 195

**Book Review**

SAWAKI Kotaro, *Capa's Cross*

(In Japanese, Bungei Shunju, 2013, p. 335) .....KARUBE, Keiko 223

**Brief Biography of Professor NAKAI, Noriaki** ..... 231

**Bibliography of the Writings of Professor NAKAI, Noriaki** ..... 233